
Another World Labyrinth

銀

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Another World Labyrinth

【Nコード】

N7922Q

【作者名】

銀

【あらすじ】

《旧題：異世界迷宮の改訂版です》

アパートの階段から落ちて死んでしまって異世界への蘇生の名のもとに神に厄介払いされて迷宮のある異世界に来た男、黒木相馬（25）。
神をヨイショして5つ（？）の能力をもらい、探索者として迷宮に挑んでいく。

人の縁に恵まれ順風満帆に進んでいく迷宮探索だが、ひょんなことから変態行為にその身を落とす。

だが、あえて言おう。

『俺は変態じゃない』

これはジャージ男が挑む迷宮探索のストーリー

完全主人公視点で話を進めていきます。

思うだけでもダメですか？（前書き）

ご迷惑をおかけします。

思うだけでもダメですか？

なぜだ……

なぜなんだ……

「なぜ死んだんだ、俺~~~~っ！」

眼下に見える男の死体を見ながら叫ぶ俺。

すでに俺は幽霊となっている。

俺の死因は不注意における転落死。

場所は住んでいるアパートの階段だ。

アパートというものはほば外に階段があるといつてよい。

今の季節は冬、前日の朝方降った雪が少し溶けた後、寒さで凍ってツルツルという悪循環が生じ、見事に滑り落ちた。

くそっ、滑り落ちたなんて受験を控えた学生に対して失礼にも程がある。

えっ？ 俺の歳？

20代半ばですけど？

受験？ ノリで出た発言です。

そんなことよりも！

「立て！ 気合いで立て俺っ！」

なんとか、なんとか生き返れ。

俺の人生なんてまだまだ先があるだろうが。

80くらいまで生きるとしてあと50年以上もある。

なんとゆーかもつたいない。

っ！か結婚その他、諸々やりたいことがまだいっぱいあるんですけど！

やりたいゲームやまだ完結していない漫画の続き、そして幸せ家族プラン。

くっそー、娶った嫁にすでに子供がいて、めちゃくちゃ可愛がつてファザコンに仕立てあげる夢が……

怨むぞ、神よ

『怨むな、人よ』

めちゃくちゃ威圧感をもつ女みたいな声が聞こえた。

ま、まさか神がここに？

辺りを見回すとなにやら大きな光の塊がある。

「これが、神？」

『様をつける、人』

「あつ、はい。神様」

しかしまた声からして美人のお姉さんとか来るのかと思ったのに期待ハズレだ。

『期待ハズレとはなんだ、人』

「す、すいません」

さすがは神、心を読めるのか……

『様をつけると言っている。良いか、神とはもともと丸くて大きな光のかたまりだ』

どっかで聞いたことあるような。

『あの芸人のネタは正解だ』

そうなんだ。

『それはそうとさっさと成仏しろ』

「そ、率直すぎる……」

それはないだろう。

死んだんですよ、俺？

ソレを受け入れることができないでいるのに……

『受け入れる』

「そんな殺生なっ！」

なんて理不尽なんだ……これが神、いや神様。

『ではどうすればいい？』

「生き返らせてください」

即答です。

『無理だ。この世界のお前の人生は終わったのだ』

「嫌だっ！ 生きて、かわいい女子とイチャイチャしたいんやっ
くっくっ！」

『でもこの世界で生き返らせるのは無理だ』

くそっ……ん？ この世界？

それって違う世界ならいっていうこと？

『……………それならオツケー』

「マジで？」

『この世界において死んだという事実が存在するお前を生き返らせるのはシンドイの다가違う世界となれば話は別だ』

光明だ。

ヤバい、神様ヤバい。

『希望は？』

「希望までっ！ いいんすか？」

『気分しだいで如何様にもしてやる』

なんというサービス精神旺盛な神様なんだ。

これは全世界のオタクな方達の夢である二次元の世界へ……

『無理だ』

「なぜですかっ！」

目から液体出てくる。

『あれは制作者の創造した世界だ。入ることはできない』

神はいなかった

『ここにいる』

じゃあ、俺を二次元の世界に……

『無理だってば』

絶望した……絶対成仏なんかできない。

『二次元の世界とやらは無理だが、近い世界なら可能だ』
「近い世界？」

『なんか剣とか魔法を使う世界に行けばいいんだろ？』
「は、はい」

いきなり投げやりな感じになった。

『候補が三つくらいあるが……』

「どんなんすか？」

『人種差別激しい戦国の世界と魔王が支配する暗黒の世界、そんで一獲千金を夢見る迷宮のある世界』
「迷宮の世界で」

即答だ。

だって、他はなんか殺伐として嫌だ。

『んじゃ、その世界にお前を

「待った、待ってください」

……何？』

「付加価値とか何か特殊能力つけてくれたりしないんですか？」

ただその世界に行くだけなんてつまらない。

一応駄目元で聞いてみた。

『言ってみ』

「叶えてくれるんですか？」

『三つ』

また三つ……三が好きなのかな？

『……二つ』

「ごめんなさい！ 馬鹿にしたわけではないんですっ！ 神様最高です。いよっ世界一つ！」

『世界？』

「世界なんて矮小すぎますよねっ！ もう全部ひっくるめて一番です」

『んじゃ四つ』

「なんか中途半端じゃないですか？ 全ての頂点に立つ神様なんですから、もう一声お願いします」

『五つ』

「神様最高です」

よしっ、何にしようかな？

「そ、それじゃまずは神様と同じ力をもつ瞳をください」

某ノートに名前を書き込んで人を殺していくマンガでは、死神の眼があつて名前と寿命が見えていた。

きつとこの神様ならそれ以上のものを持っているに違いない（根拠なし）

『まず、私に眼はない』

「なぬっ？」

そーいや丸くて大きな光のかたまりだー。
眼どころか顔とか体もねーじゃん。

『だが、私にも視覚というものがある』

た、たしかに……

見えなきや神様なんてやってられないよね。

『だけどやめておけ』

「why?」

なぜだ。

『情報量が多過ぎて、人ごときの矮小な脳ではパンクして死ぬぞ?』

「そ、そうですか。んじゃあ、やめます」

『そうしろ』

「ではなんでも一つ強制的に命令できる王の力を持つ眼を……」

『あれは人にはすぎた力』

ダメか……

でも特殊な力を持つ目は是非とも欲しい。

「では、人の嘘を見破る眼をください」

『具体的には?』

ぐ、具体的にだと?

「えっと……視界に納めてる間に嘘をついたらその人の鼻が伸びて見えるとか?」

嘘がわかると聞いてまずはじめに思い浮かんだのは最終的には人間になった人形の話。

『フム、それは視線を外したあとで、対象をまた見るとどうなるの

だ？』

「そこは元通りなってる的な感じです」

いつまでも伸びっぱなしは嫌だ。

『それくらいならば人の脳でも処理できるか……だが、人間不信になつても知らんぞ？』

「そ、それは嫌だ……」

でも、能力的には是非とも欲しい。

だって嘘を見破るということはつまり騙されないということだ。よく騙した奴が悪いだとか、騙された奴が悪いだとか聞くけれど、そんなことはどっちでもいい。

でも、わかりきっていることがひとつだけある。

それは、騙された奴の負けってこと。

だから……

「でも甘んじて受けます」

『そうか。ではあと四つだ』

「それじゃあステータスを最強にしてください」

『てめーで鍛えろ』

ええええ……冷たい。

ステータス最強はお約束みたいなもののに……

「それじゃあ、加速装置みたいな能力ください」

『それはどんなものなの？』

「1秒を俺だけ1000倍の速さで動けるみたいな感じです」

要は某ライダーのクロック○アップとかサイボーグの人が持つアレ。

『できなくはないがただの人がそんなことしたら、死ぬぞ?』

「な、なんでですか?」

『1秒で1000倍の動きをするっただけで筋断裂や骨折の可能性があるし、何より空気摩擦で発火する』

たしかにあれって特殊な金属を纏った人や改造されてる人がやってることだったな。

でも、譲れないものもある。

「んじゃどれくらいならいいんですか?」

『いいところ10倍くらいだな』

「じゃあそれで」

『では、これを授ける』

すると、神様から何やら小さな光が俺に向けて放たれる。そしてそれは俺の手首に取り付き、腕輪となった。

「……………えつと」

『お望みの加速装置とやらだ』

本当に装置を渡してきた。

いや、よく考えたら特に問題はない。

「使用方法はどうすればいいんですか?」

『頭の中で加速とでも唱えればいい』

「ピ〇ラとかじゃダメですか?」

個人の素早さをあげるわけだしな。

『別にどうでもいい……要はお前が加速するイメージを持てば発動する。それでは願いはあと三つだ』

「それじゃあ、イケメンにしてください」

俺の容姿はひいき目に見て中の下だ。

イケメンは憧れる。

『人よ、今の容姿も味があってよいぞ？』

遠回しに断られた。

つーか味があるって褒め言葉なのか？

あとは何があるんだ？

そうだ

「シックスセンスをビンビンにしてください」

シックスセンス、いわゆる第六感。

直観とか予知などのいわゆる科学では解明されていない感覚のことだ。

『あと二つだ』

よし、これで危険を感じとったりのほかいろいろ大丈夫だろ。

んで次の願いなんだが……

「最強の装備を下さい」

あたかもRPGにおいてラスボス戦に挑むかのような奴をくれ。

『くれとはなんだ。くださいと言え』

「ください」

『しかし、私はRPGとやらをやったことがない。なのでお前の着ている服をお前の成長に合わせて強化されるようにしてやるっ』

着てる服ってこのジャージのこと？

「待ってください！ もっとかつちよいいのを……」

「あと一つだ」

やっちゃった……

つーか勝手に決めて、勝手に施行しちゃったよ。

まあ、百歩譲ってそれはいいでしょう。

俺の成長に合わせてとか言う部分が気になるといえば気になるが、この際スルーだ。

それにしても、最後の願いだ。

こいつはよく考えねば……

間違ってもギヤルのパンティーをくれなんて言うボケをかまそうものなら……

『それで願いは終わりだな？ それじゃあ新たな世界へとお前を送る』

嘘っ！

「なしっ！ 最後のなしっ！」

つーか声に出してない。

『思考を読める我から見れば違いがない』

そうだろうけどもっ！

徐々に俺の身体（霊体）が薄れていく。

くっ、甘んじて受け入れるしかないのか……
それにしても

「神様はなんで俺にこんなに好待遇を？」

よくあるミスで間違っただけで殺してしまったとか記念すべき第何人目の
死亡者とか？

『神は間違いを起こさないし、死がめでたいもののわけあるまい』

「ではなんで？」

『人よ……お前は怨念強すぎ。このままじゃ総てを恨み、悪霊とな
って世界の者に迷惑かけるから、成仏もしくは異世界への蘇生とい
う名のこの世界からの追放が必要だった』

それってただの厄介払い？

でも、それで第二の人生を歩めるのだから文句もない。

とりあえず行こう（逝こう）ではないか新たな世界へ

思うだけでもダメですか？（後書き）

変わっていないと言えは変わっていない（とゆるーく表現を変えたただけに見える）かも知れませんが、実は同じように見えて違うものになっています。

不法侵入しかない（前書き）

無理矢理な感じも否めないかもしれません……

不法侵入しかない

目を開けるとそこは荒野だった。

「ほんとに異世界に来たのか？」

自問自答をするが答えは出ない。
とりあえず確かめるためみよう。

「唸れ、俺の右腕の加速装置！」

言葉を発したのはノリだ。

「フーかよく考えたら荒野でやっても確かめようがないじゃん。
誰か他に人がいるのなら別だが……うん、人っ子一人いない。

……寂しい。

「フーかさつきから気になるこれなんだろう。」

俺は頭上にある物を見る。

HP	20 / 20
MP	18 / 20

なんかまるつきりRPGのあれなんだが、神様二次元っぽい世界とか言ってたよな。

これじゃまるつきり二次元だよ。

ありがとう？

まあ、これくらいの設定で良いか悪いかの判断はできねーしな。
とりあえずどこかにあるであろう迷宮とやらに行こう。

そう思つて適当に歩きだす。

と、ジャージのスボンのポケットに違和感を感じる。
「つかこのジャージ、神様に改造されたんだっけな。メーカーもので動きやすく、気に入っているのだが、変なことにはなつてないよな？」

そう思い、一応見える範囲で確認したのだが、とりあえずなんともない。

確認が終わつたところでポケットに手をつ込み、違和感のもとを取り出してみる。

女性ものの下着だつた……

「なぜ、あそこで俺はくだらないことを考えたんだ」

ものすごく反省している。

「つかこの下着未使用みたいだな。」

なぜわかるのか？

普通新品かどうかなんて判断できるよね？

別にそうゆう趣味もつてるわけじゃないんだからね。

「くっ……これがいつたい何の役になるんだ。あのだスケベ豚のお茶野郎め……」

と嘆くのはこれくらいにして、MPが減つてるのは加速装置を使った影響だろうか。

装置なのに俺のエネルギーを使用するとは……生意気だな。
嘘だよ。

「やっぱリスクもないといかんよね」

俺が発する言葉に応える声はない。
やっぱり寂しい。

「早くどつか人のいるところに行こつと」

そう呟くとまた適当に歩き出す。

方角は何となくだが、こっちの方がいい気がする。

歩き初めて数時間がたったのだろうか。

とりあえず少しの休憩を挟みつつ、歩いてきたのだが日も暮れてきて、いい加減疲れてきた。

ここらでなんか野宿に最適な場所とかないもんか。

そう思い探して見ると大きな岩が見えた。

とりあえずあの岩に近づいてみよう。

「うん、そこそこかいな」

1DKの部屋くらいならこの岩をくり抜いて作れそうだ。

そんな感想を抱きながら岩の周りをぐるりと回る。

と、何かに躓いて転んでしまう。

「いつてー……なんだよ……ひいつー!」

自分の躓いたものをよくよく観察して見れば、それは人の白骨化した遺体だ。

さ、殺人事件？

いや、多分ここで野垂れ死んだんだろう。

「俺もこうなるのかも知れないな……」

ビックリはしたのだが、それよりは自分も今後こうなってしまいかもしれないという恐怖の方が大きい。

それは、生々しい腐敗した死体ではなく、白骨だということが関係しているのだろう。

それにしても、人里までどれくらいあるのだろうか。

「ん？」

死体の側に何かを見つけた。

それは前の世界では全然関わりがなかったものだ。

「剣か……」

鞘に納まったそれを手にとって抜いてみる。

真つすぐな両刃の剣がその姿を現す。

いわゆるロングソードという奴だろうか。

この人死んでんだし、護身用に拝借しよう。

はつきり言っただけの盗っ人の行為ではあるが、致し方ない。

誰だって自分の身はかわいい。

「ごめんなさい」

謝って許されることではないかもしれない。

でも、言葉だけでもかけてあげたかった。

『別にもう使えないからいいんだけどね』

あれ？

どこからか声が聞こえたような……

見上げれば、そけには立派なヒゲを生やしたオッサンがいた。ただひとつ違うのはその人が半透明这件事情だけ。

「誰？」

『な、お、お前……オレが見えるのか？』

このテンプレ的な反応は

「もしや、幽霊さんですか？」

『お、おお！　そこで死んでるのがオレだ』

や、やっぱり……

幽霊って本当にいるんだ！。

と数時間前までは自分も同じだったというのに、そんな感想を抱いてしまった。

この世界って幽霊が見える世界なのか？

でも、この人の反応を見るにそんなことはないっばいな。

「えっと……死因とか聞いても？」

『餓死だ』

ああ、そうなんだ。

『くっそ、オースティアまであと少しというところだったのに……』

オースティア？　街の名前か？

「ちなみにそのオースティアまではあとどれくらいですか？」

『あん？　そうだな……半日くらい歩けば着くかな』

そりゃ、あともう少しってとこだったな。
無念で成仏できないのもわかる気がする。

『ところで、お前さんにその剣をあげたわけだが……』

なんだ？ 返せってか？

本人が出てきた以上仕方ないか……

そつとロングソードを死体の側に戻す。

『いや、違う違う。それはお前さんにやるよ。ただちょっとだけお願いを聞いてくれよ』

「なんですか？」

聞くだけはタダだ。

埋葬してくれとか、愛しのあの娘に恋文を渡してくれとかが一般的かな。

『その身体、少しだけ貸してくれないか？』

「なんか怖いっす」

『大丈夫。痛くないから』

そう言っつて実は痛いのがお約束だ。

っーかそもそも

「何のためにとり憑くんですか？」

『そ、そりゃあれよ。成仏する前に地面を踏む感触を記憶に焼き付けたいっていうささやかな願いだよ』

純粹な願いだし、叶えてやりたいものだ……それが本当のことなら

ばな。

何か鼻が伸びてる。

これはあれだ神様にもらった能力が発動してる。

つまりは嘘をつかれてる。

つか、幽霊にも有効なんだな……

「本当はどう思ってるんですか？」

『いや、本当だって！ 別に他意はないよ』

また伸びた。

やっぱり嘘なのか。

だとすれば少し揺さぶってやる。

「とか何とか言って俺の身体を乗っ取るつもりなんじゃないっすか？」

『ばば馬鹿じゃないのか！？ そそそんなこと考えてるわけないだろ』

動揺しすぎだ。

鼻も伸びてるから嘘だとわかるのだが、そうしなくてもこれはわかる。

「えっと、お断りします」

『な、なんだと？』

「いや、流石に乗っ取られるのは嫌なんで」

『チッ、ばれちゃあ仕方ないか。こうなったら実力行使で無理矢理奪わせてもらっつ！』

そうくんのっ？

いや、当然といえば当然か。

どうしよう……対抗手段がない。

『お前さんの身体、いただくぞっ！』

ヤバい……こうなったら

「観自在菩薩行深般若波羅蜜多時……」

十代の頃、先輩の修学旅行のネタ土産としていただいた般若心経を
これまたネタで覚えた俺はそれを唱えてみる。

はつきり言つて異世界で通用するのか不安ではあるが、それ以外に
選択肢が浮かばなかった。

『ぐっ……な、なんだこれは』

オッサンが苦しみだす。

効果ありだ。

よりいっそうの念を込めて唱える。

『く、くっそ……ようやくまた……』

オッサンは消えてしまった。

うーん……ちよっぴり罪悪感。

でも、乗っ取られたくないし、別にいいか。

名前くらい聞けば良かったかな……

一応オッサンはロングソードをくれるって言つたまま、消えちゃっ
たから有り難くいただいておこつ。

それにしても、なんで幽霊なんかが見えたんだ？

もしかして一回死んだことと関係あるのか？

それで靈感が……待てよ、靈感？

はっ！ よく考えれば靈感もいわゆる第六感に分類されたりするじゃない。

もしかしてそのせい？

ヤベー……自ら進んで欲しちゃったよ……色んな霊とか見えるんだろ？

ホラー映画とかはあんまり得意じゃないんだけどな。

剣を持って、その場から離れる。

流石にここで野宿するのは嫌だし、別の場所を探そう。

それから俺は別の少し小さめの岩を見つけてそこで野宿し、目が覚めるとまた、歩きだした。

疲れた。

非常に疲れた。

野宿したところから感覚に従って歩きはじめてから半日が経った。

その間こまめに休憩を挟んでいたが、空腹と疲労を覚えた辺りから

HPとMPの両方が減ってきた。

今の俺のHPなどは

HP	12 / 20
MP	08 / 20

である。

MPの減りが著しい。

あのあと少し経ったらMPは回復したのだが、疲れにより減りだした時はHPを上回る勢いで減った。つまり、疲労は体力的よりも精

神的にきていると考えていい。

回復するには休むのが1番だろうが、そんな場合ではない。
目の前に町らしきものが見えているからだ。

今まで人っ子ひとりいない荒野を進んで来たのだ。

いい加減誰かに会いたい。

故に疲労でへばっている場合ではないのだ。

心なしか軽くなった足取りで町を目指す。

俺の新たな人生の開幕だ。

「身分証がないものは通せない」

絶望した。

門番のごつついオッサンに町へ入ることを拒否された。

なぜ、なぜこんなことに……

町に入れなきや意味ないじゃん。

ほら、門のなかは大勢の人で溢れている。

触れ合いたい、もっと多くの人と触れ合いたい。

丸一日荒野を歩いた俺のテンションはおかしいことになっている。
かくなる上は……

門番から見えないところで出来るだけ近いところに移動し、腕輪に
触れる。

そして門番がよそ見たところを見計らって

【加速】

世界が少しだけゆっくりになる。

そしてそのなかで俺は普段通りに動くことができる。

だとしても10倍ということは大したことができるわけではない。
なので門番の隙をつき、全力疾走で門をすり抜け中へと入る。
そしてまた門番の視界に入らない場所に隠れて加速状態を解く。

「ぐおっ、いてえ……」

身体に無理な動きを強いるためなのか、身体にかかる負担が大きい
みたいだ。

まあ、オリンピック選手よりもだいぶ速いからね。
動いてる途中からなんか痛いと思っていたが、解いたら更にきた。
だが便利。

俺はこのためなら多少の犠牲（痛み）は惜しまないぞ。
それにしてもと頭上を見る

H P	1 2 / 2 0
M P	0 3 / 2 0

H Pは減っていないがやはりM Pは減っている。
俺の体感時間でいうと加速装置使用十秒に1ずつM Pを使用してい
る感じだ。

まあ、こうゆうことは少しずつ慣れていこう。

とりあえず不法侵入は成った。

……だって身分証とか用意できるわけねえもん。
さあ、飯を食おう。

しまった……金がない。

俺は悩んでいた。

無論金のことである。

わりと一番大切なことではなからうか。

くそっ、異世界にチートっぽい能力を持って行けるということに浮かれ過ぎてた。

何がギャルのパンティーだ。

こんな糞の役にも立たないもんよりも金、つまりはMONEYが必要だろうが

唯一といっていい持ち物を握りしめながら後悔する。
と、肩を叩かれる。

「なんだよ！」

自分の不甲斐なさのうちひしがれていた俺は若干ではあるが声を荒げる。

そこにいたのは武装したひよろりと背の高い優しそうな顔の兵士（男）だった。

「な、なにか？」

門番とのやりとりで言葉が通じるのはわかっているので尋ねてみた。

「私ね、この迷宮都市のね、警備兵なのよね。おたくね、もしかしてね、最近ここきた人？」

「イ、イエス」

不法侵入の件か？

ヤバイぞ……ばれてたのか。

「うんとね、最近ね、下着泥棒がね、出てんのさ」

……ん？ 雲行きがなんだかおかしくなっ

「とりあえず詰め所まで来てくれるかな？」

ある意味不法侵入よりも嫌な理由で連行されました。

「いやね、ごめんね」

「仕事なら仕方ないですよ」

とある食堂にて件の兵士と飯を食っている。

あのあと運よく真犯人が捕まったという連絡が入り、なんとか切り抜けることができた。下着が未使用だったのも理由としてでかい。

まあ、そのあとのなんで女性用の下着を持っていたかの追求はめちやくちや困ったので恋人へのプレゼントとありもしない嘘でごまかしておいた。

だが、いつかほんとに恋人を作ってる。

それはそうとこの兵士、名前はジャックリバーは顔の通りいい人だった。

間違いで捕まえたお詫びと称してこうして飯を奢ってくれている。名前が某切り裂き魔とニアミスしているのがまたいいではないか。

「それはそうとね、君は迷宮探索にね、来たんだろ？ どうだった？」

どうだった？ と聞かれてもな。

「まだ行っていないんだ」

「そつか、それならね、今からね、探索者ギルドに行くんだね」

ギルド？

よくわからんがとりあえず頷いておけ。

「そつか……場所はね、わかるかい？」

こゝこれは神の助けか？

「案内してくれないか？」

「いいよ。ご飯のあとにね、行こうか？」

「是非」

俺がそう言つとジャックは微笑んで頷いてくれる。
な、なんていい奴なんだ。

後光が見える。

俺達は会話を楽しみながら食事を続けた。

不法侵入しかない（後書き）

10倍の速度というと分かりやすく言えば全力疾走で1000メートルを15秒で走ると仮定するならば、時速240キロで走れます。

ギルドにて（前書き）

ご都合主義です

ギルドにて

ジャックと食事をしながらこの都市のことを聞いた。
要約すると

太古の昔、魔王率いる魔物たちが人間達を蹂躪していた。

それに対抗するために人は神に救いを求め、神が人に与える試練として迷宮を創った。

その最奥に至ればなんでも望みが叶う。

迷宮は世界中にいくつか創られたのだが、そのなかでもここ迷宮都市オースティアの迷宮は最大最難関と言われ、今だ踏破したものはいないとのことだ。

魔王率いる魔物たちに関しては他の迷宮を踏破した者たちによって倒されたらしい。

だったらこの迷宮は？ と聞かれれば強くなるのに効率的で、なおかつ迷宮内で手に入れるものは高く売れるなどの探索する者にとっていいことづくめ。

俄然やる気が出てくる。

ちなみに踏破された迷宮は徐々に朽ちていく傾向にあり、今では迷宮探索といったら基本的にオースティアの迷宮でのことをいうらしい。

「……とまあね、こんなとこだね」

「勉強になったよ。サンキュー！」

「それじゃあね、会計してね、ギルドに行こうか」

ジャックが席を立ったので俺も立ち上がる。

そしてレジで支払いを済ませる。

この都市は中世ヨーロッパ的な町並みにも関わらず現代的な技術も

多種多様に見受けられる。

先程の食事の会計の時にあったレジがひとつの例だ。
他にもいろいろあるが何より嬉しかったのは

「日本語っていいなあ……」

そう、言語だけでなく文字も日本語なのだ。

ぶっちゃけヨーロッパ風な日本に暮らしているかのような感覚だといえは伝わるだろうか。

とはいっても歩いている人は普通ではない。

約半数の人が鎧やローブを着ていたり武器を携えており、また顔がわんわんと吠える動物なムキムキの人がいたり、耳が長く尖んがっている人や角が生えている人もいる。

よくできたコスプレのようにも見えるのだが、そうではない。

これがこの現実なのだ。

おら、なんかすっげえワクワクしてきたぞ。

「何してんの？ 行くよ」

「あつ、はい」

ジャックに促され後に続いて歩く。

数分ほど歩くと大きな建物が見えた。

「あそこがね、ギルドだよ」

ジャックが指差す先を見る。

建物の看板にはデカデカと

《探索者ギルド》

の文字が書かれている。

……よかった！。

実はジャックは悪い人間で俺を騙して裏路地に連れ込んで惨たらしい目に遇うことも予想してたからな。

無事についてほっとしてます。

ごめん、そしてありがとうジャック！

「んじゃね、私はこれでね、死なないようにね、気をつけてね」

そう言っているとジャックは元来た道に戻って行く。

「ありがとうございました！」

その背中に向けて礼を述べると手を挙げて応えてくれた。

かつけえ〜。練習しようかな、アレ。

ギルド内は広々としていた。

例えるなら市民体育館くらいだろうか。

そこには受付のようなものが五つ並んでいる。

またそれらとは離れたところに受付のようなものがあり、眼鏡をかけた爺が気持ち良さそうに眠っている。

また建物の中央には郵便局や銀行などにある記入用の台がある。

俺はとりあえず一番空いている受付に向かう。

つーか真ん中の受付が異常に混んでいて他が割と空いていた。

受付にいたのは妙に貫禄と圧迫感があるふくよかな中年女性だった。

この女性を仮にマダムと呼ぶことにしよう。

マダムの横をちらりと見るとえらい美女が受付に座っている。

やたら並んでいるのはこの子目当てか！

……失敗した。俺もこっちにすれば良かった。

「おい、あんた。用件を言いな」

「す、すいません。ギルドに登録したいんですけど」

「あつちの記入台で必要事項書いて持ってきたな」

マダムが先程見た記入用の台を指す。

「ありがとうございます、お姉さん」

「余計な世辞はいいからさっさと書いて持ってきたな」

とマダムに追い払われながら記入台に向かう。

マダムめ、口ではぞんざいに扱いつつも表情は嬉しそうだったな。

これはもうお姉さんで推していくしかあるまい。

ギルド登録用紙と書かれた紙を一枚とペン（普通のボールペン）をとる。

なにになに？

お名前

黒木相馬つと

年齢

25歳だね

探索者志望動機

んゝ難しいな。昔からなりたかったでいいか。

と、項目は三つか。

意外と少ないんだな。

書き上がったギルド登録用紙を持ってマダムのところに行く。

美女のそこに行きたいのは山々だが、並びすぎだよ。

待つのは嫌いではないが、別に好きでもない。どうせだったらすぐ

に済ませられる方がいい。

「お姉さんお待ちせしました」

「別に待つちやいないよ。ほら、よこしな」

マダムに用紙を渡すとマダムはパソコンのようなものに文字を打ち込む。

「次はこれに手を置きな」

差し出されたのは平べったいものだ。なんというか指紋認証の機械に似てる。本物見たことねえけど。

差し出されたそれに右手を置く。

すると微量の機械音が聞こえる。

何してんだろ？

「もういいよ。とりあえずギルド登録は完了だ。とは言ってもまだやる必要があるけどもう少し時間がかかるからその間に簡単に説明してやる」

「よろしく、お姉さん」

「ギルドは探索者の登録からお金の預かり、引き出し、それから迷宮探索へ入るための報告のためにくることになる」

「迷宮探索の報告？」

「そう、迷宮に入るためにはいちいち受付に報告する必要がある。これは生存確認の意味合いが強い。それを終えた後はそっちの扉から迷宮の入口に行く」

マダムが俺の右手側の扉を指した。

「それで迷宮から出た後で必要なのはあっち」

マダムが眠りこける爺のいる受付を指す。

「あそこで寝てる爺はアイテムの買い取りをやっている。ま、どれも定価だから賢い奴は高く買ってくれる商人に売ってるんだけどね。一応買い取りだけでなくアイテムの鑑定もやってるから何かわからないものがあつたら持って行きな」

「了解です、お姉さん」

「そのお姉さんっての推し過ぎると馬鹿にされてる気分になるからもうやめな」

「ごめんなさい」

不快にさせてしまったか？

「別にいいよ。んじゃ、出来たみたいだからこれ着けな」

といって渡されたのは指輪だ。

「これは？」

「迷宮の指輪だよ。探索者ギルドに所属している証だ。いいからまず着けな」

俺は指輪を嵌める。

右手の人差し指にちょうど大きさだった。

「んじゃ、外してみな」

なぜに？

なんとゆうか無駄な時間を過ごしちゃったのだろうか。

「あれ？」

抜けない。

指輪が抜けないんですけど！

「とまあ、そのように基本的にもうその指輪は抜けないからね」

最初に言っただけだった。

ちよつと焦ったじゃん。

「んじゃ、オープンって言ってみな」

「オープン」

言われた通りにやってみると

探索者ランク I

レベル 1

HP 20 / 20

MP 16 / 20

と頭上に表示される。

よく見ればジャックのおかげなのか、えらく回復している。

とゆうか新たにレベルとランクが表示されている。

「探索者ランクとレベルが表示されたね？ それはあんたの指輪に触れた人間に見せることができるからね。それでレベルってのはあんたの強さの指標だ。迷宮でモンスターを倒すと経験値ってのがあんたに入って一定の量になるとレベルが上がる。迷宮の階層÷2の

端数切り捨てが適性レベルって言われてるから参考にしな。んで、探索者ランクってのはあんたの探索者としての強さだね。レベルとは似てるようで違うからね。この探索者ランクによって納める税金の額が変わるからあとでこれを確認しな」

そう言っマダムは分厚い本を俺に渡す。

「んで、今日はどうすんだい？　とは言っても装備も何も整えてないみたいだし、やめとくかい？」

「できれば迷宮に入りたいんですけど……」

「死ぬかもしれないよ？」

マダムが言ってくるが先立つものがないのだ。装備を整えようにもどうしようもない。

「それでもです」

俺には神から与えられた特殊能力がある。

それさえあれば最初の方は多少の準備不足でもどうにかなるはずだ。

「わかった。迷宮探索の許可を出す」

マダムの言葉と共に一瞬指輪が光る。

「死なないように深入りはやめときな。あと餞別をやる」

そう言っマダムはくたびれた袋と銅で出来た羽の飾りをくれた。

「これは？」

「魔法のかかったアイテムだよ。こっちの袋は重量無視で道具がな

んでも各10個ずつ入る。んでこっちの羽飾りは迷宮から出るためのものさ。今回は必要ないだろうが、五階層ごとにある結界の敷かれた安全地帯で使えば地上に戻ってこれる。この銅の羽飾りだと二十五階層まで使えるからね。」

それは確かに迷宮探索の必需品と言えるだろう。

「ありがとうございます、お姉さん」

やべ、ついお姉さんって言っちゃった。

マダムを不機嫌にさせてしまったと思ったがマダムは優しい笑みで俺を見ている。

「そうやって素直なお世辞言ってくれる子なんて久しぶりだからね。いいかい、無理すんじゃないよ？ 死にそうになったら一目散に逃げな。浅い階層のモンスターならついてこれないからね」

マダム……めっちゃいい人だ。

「んじゃ行ってきます」

「気をつけるんだよ」

マダムの心配混じりの激励を背に受けながら俺は初めての迷宮探索へと向かった。

いざ、迷宮探索（前書き）

戦闘描写がありますが、見苦しいかと思えます。

いざ、迷宮探索

さて、ついにやって参りましたよ。

迷宮！

とは言っても扉の先はギルドの外だった。

外とはいってもグラウンドほどの大きさの広場が周囲を全て高さ3メートルほどの高い壁に囲まれている場所だ。

入口はギルドから入るしかなく、それ以外からの侵入は不可能ではないだろうか。

そして視線を壁から広場の中央にあるコンビニほどの大きさの社のような建物に移す。

おそらくあの建物の中に迷宮の本当の入口があるのだろう。

社に向かつて歩いていく。

俺の前には数人の探索者達がいる。

彼らのあとに続いて社の中に入った。

社の中はなんとも不思議な空気が流れていた。

その空気に若干のまれていると、社の中央に先程の探索者達が集まっているのが見えた。

何をするのかと見つめていると、淡い残光を残して探索者達が消えてしまった。

「へっ……！？」

しばし呆然としてから、彼らの立っていた場所に行って調べるが特に何か仕掛けがあるようには見えない。

「おいおい、どうやって迷宮に入ればいいんだよ……」

今が迷宮の入り方だとしたらどうすればいいのかなんてわからない。
受付に戻って聞こうか、別の探索者が来るのを待とうかと頭を悩ませていると何かの看板が目に入る。
そこには

「迷宮 一階層入口↓」

と書いてある。

自分のとんだ勘違いに苦笑いしながら看板の指し示す方向に向かう。
そこには下へと続く階段があった。

その階段を下りていくとついに迷宮に出た。

それにしてももう少しおっかない感じかと思った。

具体的には迷宮での死者の霊がうじゃうじゃいるのを予想していたのだが、ギルドの扉を開けてから彼等の姿を全くもって見ることはない。

街中の方では数人見たんだけどなー……

予想以上に死亡率が低いのかな？

迷宮内は思った以上に明るかった。

地下にあるのだから暗いだろうと勝手に思っていたのだが、そんなことは払拭された。

魔法とかが関係しているのか迷宮内の壁自体がところどころ発光しているのだ。

迷宮の通路は幅四メートル弱、高さ三メートル程とかなり広い印象を受ける。

しかし、気をつけないといけないのは、もう迷宮内にいるのだからいつモンスターが出るのかわからないのだ。

これがゲームであるのなら布の服を装備していようとガンガン進む

という暴挙も許されるのだが、あいにくと俺にとっては現実だ。
ジャージ装備で進むことに今さらながら恐怖が沸き上がってくる。
ゲームと違い死んだからといってリセットは出来ない。

また神様が出てくるなんてことはまずないだろう。

慎重過ぎるに越したことはない。

前方に見えた曲がり角に出来るだけ足音を消して近づき、そーっと
顔を出して曲がった先を確認する。

すると十メートルほど先に短い角の生えた兎のようなものがある。
しかし大きさは柴犬くらいはある。

「あれがモンスターか……」

俺にとって初めての戦闘だ。

逃げるといふ選択肢がないこともないが、今逃げようとも迷宮に挑
むなら、いつかは戦う時がくる。

その時にやろうとも結局同じことだ。

幸い今いるのは1匹だけ、つまり最初の相手としてはうってつけだ。
俺は姿を隠したまま目を閉じて深呼吸を一回して自らの精神を落ち
着ける。

「よし」

覚悟が決まり、剣を鞘から抜く。

何の変哲もないただのロングソード。

はつきり言っとうちにあった包丁の方がよく切れそうだ。

ちなみに俺はゲームではボス戦まで特技を使うなで進める男だ。

故に加速も今は使用しない。

つーかあれは体に不可がかかる。

いきなり使うのもどうかと思う。

ヤバくなっただもしくは相手が予想外に強かったら逃げるために使お

う。

曲がり角から飛び出してモンスターに向かって走る。

あと三メートルというところでモンスターが俺に気づき、視線を向ける。

だが、もう遅い。

俺は走った勢いそのままにモンスターを蹴りつける。

剣なんて使ったことないからつい足が出てしまった。

勢いのついた俺の攻撃にモンスターは少し吹っ飛ぶがすぐに体制を立て直そうとしている。

「はあっ！」

モンスターが体制を立て直す前に手に持つ剣で斬りつける。

力任せの攻撃ではあったが、手に肉を切った感触がする。

しかしモンスターはそれに大した反応を見せず、強靱そうな後ろ脚に力を入れている。

危ない。

神様に与えられたがシックスセンスが危険を知らせる。

俺が横に跳んだのとモンスターが俺に向かって跳び上がったのはほぼ同時だった。

「はあっ、はあっ……」

息が上がる。

すぐに起き上がって構える。

モンスターも体制を整え、こちらを向いている。

そしてさっきと同じように体当たりをしてくる。

まったく同じ動作だったため、今度は多少の余裕を持ってかわせた。

「あああああつ！」

そして体制の崩れているモンスターに好機とばかりに渾身の力をもつて斬りかかる。

俺は剣術など習ったことはない。

ただ片手で振った剣よりも両手で振った剣の方が威力が高いことはわかる。

両手で斬りつけた攻撃は思いのほか効いたらしくモンスターは唸り声をあげながら淡い光を残して消えていった。

「や、やったのか？」

周りを見回してモンスターが消えたことを改めて確認すると大きく息を吐いた。

ぶわつと堰をきったように汗が吹き出す。

初めての戦闘は思った以上に精神にきていたようだ。

また、俺の胸にはモンスターとはいえ動物を殺したという罪悪感のぼってくる。

幽霊を無理矢理成仏させておいてなんだが、正直気分が悪い。

でもすぐにそれを振り払う。

選択肢が少なかったとはいえ、迷宮に行くとしたのは俺自身で、迷宮内に入ったのも俺の意思。

ならばこれから進んでいくのならこの気持ちを飲み込み、慣れにくいしかない。

戦闘が終わり、決意を新たにした。

と、そこで地面に石ころのような宝石のような白い石が転がっていた。

「こんなのあったか？」

持ってみるとゴルフボールほどの大きさのくせにそれなりの重量がある。

これが最初からここに落ちていたのか、それともモンスターを倒した後に出てきたいわゆるドロップアイテムのようなものなのかかわからないが、とりあえずマダムからもらった袋にその石を入れてみた。袋は石を入れたにも関わらず重さに変化がない。

ちなみにマダムからもらった分厚い本もこの袋に入れてみたら入った。

だというのに袋はちよつと膨らんでいるくらいだ。

「そついえばこれ魔法がかつてるんだもんな……」

魔法の凄さを実感する。

いや、まあ神様からもらった能力とかもちろん凄いんだけどね。それにしてもこのジャージ、神様から改造されてたけど本当に大丈夫なのだろうか。

「あれ？ よく考えたら袋から道具を取り出す時はどうすんだろ」

そう思い、とりあえず袋を逆さにしてみるが、中からはなにも出てこない。

恐る恐る袋に手を入れてみると目の前にRPGとかでよく見るアイテム欄みたいなのが現れる。

記載されているのは白の魔石（小）という文字だ。

「白の魔石（小）か……」

と呟いたとき手になにか固い感触がしたので袋から出してみると手に先程入れた白い石が握られていた。

「なるほど、こうやって取り出すんだな」

目の前に現れたアイテム欄から取り出したいアイテムの名前を言う
と取り出せる仕組みらしい。

それにしても白の魔石（小）か……結局これなんなんだろう。

できればいいからアイテムの説明もあればよかったのにな。

取り出した白の魔石（小）を袋にまた入れて先を目指す。

いくらかも進まないうちに少し広めの空間に出た。

その先には今歩いてきた道のほかに二つほどの道が続いている。

「うーん……こっち」

勘で左側の道を進んでいく。

すると前方に先程と同じモンスターが見えた。

また、モンスターも俺の姿を見つけたらしくこちらに向かってくる。

その様子を見ながら剣を構える。

モンスターは先程の個体と同じように体当たりを仕掛けてきた。

俺はそれをなんとかかわして狙いを外して俺のいる位置から一メー

トルほど後ろにいるモンスターに斬りかかる。

背後から不意打ちしたということが効いたのか、一撃でモンスター

は背をのけ反らせる。

今度はモンスターに剣を突き立てた。

するとモンスターはうめき声をあげながら光となって消える。

すると、その光となって消えた後に先程と同じような白い石が残る。

「おつ、やっぱりこれモンスターを倒した時のドロップアイテムな
んだ」

なんか思った以上にゲームじみてるな。

なんて考えながら魔石を拾い、袋に入れる。

この行為自体とは別に悪いことではない。とゆうか普通のことだ。しかしモンスターを倒したことで油断したのは悪いことだったと言えるだろう。

強い衝撃を受けて俺は顔から地面に突っ込む。

「ぐわっ」

痛みに顔をしかめる。

完全に不意をつかれたからなのかかなり痛む。

それを堪えながら上半身を起こして、顔を背後に向ける。

襲撃者は先程まで戦っていたのと同じ兎型のモンスターだ。モンスターはさらなる追撃の構えを見せている。

「やばいつ！」

慌てて起き上がろうとするが、間に合わない。

【加速しろっ！】

とっさに加速の能力を発動させる。

体当たりのために跳び上がったモンスターの動きがスローモーションになる。

俺は起き上がると剣を両手で持ち、高く掲げて振り下ろした。

今までの攻撃と違い、俺の攻撃はモンスターを易々と切り裂いた。それもそうだ。

俺の一撃はモンスターにとっては超高速の斬撃なのだから。

加速を解くと反動で身体負担が腕に返ってくる。モンスターはそのまま光になって消えた。

それを見ながら周りを見回し、もうモンスターがいないことを確認

する。

同じようなことはできればもう二度と起こさないようにしよう。
と反省しながら頭上を見る。

H P	1 5 / 2 0
M P	1 3 / 2 0

一定の時間が経ったら探索者ランクとレベルは消えてしまった。
それよりも思ってたほどH Pは減っていない。

まあ、四分の一もなくなっただけだが、まだ探索は続けることが出来るだろう。

多分ジャージが神様によって改造されていたおかげだろうな。

じゃなかったらもつとやばかったに違いない。

とりあえず落ちている魔石を回収した。

その後数時間も迷宮を歩き回ったが、兎型のモンスター以外は出てこなかった。

それを刈っていく。

数匹目で白の魔石の他に毛皮が残ったので袋に入れて確認してみるとアイテム欄には動物の毛皮として表示された。

その後白の魔石（小）が袋の上限に達しそれ以上入らなくなった所で迷宮から出るために元来た道を引き返した。

とは言っても帰りがけにも何匹もの兎型のモンスターに出会って倒したので白の魔石がドロップされた。

これらは袋には入らないがもったいないので俺のジャージのポケットに入れていった。

どうやら兎型のモンスターは倒すと必ず白の魔石を落とし、二割くらいの確率で動物の毛皮がドロップアイテムとして落とされるらしい。

い。

今回の迷宮探索の戦利品は

白の魔石（小） 17個

動物の毛皮3つ

だった。

こうして俺の初迷宮探索は終わった。

換金してみました（前書き）

さらにご都合主義ってます

換金してみました

階段を上り社へと出る。

やはり、社の内部は不思議な空気が流れているな。

この空気は嫌いじゃない、むしろ好きだ。

そんなことを思いながら社を出る。

俺が迷宮に入ったのはだいたい昼をちょっと過ぎたくらいだったのだが辺りはすっかり暗くなっていた。

俺は剣を鞘に納めたまま手に持って歩く。

ジャージなので腰に吊り下げるためのベルトなどが無いのが若干辛いな。

そう思いながらギルドへと続く扉に向かって歩いていった。

「生きて帰ってきたようだね」

中に入ると声をかけられた。

マダムだ。

「もしかして、待っていてくれたんですか？」

「なーに言っただい。たまたまだよ。たまたま」

だよね。

つーか待たれてても若干困る。

てゆーかマダムとフラグ立ってないよね？

いや、マダムが嫌いというわけじゃないよ？

むしろ好感が持てる人物です。

ただちよっと年的に釣り合わないかな？

だってどうみても二回りくらいは違うもん。

俺がイけるのは上下一回りくらいまでだ。

ん？ とゆーことは下は13からオツケーってこと？
ないない。

さすがにそれは下過ぎる。

せめて結婚が許される16からでしょ。

それでも世間様から見ればロリコンかもしれないが……

「なにブーツとしてんだい？」

「い、いえなんでもないです」

「そうかい。んで、迷宮はどうだった？」

「凄かったです」

俺の答えにマダムは微笑みを返してくれた。

「モンスターは倒したかい？」

「はい」

「んじゃ、アイテムも拾えただろう。それなら換金しないかね」

マダムが眼鏡の爺のもとに歩いていく。

それに俺もついていく。

商人に売れば高く売ることができるとマダムは言っていたが、俺にその当てはない。

ここで売った方がいいだろう。

「クロスじいさん、起きな、客だよ」

「……………」

「クロスじいさん」

「……………」

「ジジイっ！ 起きなっ！」

「ひゃいつ！」

ビックリした……

マダム急に怒鳴るんだもん。

爺もめっちゃビックリしてるし。

心臓が止まらなくてなによりだ。

「な、なんじゃ？」

「客だよ」

「ども」

とりあえず会釈した。

「ほう……新顔じゃな」

「今日が初迷宮だよ」

「それはそれは、よう生きて帰った」

「いやあ……」

照れるぜ。

「何しとるんじゃ。さっさとアイテムをださんか！」

爺がいきなりキレやがった。

褒めたんじゃねえの？

俺は集めたアイテムを爺の前の台に並べる。

「フム、白の魔石（小）が17に動物の毛皮が3。全部で230R
じゃな」

よくわからんがどれくらいの価値なのだろうか。

「やっぱりというか新人は実入りが少ないね」

マダムが呟く。

これって少ないのか？

「すいません、俺貨幣の価値ってよくわからないんですけどこれってどれくらいなんですか？」

「ガキの駄賃程度じゃな。メシ屋で飲み物を頼めばなくなるわい」
「なっ……」

命を懸けた報酬がこれ？

あ、あんまりだ……

迷宮探索に絶望したよ。

やめよっかな。

「なーに暗い顔してんだい。最初は誰もがそんなもんさ。でも階層が下がれば手にする金の額も上がる。それが迷宮探索ってもんだよ」
「でもこれじゃろくなもの食えない……」

迷宮探索で疲れてるし、腹の虫も限界だ。

どうしよう。

外に生えてる草って食べれるのかな？

「今日はあたしが食わせてやる」

「お、お姉さん……」

ええ人や……

「お姉さん？」

「こ、こら。お姉さんって呼ぶんじゃないよ」

マダム照れてやがる。

つか爺、疑問文を挟むんじゃないよ。

マダムの機嫌が悪くなったらどうするんだ。

「んじゃマダムと呼んでいいですか？」

「マダムか……いい響きじゃないか」

おっ、気に入ってくれたみたいだ。

これで名実ともにマダムって呼べる。

「小僧、今回の報酬じゃ」

そう言つて爺が硬貨を投げてよこす。

乱暴な……

もらった硬貨は十円玉に類似した銅の硬貨3枚に百円玉に類似した硬貨2枚だ。

これで230Rか。

もらった硬貨を袋に入れる。

そしてすかさず袋に手を入れるとアイテム欄が現れ所持金230Rと記載されているのを確認する。

「7R」

ちよつとした思いつきを言ってみた。

手になんか握った感覚がするので取り出してみる。

さてどうなんのかな？

開いた手の平には一円玉に類似した硬貨が2枚に五円玉に類似した穴空き硬貨が1枚あった。

「……あれ？」

「どうしたんだい」

「いや、マダム。入れた硬貨と別なのが出てきて……」

「袋から取り出す金は適切なものになってるのは当たり前だよ」

ま、まじで？

なんという親切設計な異世界なんだ……

もとの世界の財布も見習って欲しい。

それにしても金がもとの世界と類似してんのも不思議だ。

他のはどうなんだろうな。

「ほら、用はもう済んだから行くよ」

「はい、マダム」

マダムのあとについていく。

なんというか探索者たちがマダムに対して道を開けていく。

なんかすつげえ目を合わせない人もいるんだけどマダム何者？

マダムは町をどんどん歩いていく。

そして5分ほど歩いた所で一軒の家に入ってしまった。

なんかまさしくお家って感じの建物なんだがよくある都会の隠れ家的なお店なのだろうか。

俺はマダムのあとに続いて建物に入る。

建物の中はまさにご家庭という感じだった。

「ただいま」

ただいま？

マダムがただいまと言ったということはここはマダムのご自宅なのか？

これはもしや「一飯の恩義だその若い体を愉しませな」とか要求されてしまうんじゃない……

いやいや、マダムを信じる。

そんなどこぞの物語的展開なぞあるわけが……

「あつ、お母さんお帰り」

なんか受付の時にマダムのとなりで行列作ってた美女がいた。

肩よりも少し長いくらいのフワフワの藍色の髪に優しさの滲む琥珀色の瞳。年は20にいくかないかというところで、また男の夢と希望が詰まっていそうな胸を強調したドレス調の服がなんとも似合っていた。

彼女はきつと癒し系に違いない（決めつけ）

「リカ、客を連れてきたよ」

「うん、連れて来るかもって言ってたから食事も三人分作っておいたよん」

マダムはあらかじめ客を連れて来る旨を告げていたらしい。

「っ！ お母さんで。」

これは違う意味で物語的展開発生してる。

まさに《将を射んと欲すれば先ず馬を射よ》の入口に立った状態なのか！？

「なに突っ立てるんだい。こっちきな」

マダムに招かれる。

「はっじめまして。リカどうえっす」

「……………」

「およ？ 反応なっすいんぐ？ リカちゃんは寂しいれす」

あれ？

この子若干テンションおかしくね？

「もすもす、こちらリカ。応答願います」

「く、黒木相馬です」

「クロキソーマくんねっ！ ソーマが名前なのん？」

「そ、そうです」

「んじやらばソーマくんって呼ぶねん。あたしのこととはプリンセスリカって呼んでくれたまえ」

「は、はあ……………」

「むゝ、ノリ悪いな。そこはお前のどこがプリンセスやねんってツッコむとこだよ？」

「リカ……あんた初対面で飛ばしすぎだよ」

「マダム」

天の助けだ。

正直対応に困っております。

「ぶっ…………ま、マダムってあーた。なんつーボケを…………もうダメ。アハハハハッ」

盛大に笑われてしまった。

一応ボケではなく、マジで言っているのだけどね。

「笑いすぎだよ」

「あいたっ」

マダムがリカちゃんを小突く。
なんとも微笑ましい光景だ。

「さて、ご飯にしようかね。ソーマはこっち座んな」

マダムの隣の椅子を示されたので、促されるままに座る。

「ほいほい、今日のメニューは……じゃじゃーん！ クリームシチューなので」

皿に盛られたシチューが目の前に置かれる。
食欲をそそる匂いがして腹の虫が鳴く。

「おうおう、チミは欠食児童なのかにや？ ならば腹わたがちぎれるくらい食いなはれ。おかわりもあるでよ」

「いただきます」

家主よりも先に食べるのは失礼だと思うが我慢できなかった。
あっという間に皿は空になってしまう。

「おかわりいるかい？」

「ください」

マダムのご好意に甘える。

日本人の美德はその謙虚さとか聞いたことがあるが、今の俺にはそんなこと関係ない。

「そう言えばあんた、飯食う金もなくて泊まるところはどうしてんだ

い？」

こ、これはもしやお泊りフラグ！
慎重にいかねばなるまい。

「実は決まってるじゃないんです」

「そうかい」

「大変でこわすねー」

.....

.....

会話が止まった。

もしかしてフラグではなく、ただの世間話だったのか。
たしかに、さすがにムシが良すぎるわな。

「えーっと、どっかに野宿に最適な場所知りませんか？」

幸いこの都市は温暖な気候で凍死の心配はない。

公園とかそういう場所に望みをたくす。

どうせ昨日は野宿したのだ。

一回も二回も変わらない。

「泊めてやりたいんだけど、さすがに今日会ったばかりの男、それも新人とはいえ探索者をつてのは問題あるからね。アタシだけなら別に良かったんだけど、すまないね」

「あたしは別にいいんだけど」

「ありゃ、珍しいね。あんたもソーマを気に入ったのかい？」

「そだね。ソーマくんまだ一回しかあたしをえっちい目で見てない

からね」

お、なにやらリカちゃんから援護射撃が始まったぞ。

一回エッチな目で見たっていうのは最初に胸を凝視したことだろうか。

気付かれていたとは不覚だ。

しかし、このリカちゃん。喋りはちょっと残念な感じがしてたけど性格はやはり癒し系なのか！

「ん〜でも、やっぱりいきなり泊めるのは……」

「なら、外の物置にでも泊めたげよ。野宿よりマシだと思います」

「それは妙案だね。どうだいソーマ？」

「それをお願いします」

マダムたちの提案に一も二もなく飛びつく。

俺からすれば物置だろうと寝床の確保できるのはありがたい。

「んじゃあ、ご飯のあとに案内するよ」

マダムの言葉で食事に没頭した。

結局さらに三杯ほどおかわりをした。

「ここだよ」

食事の後に案内されたのはまさに物置だった。

場所はマダムの家から出てすぐの場所。

広さはさほど大きくなく、物が整理されて置かれており、人一人がやっと寝れるスペースがある。

しかし、物置だというのに大してホコリもなく、定期的に掃除していることが伺える。

「これ、毛布だす」

「ありがとうございます」

リカちゃんの言葉は深くツツコンではダメだと食事中に理解した。渡された毛布を受け取り、礼を述べる。

「今日は疲れてるだろ。狭いところで悪いけどゆっくり休みな」
「はい」

狭いなんてとんでもない。

今の俺は屋根があるだけでも満足だ。

「んじゃお休み」

「おやすみなせーい。兄ちゃんいい夢見るんだぜい！」

「おやすみなさい」

二人が去る。

ほんとにいい人だ。

最初この都市に不法侵入した時はどうなるかと思ったがこの都市に入ってから人との縁にすぐ恵まれている。

とりあえずマダムたちにはちゃんと恩返しをしなければと考えながら瞼を閉じた。

迷宮での疲れからそう時間もかけずに俺の意識は眠りへと落ちた。

神様再び

「ソーマさん起きてください、朝ですよ」

優しい声に促されて意識が覚醒する。

目を開けるとそこには俺を優しく揺り動かすリカちゃんの姿がある。
一瞬天女かと思ったのは秘密だ。

「おはようございます。もう朝ですよ。朝食もできてますから家に入ってください」

リカちゃんはそう告げると立ち上がる。

朝飯まで用意してくれるなんて本当に申し訳ない。

しかし、リカちゃんのキャラがちよつと違う気がする。

いや、彼女は癒し系なのだ。これがデフォルトで昨日のあれはなんかいいいことがあってテンションがおかしかったとかなのだらう。

「いきなりドーン！」

「ぐへっ」

と思っいたらいきなりボディープレスをしてきた。

重力に委ねられたそれはリカちゃんの軽そうな体にも関わらずそこそこの威力となつて俺に襲い掛かる。

次いで柔らかい感触が感じられたが、不意打ちをくらって痛みに悶える俺にはそれを堪能するところではない。

「ザ・おしとやかなあたし。深窓の令嬢っぱかったっしょ？ やっぱ人を襲撃するには不意を打たないとねー」

俺の上に寝そべりながら言葉を紡ぐリカちゃん。

しかしなんだこの恋人のようなじゃれつきは。

嬉しいようなどいてほしいような不思議な気持ちでリカちゃんを見る。

「どしたん？」

「どいてくださると嬉しいです……」

「そかそか、さては朝の男な感じになってるなー？」

臆面もなくそんなことを言わないで欲しい。

俺の方が恥ずかしい。

とゆうか最近そっちの方は少し下降気味に……ゲフンゲフン

「おつ、ソーマくん寝癖ってるよん。せつかく綺麗な黒髪なのにもつたいないない」

手櫛で俺の頭を撫で付ける。

女の子に頭撫でられるなんて初めてだ。

「そだ、目玉焼きはこれから作るんだけど固焼き、半熟どっちがいい？」

俺はどちらかというスクランブルエッグの方が好きだ。

だが、わざわざ用意してもらうのにそんなこと言えるわけない。

「リカちゃんと同じで」

「あやや、あたしはいつもスクランブルエッグですたい。あんさん目玉焼きはいらんのですか？」

「ますます同じでよろしく願いします」

「はいよ」

リカちゃんは立ち上がる。
またもボディープレスがこないように警戒するが今度は何事もなく
物置部屋から出ていった。

「よし、行くか」

「おはよう」

「おはようございます」

家の中へお邪魔して昨日食事をとったところへと行くとマダムが俺
を迎えてくれる。

「ちゃんと眠れたかい？」

「おかげさまでぐっすりです」

「……あの環境で本当にぐっすり眠れたんならあんた神経図太いよ」
俺が気を遣って言っていると思っているような声音でマダムが話すが、
百パーセント真実だ。

「ほい、おまちどう」

と、リカちゃんが朝食を持ってきてくれた。
所謂洋の朝食セット。美味そうだ。

「いただきます」

さっそくトーストを口に運ぶ。

うん、美味い。

「ところで、ソーマは今日も迷宮に潜るのかい？」

マダムが問い掛けてきた。

それに対して俺は少し考える。

だって命を懸けたといっても過言ではない昨日の探索でも230Rしか稼げなかったのだ。

はつきり言って割に合わない。

かといってせつかく神様にもらった能力を活かせるの仕事が迷宮探索以外にあるのだろうか。

「悩んでるね。昨日も言っただけど迷宮の最初の方ではあんまり稼げないものなんだよ。はつきり言ってギルドには誰でも入れるんだけどあまりの割の合わなさに何人かは次からは来なくなる。でも潜れる階層が深くなれば一般人の年収を一回の探索で軽く超えるほど稼ぐことだってできる」

「ま、まじっすか……別に金にはそんなにこだわってなかったけどね」

いや、さすがに飲み物買っでなくなるくらいの稼ぎなんてのは嫌だよ？

「っーかそんなに稼げんの？」

モテる男の条件なんてルックスと経済力が大事だというのが大多数の女の気持ちだろう。

その二つを持たない男はその大多数のカテゴリーから外れる、もしくは諦めた人を見つけてモノにするしかない。

ルックスに関しては神様が拒否したためどうしようもないが、経済力に関しては道が示された。

これさえあれば俺もモテる！

「マダム、俺、迷宮探索頑張るよ」

「そうかい、なんかすごく無駄に晴れやかな顔してるね」

「ヤバイ……スケベ心を悟られたか？」

でも迷宮探索を頑張る理由はそれだけじゃないぞ。

「んで、マダムとリカちゃんに恩返しをする」

今のところはこれが一番の理由かな。

「おや」

「楽しみにしてるぜ、少年」

マダムが微笑み、リカちゃんがサムズアップをして見せる。

「んじゃ、しばらくあの物置は好きに使いな」

「いいんですか？」

マダムから嬉しい提案があがった。

「悪けりや言わないよ。そうだね、期限はあんたがあたしらに恩返しをするまでだね」

「はい、ありがとうございます」

つまり、稼げないようならいつまでも居ていいってことか。
いや……さっさと恩返しして出て行けか？

果たしてマダムの真意はどっちなのだろうか。

「それはそうとあんた、神殿に行って神様の祝福はもらったのかい

？」

「なんですかそれ？」

神様ってあのお方のことか？

「知らないで迷宮入ったのかい？」

「そ、そうですね……」

「ほんとによく生きて帰って来れたね……」

「勘が鋭いんです」

まあ、一階層を歩き回っただけだしね。

「勘ねえ……ただ運が良かったっただけだろうに。とりあえず今日は神殿に行ってきた。詳しいことはギルド指南書に書いてあるけど、それでもわからなかったらそこの神官捕まえて聞きな。あたしらはもうギルドにお勤めにいかにやらん」

「はい」

俺も慌てて口に朝食を詰め込む。

家に鍵をかけるとしたら中に俺が陣取っていては出かけることができない。

その後二人と一緒に家を出た。

そしてギルドの前でマダム達と分けれると神殿へと向かう。

神殿の場所はマダムに教えてもらった。

あと神から与えられる祝福についてはギルド指南書に記述があった。

「神の祝福」

迷宮探索の前にまずは神殿に行き祈りを捧げ神様に祝福をしてもらいましょう。

神様は多種多様な方がおり、それぞれ違った力を授けてくれます。また祝福を受けると若干の身体能力が向上します。

これらはあなたが迷宮に挑むことにおいて、きっと大きな力となってくれるでしょう。

そもそも神様とは……… <中略> …… つまり神とは我等に試練を与えると共に手助けをしてくれるのです。

また、神様に与えられた祝福は使用していくことでその力を増していき、新たな力を得ていきます。

日々絶えず精進してください。

神様の祝福ねえ……

ぶっちゃけ俺がもらった能力自体が神様の祝福じゃないのか？

そもそもあの方いわく神様ってのはもともと丸くて大きな光のかたまりらしいじゃん。

なんだよ、多種多様って……

結局は丸くて大きな光のかたまりじゃん。

どうせその光がピンクとか青とか色違いなだけだろ。

ちなみに俺の前に現れたのは白い光のかたまりの神様である。

ほどなくして神殿らしき建物に着く。

なんとゆうか神聖な雰囲気のある真っ白い建物だ。造りとしては教会とかが近いだろうか。

「あの、すみません」

とりあえず入口付近にいるガリガリのおっさんの神官さんに声をか

ける。

「迷える子羊よ、どうなされた」

返ってきたのは動物扱い。

失礼な奴め。

「神様の祝福を受けたいんですけど」

「そうですか、ではご案内します。こちらにどうぞ」

ご親切に先導して案内してくれる。

神殿の中に入るとさらに神聖さが増す。

用がなかったら気後れしてすぐに帰ってしまうだろう。

案内されるままに通路を進んでいく。

「こちらに並んでお待ちください」

神官さんが示したところには前に二人ほど人が並んでいた。

また、前方には広い空間があり、なにやら一部だけ円く光がまるでスポットライトのように差し込んでいる。そしてその中央で膝をついてなにやら祈っている人がいる。

あの人は一体なにをやっているんだ？

そう思っているといきなり祈っている人間の頭上に女性が顕れた。

見ただけで彼女が人ではないことは理解できた。

腕が四本あることもそうだが、それよりもただただ美しかったのだ。

女神……

そう、あれこそ正に女神と呼ぶに相応しい存在だ。

つか丸くて大きな光のかたまりじゃないっ！

多分世界が違うから神様も違うのだらうと予想を立てる。

そうしないと何かが納得できない。

『そなたに我、第三等級神アイリスの祝福を』

女神はそう言うとおえていく。
声も美しい。

「いかがですか？」

俺を案内してくれた神官とまた別のじいさんの神官が祈っていた奴に尋ねる。

「はい、体が軽くなりました」

「迷宮の指輪をしているのでしたらオープンと唱えればあなたが戴いた祝福が確認できます。あとでは是非やってみてください。では次の方、どうぞ」

列の先頭の男が光の中心へ進み、膝をついて祈りを捧げる。
なるほどこうやればいいのか。

「では次の方」

そしていよいよ俺の番になる。

前にオープンと唱えた時、祝福なんて確認できなかったから俺も祝福を受けることができるはずだ。

俺の前に祈りを捧げた人達はみんな美人の女神さま達だったから俺もきつとそうに違いない。

女神さまの祝福かぁ……

いったいどんなものがもらえるのか。

前の奴らに習って光の中央に進み膝をついて祈りを捧げる。
俺を祝福してくれる女神さまはいったいどんなお方なんだろ？

『私だ』

あれ？

女の人っぽいんだけど、なんかどつかで聞いたことあるような声が聞こえた。

『人よ、目を開ける』

嫌な予感がするが恐る恐る目を開けるとそこにはいわゆる丸くて大きな光のかたまりがいた。

「なぜに女神さまじゃないんですかっ！」

『そう嘆かれてもな。お前はもともとこの世界の住人じゃないからわざわざ私が来たのだ。言わばご指名入りましたー状態だ』

「何もわざわざ来なくても……」

『神は暇を持て余している。だから常に退屈なのだ』

「あなたにとつたら俺のことなんて遊びってことですか？」

『まあいいではないか。ところで祝福を受けたいのだったな。それにしても……まだ何か欲しいのか？』

遊びに関して否定しないんだ……

それにしても、まだ欲しいのかだと？

くっ、たしかにこの方からはもう五つも（一つは余計）貰ってる。
でも

「貰うものは貰う主義です」

『まあ、誰もが受けることのできるこの世界の決まりみたいなものだから、お前に私から祝福を与える』

「出来れば有用なものをお願いします」

『例えば？』

た、例えばだと……

んー、何かないかな？

「MP無限とか」

これさえあれば加速の能力も使いたい放題だ。
きつと迷宮でも無双できる。

『ふーん』

あれっ？

反応が薄い。

『薄いも何も、お前の意見を聞いただけで与える祝福は別のものだ』

「なっ……せめてどんなものなのか教えてください」

『なに、別にあって困るものはやらんよ。さて、時間凍結を解くぞ』

へっ？

時間凍結？

そっいえば結構長々と喋ってたもんな。

他の人達はそう時間もかからず祝福を受けていたからみんなそうやってきてたんだろう。

『世界神の名において、汝に祝福を与える』

神様の言葉と共に体が軽くなる。

「世界神とはまた聞いたことはありませんが大層な神様の祝福を受けましたね。ご気分はいかがですか？」

「不安です」

俺のミスとはいえ、女性用の下着を持たせた張本神だ。いったい何をくれたんだろう。

「……長いこと勤めてますが、不安を述べたのはあなたが初めてです。迷宮の指輪を着けているのでしたらオープンと唱えればあなたが戴いた祝福が確認できます。あとでは是非やってみてください。では次の方、どうぞ」

俺はその場から去る。

そして神殿の出口へと向かう通路の途中、意を決して唱えてみる。

「オープン」

すると頭上のHPたちの他に新たな項目が記載されていた。

探索者ランク I

レベル 1

HP 20 / 20

MP 20 / 20

世界神の祝福 (LEVEL 1)

神のいたずら：体臭がなんかいい匂いがする (オンオフ可)

……またいらないのが増えた。
「フーかこれって、なんとなくだけどスキルみたいなものなんだろう
と思う。」
それにしても、レベル1つてことはレベル2もあるのかな？
だとすれば更に違う能力的な物が増えるのだろうか……
今だにポケットに入っていた女性用の下着を取り出す。

「神様の力が無駄なことに使われてるなあ……」

とりあえずいつまでもポケットに入れてるのはまずいので道具袋に
入れておく。

なんか捨てられないんだよな、これ。

また、もらった祝福をオンにして自分の体臭をいい匂いにさせてお
く。

とりあえずだからね？

せつかくもらったのに使わないのも悪いし……

まったく、神様も戯れが好きだな。

神様再び（後書き）

主人公の祝福はネタであってネタではないです。
祝福＝スキルみたいなものと思ってもらっていいです。

出会い

というわけで神様からもらったよくわからない祝福を携えてギルドに来ました。

相変わらず無駄に列を作っているリカちゃんの受付を横目にまったくといって人の並んでいないマダムの受付に行く。

「祝福は受けて来たのかい？」

「まあ……」

ものすごく微妙で意味わからないものをだが。

「きつとあなたの助けになるから頑張んな」

あれが？

期待薄だなあ……

「んで、迷宮探索をするってことでいいんだね？」

「はい」

「よし、あなたに迷宮探索の許可を出す」

マダムの言葉に反応するよくに指輪が光る。

なんでも、こうしないと迷宮には入れないらしい。

「うしっ、やってやるぜ」

「ちょい待ち」

気合いを入れたところでマダムが呼び止める。

「なんですか？」

「これを持って行きな」

そう言つてマダムはなんかカップ酒みたいなものを渡してくる。

「なんですかこれ？」

「ポーションって言つて回復薬さ。HPがなくなったら飲みな。あたしとリカからの差し入れだ」

「いや、悪いですつて」

「人の好意はありがたく受け取りな」

「……ちなみにこれひとついくらですか？」

「大した額じゃない。たった200Rだ」

「うえっ……」

俺の昨日迷宮で稼いだ金のほとんどが消えてしまつ。それが五つも。

「その、やっぱり、これ……」

「死なれたら寝覚めが悪いからね」

断ろうと思つたところにマダムからの言葉がかかる。

そうだ。恩返しをするんだ。

だから簡単には死ねない。

そのためにとりあえず今は好意に甘えておこつ。ポーションを袋に入れる。

「よし、マダム。俺、今日は限界に挑むよ」

「だから、死なない程度にやりなつて……」

こうして俺は二回目の迷宮へと挑む。

「つーわけで今日は二階層以上を目指そう。んであわよくばレベルアップをする」

迷宮一階層に降り立ち、目標を定める。

何事も目標がなければいかんともしがたい。

幸い、昨日で迷宮一階層は走破したといってもいい。

実は歩く途中で下に続く階段も見つけた。

まあ、ビビって知らないふりしたけど。

でもあれだけやっても230Rだ。

神殿からギルドまでの道中にあつた雑貨屋を覗いてみたらろくなものが買えなかった。

しかし、そんな俺でも買った物がある。

「じゃーん。携帯食料」

某青狸（前の声優版）の声真似をしながら取り出したのはカロリーメ。トみたいな固形物の入った箱。

予定ではそこそこの時間潜ることになるからと、一応準備した。

四本入りでなんと200R。

おそらくだがRと円はほぼ同じと考えていいのかもしれない。

一応二本入りの物が100Rで売っていたのだが、数が多い方がいいだろうという思考で全財産のほとんどを使い切るという暴挙にでた。

なにを隠そう俺は衝動買いをするタイプの人間だ。

後で悔いるから後悔なのだ。

しかし今の俺はまだ、悔いてはいない。

どうせ大した物を買えないのだから、食料を優先して何が悪い。

「さて、頑張りますか」

あらかじめ道具袋にしまっておいた剣を取り出す。

そして記憶通りに二階層への階段に向けて歩き出した。

2時間ほどで無事に下へと続く階段についた。

だと言うのにもう白の魔石（小）は上限である10個集まり、道具袋に入りきらないくらいになってしまった。

しかし、なんというか……

「昨日よりエンカウント率が高い気がする」

そう、なぜかモンスター（兎型）とよく出会うのだ。

そこで俺はある疑いを持つ。

「まさかこの祝福、モンスターを呼び寄せるものなんじゃ……」

仮定の領域だ。

だが、以前やったことのあるゲームで匂いによって敵をおびき寄せるような特技とか技とかがあった気がする。

これが単なる推測で終わるならばいい。

でも、道の角に隠れてモンスターの様子を伺っているのに、いきな

りこつちを向いて迫ってきたりなど昨日は見られなかった現象が相次いでいる。

疑わずにはおられまい。

「とりあえずオフにしよう」

頭の中で祝福をオフにするように念じる。

脳裏に力チリと音になったことから、多分オフになったのだと思う。自分の匂いって以外とわからないものだ。

ちなみにではあるが袋に入りきらなかった白の魔石（小）は泣く泣く諦めている。

というのも昨日のようにジャージのポケットにインしていれば邪魔になる恐れがあるからだ。

それにあれ、一個10Rだしね。

別に少額だからとバカにしているわけではないが、今は先に進むことを優先させたい。

そして俺は二階層目へと進むため階段を下りた。

二階層も一階層となんら変わらない造りだった。

とりあえずなんとなくこつちに進んだ方がいいんだろうなという勘に従って進んでいく。

すると前方に人影のようなものが見えた。

誰か他の探索者だろうか。

しめしめ、ここは共闘という形で一緒に先の階層へと進ませてもらう。

「すみません」

人影へと走り寄る。

「うがつ？」

しかしはつきりとその姿を確認できたとき、俺は自分の迂闊さを呪った。

そこにいたのは確かに人型っぽいが身長１メートルほどの緑色の小鬼みたいなやつだ。

おそらくというかたぶんモンスターだ。

しかも二体……

初遭遇のモンスターでありながらいきなり複数。

というか複数相手にするのも初めてなんすけど。

逃げるか？

いや、男・黒木相馬。こんなところで逃げはしない。

ちらりと頭上を確認する。

HP	18 / 20
MP	20 / 20

余裕はまだ全然ある。

兎型のモンスターとの戦いは相手の攻撃の単調さに慣れたのかほぼ確実に回避できるようになっていた。

少しHPが減っているのはちょっとしたミスにより軽く攻撃が当たってしまったからだ。

小鬼たちが俺に向かって迫ってくる。

だいたい小学校低学年の平均的な子の全力疾走くらいだ。

兎型のモンスターよりも遅い。

十分に引き付けてから横にかわす。
兎型のモンスターはこれで回避できた。

だが、小鬼は俺の動きに対応しやがった。

「ぐふっ」

腹に小鬼の拳をもらってしまふ。

ジャージを通して衝撃が伝わってくる。

まったく、なんつーもんを喰らわせやがるんだ。

俺が着ているジャージは神様の改造で下手な鎧くらいの強度がある……と思う。実際はよくわからない。でも、汚れなどが次の日には綺麗になっていたのは普通に嬉しかった。

腹を押さえながら小鬼たちから離れ、頭上を見る。

HP	10 / 20
MP	20 / 20

一発で8も減ってしまっている。

ということとはあと二発喰らえばおしまいだ。

不意打ちでもないというのにこの威力。どうやらこいつは攻撃に重点を置いたモンスターなのだろう。

とりあえず離脱しよう。

そう思い背を向け走り出す。

とにかくとつさの判断で動いてしまったので今来た道とは逆。つまり上りの階段から遠ざかってしまっていた。

足はさっきの攻撃の影響で全力を出せないが、それでも小鬼よりも

俺のほうが断然速い。
これなら逃げられる。

しかし、最悪なことに走った先にもう一体小鬼がいた。

……挟まれてしまった。

後ろを見る。

二体の小鬼が十メートルほど後ろを追い掛けて来ていた。
前を向く。

一体の小鬼が向かって来ている。

……うん。出し渋ってる場合じゃないな。
目を閉じる。

【加速そーち】

心の中で唱えて目を開く。

小鬼たちの動きが遅くなる。

まずは前方の小鬼を全力で斬り付ける。

一撃で縦に真つ二つにできた。

攻撃力高い分、防御力は低いのだろうか？

兎型よりも楽に切り裂けた。

これで後ろのやつらは無視しても逃げる事ができるのだが、せつかくだから倒させてもらおう。

距離を詰める。

右側の小鬼に向かって右下段に構えた剣を振り上げ、斬る。

そして振り上がった剣を今度は左側の小鬼に振り下ろした。

倒せたと確信すると俺は加速状態を解く。

小鬼たちは何が起こったのか理解できないような顔で光になって消えていく。

「ぐあっ……」

加速状態を解いたことで一気に負担が身体にフィードバックしてくる。

今回ののはわりと派手に動いたからか少しきつい。
頭上を見れば

H P	0 7 / 2 5
M P	1 5 / 2 5

さらにH Pが減っていた。
とゆーか最大値増えてない？

「オープン」

レベルなどを出現させる言葉を唱える。
つーか面倒だな。なぜ常に表示されてないんだよ。

探索者ランク I

レベル 2

H P	0 7 / 2 5
-----	-----------

M P	1 5 / 2 5
-----	-----------

世界神の祝福（レベル1）

神のいたずら：体臭がなんかいい匂いがする（オンオフ可）

レベル上がってる！

でも、出来ればなんかレベル上がったよ的な音とか流れて欲しかった。

ドラ。エミたいなのちよつと期待してたのに……
それはそうと回復しとこう。

道具袋に手を入れ、アイテム欄のようなものを視界に現す。

「ポーション」

取り出したいものの名称を告げる。

手に何か握った感触がする。

手を袋から出すとカップ酒みたいな瓶が手に握られている。

その蓋をあけて中身を飲む。

なんというかスポーツドリンクみたいな味だ。

それを飲み干すと体が淡く光る。

そしてなんと体の痛みが消えたのだ。

頭上を再び確認する。

探索者ランク I

レベル 2

HP 25 / 25

MP 15 / 25

世界神の祝福（レベル1）

神のいたずら：体臭がなんかいい匂いがする（オンオフ可）

HPが全回復した。

一体ポーション一本でいくら回復するのだろうか。

これで50回復するとかだったらもったいないなあ……

でも、死ぬよりマシだ。

とりあえず、小鬼を倒して落としたであろうドロップアイテムがな

いか見てみる。

すると見たことある白い石三つとなんか緑色の金属でできた硬貨が二つあった。

白い石は望みを乗せて袋に入れてみるが、袋に入れた途端弾き出すように吐き出される。

やっぱ白の魔石（小）だった。

袋に上限一杯入っているのでこれ以上はダメなのだ。

次に硬貨を入れる。

初めて獲得した物なので袋には当然入る。

手を入れて確認してみるとゴブリンコインと記載されている。

なるほど、今の小鬼ってゴブリンなのか。

それにしても

「さすがにモンスターとは言え、二足歩行する奴を倒すのはちょっとばかりきついな……」

ちょっとクるものがある。

まだまだ覚悟が足りないんだろうな。

ひと休みといきたいところだがここじゃいつモンスターが来るとも知れないし、進むことにしよう。

同じように勘に従って進むうちに何度かゴブリンと遭遇して戦った。とは言っても複数いたのは最初だけであとは一体ずつだった。

また、兎型のモンスターも出てきたのだが、どちらもそう苦もなく倒せた。

兎型のモンスターはともかくゴブリンはまだ慣れるほど戦っていないのだが、そう感じるのはおそらくレベルアップに関係するのではないのだろうか。

くっそー、俺のステータスがどれくらい上がったのか見てみたい。しかしこれならさらに下の階層に行っても大丈夫だろう。

ということ、ただいま俺は三階層へと下りる階段を探している。まあ、勘に従って行けばそうかからず辿り着くだろう。そう思っただけでいくと前方に人影を発見した。しかし、ゴブリンとの初遭遇の時のような失敗を侵してはいけないう。じつくり、そしてねつとりとその正体を確かめねば！

恐る恐る目標に近づいていく。

目標は立ち止まっているため、進めば進むだけ近づく。そしてその正体はつきりと確認できるところまでくると安堵する。完全に人だったからだ。

「すみません」

とりあえず声をかけてみる。

さきほどとは違い、何の打算もない。

俺の声に相手は振り返る。

声をかけた相手は女性だった。

切れ長の青い瞳に長い銀色の髪。また胸元が見えるような上着にホットパンツというのだろうか？ 丈の短いズボンをはいていてその艶やかな褐色の肌をさらしている。

総じて露出度が高い印象だ。

そして露出度だけでなく彼女は背も高い。

俺が170くらいなのだが彼女の身長はそれよりも高いのだ。かといっただけ180もないだろう。でも女性にしては長身だと言える。

しかしこの人も何というか、美人だな。

優しそうな外見のリカちゃんとは真逆の美しさ。

なんというかさっぱり。

「ただの人間族ごときがなんのようだ？」

嫌悪っぽいのが混じった口調で女性が話す。
声もやっぱSっぽい。

リカちゃんとは違い想像通りの感じに思わず笑みがこぼれる。

「何がおかしいっ！ 人間族ごときが私を愚弄するのか！」

それが彼女の逆鱗に触れてしまったようだ。

この世界はもとの世界とは違い、獣人族やエルフ族などのいわゆる物語に出てくるような種族が存在し、一部の者は多種族、とくに俺のような外見になんの特徴も持たない人間族と呼ばれる者を蔑んでいる者たちがいる。

彼女もそのような者の一人なのだろうか。

よく見れば彼女の耳は少し長く、先が尖っている。

「黙っていないで答えろっ！」

やばいやばい……

さらに怒らせちゃった。

美人さんに嫌われるのは嫌だ。なんとかご機嫌をとろう。

「すいません、あなたがあんまり綺麗なんで見とれちゃって……」

定番とも言える褒め言葉。

半分は本当のことだ。

「人間族ごときがダークエルフたるこの私を視姦しただと……」

怒り度アップ。

つかダークエルフなの？

「いや、別に視姦とかそうゆうやましい気持ちじゃなくて、ほら、風景とか見て綺麗だなあって感じるみたいな感覚ですよ?」

「……ホントにか?」

見つめられる。

なんかアタイ、ドキドキしてきた。

だって美人さんなんだもん。

ついつい目を逸らしてしまう。

耐性がないから仕方ないよね。

「なぜ目を逸らす。やはりやましい気持ちだったのか?」

「いえ、あんまりに熱心に見つめられるので恥ずかしくて……」

「なっ……ば、バカじゃないのか。別に私はお前など見つめていたわけではない。に、睨んでいたんだ」

俺がそういうとダークエルフの美人さんは真っ赤になって否定する。

あれ、この子……もしやツンデレの素質があるのか?

俺はツンデレというものに前から興味がある。

これは是非ともお近づきになりたい。

「俺と一緒に迷宮を進んでください」

気がつけば彼女の手をとってお願いしていた。

ちよっと前の俺なら全く考えられない大胆な行為。

一回死んでから、わりと開き直ってる部分あるからなー。

これが、体は正直ってやつだろうか?

出会い（後書き）

戦闘描写は苦手としております。

パーティー登録しちゃいました

「何をするっ！ 離せっ！」

俺の手が乱暴に振り払われる。

まあそれもそうだろう。

いきなり名前も知らない男に手を握られるなんて嫌だろうな。俺が逆の立場なら……この子にされたら許しちゃうなあ。

「えっと、ごめんなさい」

謝罪する。

つい、やってしまったでは許されない。

セクハラとは相手が不快に思った瞬間発生するのだ。

彼女からしてみれば俺の行為は立派なセクハラだろう。

「謝つてすむ問題ではない。貴様、同意もなしにパーティー登録をするなど、常識を知らないのかっ！」

パーティー登録？

そんなのいつしたっけ？

「何を不思議そうな顔をしてるんだっ！」

「あ、し、しばしお待ちを」

俺は道具袋の中からギルド指南書を取り出してパラパラとめくる。そしてパーティー登録に関する記述を見つけ読んでみた。

「パーティー登録」

より深く迷宮を潜ることに於いて重要なことは仲間を得ることです。そのためパーティー登録というものがあります。

これは迷宮内において探索者たちが手を握ることで発生し、最大五人までパーティーを登録することができます。

効果としては倒したモンスターの経験値の分配やパーティー登録した相手のHPとMPといったものが常に見ることができるようになります。

パーティー登録は迷宮内で行えず、またメンバー全員が迷宮から出ることしか解除することができません。

ですから本当に信頼できる人としてパーティー登録はしないようにしてください。

仲間を増やして迷宮を攻略できるよう精進してください。

……なんてこった。

ちらりとダークエルフの子、正確にはその頭の上を見る。

HP	17 / 28
MP	18 / 34

うん、見える。

普段他の人のHPなどは見ることができない。

例外はマダムが教えてくれたように迷宮の外で指輪に触れさせることで、探索者ランクとレベルなどを見せることができるくらいだったが、もう一つ例外が存在した。

それがこのパーティー登録。

確かに深い階層に行けば必須の力と言えるだろう。

しかし……相手の了承もなしに勝手にやっちゃまずいよね？

俺は読んでいたギルド指南書を閉じて袋に戻すと地面に膝をつけて座る。俗にいう正座の体勢。

「誠に申し訳ありませんでした」

そして今一度の謝罪とともに土下座した。

これがダメなら土下寝に移行するほかあるまい。

「ダメだ。許さん」

いつだって現実というものは予想を上回る。

下げた頭になにかが乗る感触がする。

つか頭を踏まれてます。

許されないのは仕方ないと思う。百パーセント俺が悪い。

でもこれはあんまりではないか？

いやいや俺が悪いんだ。……俺が悪いんだ。

そうだ、ここはポジティブに自分はどMだと考えるんだ。

俺はわりと受け身なタイプだから造作もない。

そうすれば今の状況はご褒美以外の何物でもない。

「なんとか言え」

彼女は踏んでいる俺の頭をグリグリ地面にこすりつける。

……人って考えただけでどMには変わらないもんだなあ。こんなん

苦痛でしかありません。

「ほんつとすいませんでした！」

とにかく今は謝るしかないよな。

「……というわけで、知らなかったんです。それに迷宮内で人に会えたことにテンション上がって調子に乗っちゃったっていうか……」

あれから約10分ほど踏まれながら謝するという時間を過ごし、ようやく解放されると俺は女性に対して釈明という名の言い訳をした。

「理由は理解した。だが人間族ごとくとパーティーを組まれたこの私の怒りは収まらない」

「えっと……迷宮から出ればパーティーは解除されるんですよね？
だったら一階層に戻って出ましょう」

そうすれば万事問題なし。

ここまで来ておいて、ちよっと勿体ない気もするが

「ふざけるなっ！ 私は今回五階層まで行くために迷宮に潜ったのだ。お前ごときのせいでは諦めねばならんのだ」

怒られちゃった。

なるほど、五階層まで行って銅の羽かざりを使うつもりなのか。

っていつても俺の提案が一番現実的だと思うのだが……いや、待てよ。

「んじゃ、一緒に五階層まで行きましょう」

「断る」

俺の言葉が言い終わるかどうかといったところで即答されてしまう。

そんなに嫌なの？

普通に悲しいんですけど……

「理由を聞いてもいいですか？」

これがフラれた男の女々しさというものだとわかっていても、聞かずにはいられない。

「なんでもなにも、知らなかったとはいえ、いきなりパーティー登録をしてくるような相手を信頼できるわけないだろう。とゆーか知らないこと自体が信頼できない要素だ。……あとは人間族だから（ボソツ）」

なんか最後は理不尽なことを呟いたように聞こえたが、概ね間違っ
てはいない。

知らないということは時として罪だ。

それが知ることが可能だったのにも関わらなかったら尚更のことである。

今さらながら行き当たりばったりな自分の性格が恨めしい。

「それじゃあ、貴女は五階層を目指してください。俺はこのまま一階層まで行って迷宮から出ます。それで貴女が迷宮から出るのを確認するまで迷宮には入りません」

これならどうだ。

メンバー全員が迷宮から出なければいけないということは、誰か一人でも迷宮内にいればパーティー登録が継続されるという鬼みtainな制度だ。

こんな悪い奴からすれば利用し放題ではないだろうか。

だから、貴女が迷宮内にいるうちは俺も入りませんよと誓う必要が

あると感じた。これに関しては俺に関する信頼がゼロであろうと信じてもらうより仕方ない。

「却下だ」

しかしそれも素気なく断られる。
どないせつちゅうねん。

「……なぜですか？ 俺の言葉が信用できないのはわかりますけど一緒に五階層も一階層にも行くのもダメならこれしかないですよ？」
「もうひとつあるだろ」

そう彼女は言うが
はて？

他にどんなのがあるだろうか。

「簡単だ。貴様も五階層を目指せ」

「……………」

「どうした？」

「……幻聴が聞こえたみたいなのですか？」

五階層行けって言われた気がした。

「それは大変だな。あとで神殿に行つて診てもらえ……五階層に行つて迷宮から出てからな。」

幻聴じゃなかった。

何言つてんのこの人？

さっきは一緒に行かないって言ったじゃん。

いや、それが覆っていないのならこつゆうことだ。

「それはつまり、各々五階層を目指せと？」
「そうだ」

予想が肯定される。

「心の準備とか諸々してないんで無理ですよ。それに五階層に行くんなら一緒に行きましょうよ」
「やだ」

まるで子供じゃねえか。
くそっ、美人じゃなきゃ加速を使用して走って逃げるのに……
それにしても五階層に行けどと？
そのうち行く予定ではあるけど急過ぎる。

「貴様だってそれを持ってるんだから階層ジャンプできるだろ。それならそっちのほうがお得だ」

そう言っただけ彼女は俺の胸元にある銅の羽かざりを指差す。

「いや、とは言っても持ち物とか装備とか……」
「気合いで乗り切れ」

出たよ根性論。

嫌いじゃないけど、生死がかかる場ではあんまり聞きたくない。

「とにかく貴様も五階層に行け。そして先に着いたほうが結界内で待つ。それで勝手にパーティー登録をしたことは許してやる」
「うっ……」

それを言われるとつらいな。

確かにパーティー登録解除されたから許しますなんて甘すぎる展開だ。

それを彼女から許してくれる条件が提示されたのだ。

俺の嘘を見破る能力の発動もしないことから本当に許してくれる気なのだろう。

普通なら飛びつくべきだろう。

でも、怖い。そしてやれるのか？ という不安が大きい。

「えっと……やっぱり一階層から出ちゃダメですか？」

俺のことをヘタレと呼びたいならそう呼んでくれ。

「ダメだ。それだと不公平だ」

「不公平？」

「だって階層が下になればモンスターは強くなるし、倒した時の経験値も増える。でも、パーティー登録をしていれば経験値は分配されてしまう。私が倒したモンスターがお前の経験値にもなるんだから、私だけが強い方を倒すのは不公平だろ」

……確かにね。

美人さんが倒したモンスターの経験値だけ余分にもらうなんてヒモみたいだな。

「わかりました。俺も五階層に行きます」

「最初からそう言え」

わりと一大決心なのだが反応は冷たいものだ。

そして彼女は袋に手を入れたかと思うとなにかの紙みたいなものを取り出し、じっと眺めはじめる。

あまりに熱心に見ているので失礼かもと思ったが後ろから覗かせてもらった。

彼女が見ていたものは迷宮の地図。

本来なら迷宮に地図は存在しない。

と言うのも迷宮は気まぐれにその構造を変えるからだ。

昨日通れた道が今日は通れないなんていうのはよくあること。

これがこのオースティアの迷宮の最大の特徴である。

これは他のどの迷宮にもない特徴だ。

故に最難関。

だからこそ唯一この迷宮だけがクリアされていないのだ。

でも、何事にも例外は存在する。

それが初心者階層と言われる一階層から十階層までの間と五階層とにある結界がしかれている階層だ。

ここらは迷宮が安定していて構造が変わることはない。だからこそ地図が作れるし売ることができる。

ということを雑貨屋の主人に聞いた。

地図は欲しかったが初心者階層の地図でさえ一階層500Rなのだとっても買えない。

「今、どこですか？」

「……ここだ」

俺の問いに少し躊躇しながらも答えてくれた。

そして彼女の指先のある場所を見ると明らかに違う場所を指している。

一階層へと至る階段のすぐ隣なわけない。

……いじめ？

そこまで嫌か。

「いやだな、間違ってますよ。そこじゃあ一階層への階段が目の前にあることになりますからね。ダークエルフさんでも間違うんですね」

ちよつと嫌味が入っちゃったか？

でも、嫌味のひとつも言いたくなるのは仕方ないと思わないか？

「……………じゃあここだ」

そう言つて次に彼女が指差したのは明らかな袋小路。
無論こことは違う。

「俺のこと馬鹿にしています？」

されてもしかたないようなことをしたのはこの際忘れる。

「じ、じゃあここだっ！」

そう言つて彼女が指差したところはまたしても違った。

つか様子がおかしくね？

明らかにテンパリはじめてる。

そこで彼女の顔を見してみる。

ずっと彼女を視界に納めていたはずなのだが、鼻は全く伸びて見えない。

え？　もしかして……………わざとじゃない？

だとすれば

「もしかして迷子ですか？」

「なっ…………ち、違うもん。迷ってないもん」

といいながらも顔は真っ赤だ。

そして彼女の鼻が伸びて見える。

かわいい嘘だ。一旦彼女を視界から消し、また見ると鼻の長さは元通りに見える。

彼女の顔はまだ赤いままで俺と視線を合わせようとしない。

ヤバ……かわいい。

「とりあえず三階層まで一緒に行きましょうか？」

「い、嫌よ」

「これ以上迷われると俺が先に五階層に着いたときに、いつまでも来なくて困りますから」

「う……」

すっごく気まずそうな顔をされるが二度断ってるんだから無理もない。

「お願いします」

「さ、三階層までだ」

ようやく了承を得ることができた。

これが俺の最初のパーティー。

「そういえば、名前を聞いてませんでした。なんて言っんですか？

ちなみに俺は黒木相馬です」

「別に聞いていない。それに私は人間族ごときに名乗る必要はない
思っている」

にべもない。
だが諦めん。

「教えられないほどひどい名前なんですか？」

「安い挑発だな。そんなことで口を滑らせるとでも思ってるのか」

くっ、見え見えか……

致し方ない。

「じゃあ、ハレンチ迷子さんって呼びます」

露出度高いし。

ダークエルフさんだと捻りがないし、サドさんだと怒られそうだしね。

「……他の呼び方はないのか？」

おっ、この反応はあだ名が気に入らなかったようだな。

「嫌なら、あなたのお名前教えてくださいな」

「……………セレナだ」

ハレンチと迷子のどっちにひっかかったのかはわからないがとりあえず彼女の名前をゲットだぜ。

パーティー登録しちゃいました（後書き）

わかりにくかったらすみません……

やっぱり一緒に……

迷子になっていたダークエルフのセレナさんと三階層まで一緒に行くことになったが、俺の思惑ではこのまま五階層まで行きたいなというところである。

「貴様の戦い方は素人臭い」

そんなことを言われたのはパーティーを組んで初めて出会ったゴブリンを倒した後だった。

まずは俺の技量を確かめたいとかで俺一人での戦闘である。

彼女の見解は否定しようもない。

俺はついこの前までは平和ボケしていると云っても過言ではない国で生活していたのだ。

もちろんケンカの経験が一度もないなんていうなまっちょろいことは言うつもりはない。

けどそれはやはり素人による暴力であるから、学生時代をケンカに明け暮れてるような不良でもない限りケンカ慣れするなんてことはない。

「まあ、素人なんで……」

「では、なぜ探索者となったんだ？ 金か」

「うーん……そうゆうことで納得しといてください」

間違ってもいないしな。

「俗物め」

「はは……」

苦笑いするしかない。

「そうゆうセレナさんはどうして探索者に？」

「自分がどこまでできるか見極めるためだ。それに、この迷宮を攻略できれば後世にまで名を残すことができるからな」

「名を残すことが望みなんですか？」

「そうだ。ダークエルフの私が名前を残すことに意味がある」

「というと？」

「フンッ、貴様もわかつていることだろうが、ダークエルフはエルフの亜種とされて地位はそんなに高くない。それどころかエルフどものなかには我らの種族を下賤な血として家畜扱いする者までいる始末だ。しかし、最難関たるこの迷宮をダークエルフたる私が攻略してみる。ダークエルフはエルフどもよりも優れた種であると知らしめることができるではないか」

つまりは種族のために探索者になったわけね……

そりゃまた大きなものを背負ってんだなあ。

「少し語りすぎたな……次は私が戦う。光栄に思え、人間族のお前に本当の戦いというものを見せてやる」

そう言つてセレナさんは肩にかけていた武器を手取る。

彼女の武器は何の変哲もない木製の弓。

そしてそれに道具袋から取り出した矢をつがえる。

視線の先にはゴブリンが小さく見える。

いま俺たちがいるのは長い直線でその距離は三十メートルほどだろうか。

当たるのか？

「シッ」

矢が放たれる。

それはまっすぐ目標に向かっていく。
しかし……

「あっ」

目標の前で地面に落ちてしまう。

「……失敗した」

「こうゆうものなんですか？」

地面に落ちた矢を見つめながら聞いてみる。

失敗した時の顔を見ないのは大人としての礼儀だ。

「違う。距離を見誤っただけだ。なぜか目が霞むのだから仕方ない
だろう」

どんな言い訳だよ。

「次こそは大丈夫だ」

そう言って次に彼女が放った矢は見事にゴブリンに命中した。

「ほら、問題ない」

なんかすげえ自慢げなんですけど、一射目外してたら説得力皆無だ。

「とりあえず、矢を回収せねばならん」

「回収ですか？」

「あれはタダではないのだ。回収して再利用できるならそれに越したことはない」

「そうなんですか。んじゃ行きましょう」

倒したゴブリンに近づいていく。

「そういえば、倒したモンスターのドロップアイテムって……」

俺はそう言っただけについてきているであろうセレナさんにドロップアイテムの分け方について相談しようかと思ったのだが、そこに見えた光景に驚愕する。

「セレナさん!!」

なんと彼女が倒れているのだ。

これは一大事だと思って駆け寄る。

「大丈夫ですか!」

一体彼女の身に何が……

グウウウウウ……

聞こえた音に時が止まる。

これはわりと聞きなれた音ではないだろうか。

いや、でも、セレナさんのような美女がまさか……

そう思っただけを見ると腹ばいになっているせいで顔は確認できないがその褐色の肌が赤く染まっているのが分かった。耳に至っては真っ赤とっていいだろう。

こりゃ確定か？

「……おなか減ってるんですか？」

「うるさい」

「減ってるんですね？」

「言うな」

「倒れるほどつてどれくらい食べてないんですか？」

「……………四日だ」

なんでそんなに……

もしかして食事する金もないほど貧窮しているのだろうか。
いや、まさか。まさかではあるが

「セレナさん、迷宮にどれくらいいるんですか？」

「……十日」

「もしかしてずっと迷って……」

「それ以上言わないでくれ……」

この人どんだけ迷子になってるんだろっ。
探索者とかまったくあってないだろ。

「屈辱だ……」

呟くように言われたその言葉に苦笑する。

よくわからんが、ダークエルフも俺とそう変わらないんだな。
腹も空くし、それで倒れたりもする。

たぶんトイレだって……

おっと、これは今は関係ないな。
いま重要なのは

「これ食べます?」

そう言うって取り出したのは迷宮に入る前になけなしの金で買った携帯食料。

自分で食べるために買ったのだが、腹を空かして倒れてる人を目の前にして隠しておくほど落ちぶれちゃいない。

まあ、これが俺も同じように空腹だった場合、渡すかわからないが、朝はマダムたちと食しているので問題はない。

でも、五階層まで行くのに時間がかかった場合を考えて半分は残しとくべきだろうか?

「いいのか?」

「全部いっちゃってください」

アカン……そんなウルウルした目で見られたらたまりません。

五階層までのこと?

そんなの知らん。

成せば成る。行き当たりばったりで何が悪い。

それが原因でセレナさんに迷惑をかけた?

それはそれってことで。

俺が差し出した携帯食料を一心不乱に食べるセレナさんを見る。少しずつ齧るところが小動物みたいでかわいいです。

「あのですね。やっぱ五階層まで一緒に行きましょう」

俺の言葉にセレナさんが食べるのをいったん止めて俺を見つめたのだが、見つめたまま、また食べ始めた。

「ほんとは今すぐ一階層に戻って迷宮から出るべきだと思いますが、聞き入れてくれないでしょ?」

「ああ」

「じゃあ、やっぱり一緒に五階層に行きましょう。そのほうが多分、はやくセレナさんは迷宮から出れます」

「だが、人間族なんかと……」

「ストップ！ 意地張るのも勝手ですけど、さすがにシャバの空気が欲しいでしょう？」

「シャバって……」

「ともかく！ 俺の携帯食料食べた交換条件としてここはひとつ」

「う、致し方ないのか……」

「つまり、一緒に行くってことで決定っすか？」

「ああ」

いよっしゃー！

不謹慎ではあるがこの子が迷子でよかったー。

「ではいくぞ」

そう言っただけで彼女は立ち上がり、歩を進めるのだが……

「方向逆でっせ」

なんでわざわざ回れ右をするのだろうか。

もはや二階層にこれたこと自体が奇跡に思えてきた。

それから何の山場もなく三階層への階段を見つけるに至った。
ドロップアイテムに関しては折半していくことに決まったが、
流石は十日も迷宮にいるだけあって拾えるアイテムは全て道具袋の
限度いっぱいらしい。

ちなみに彼女の道具袋は銅の糸で作られ、魔法をかけられた道具袋で、俺の持つ普通の布のものよりも優れていて重量無視で道具が各20個も入る。

なんとも羨ましい。

聞いたら毎月決まった日に神殿で売ってくれるらしい。

道具袋の価格は種類によって異なり、下から布・銅糸・銀糸・金糸とあるみたいだ。

更に上のものもあるようだが、そちらは特注品で対応の金とランクが必要ということだ。

俺の持つ布の道具袋でさえ1万Rだったんだから怖い。これでさえ初心者用でござん価格って奴らしい。

他のものは銅糸のもので10万、銀糸のものが100万、金糸のものが1000万なのだからそれ以上のもとなると普通に考えたら1億？

……絶対買えないな。

とにかく基本的にこの階層のアイテムは俺が貰うことになった。

とはいっても白の魔石（小）は入らないので、拾うのはゴブリンコインと動物の毛皮が出たときだけだ。

三階層も雰囲気は同じだった。

「セレナさん、地図見せて」

俺はセレナさんから地図を受け取る。

彼女が見てもほとんど意味をなさないからだ。

彼女も素直に地図を差し出して、俺が地図を見てるのを横から見ている。

ここまで来るまでにわかったことはセレナさんは方向音痴をかなり気にしているということだ。
それを弄った時の反応が面白い。ついついいらないところでネタに
してしまう。

「で、どっちに行くんだ？」

俺達の前には早速の分かれ道がある。
左右と真っ直ぐに延びる三つの道。

「セレナさんはどの道だと思う？」

「右だ」

「左が正解だよん」

流石はセレナさん。

即答で反対を選ぶとは……

「馬鹿にして……迷宮出たら殺す」

ヤバイ……セレナさん本気だよ。

導火線に火を入れちゃった？

からかうのが面白くて、つい……

これ以上方向音痴をネタにからかうのは控えよう。

「と、とにかく進もうか。この位置なら二階層よりも歩かなくて済
みそうだ」

焦りながら左の道に入ると二十メートルほど先にモンスターの姿を
捉える。

見たことないモンスターだ。

いや、正確には見たことあるような姿ではある。

ただ大きさがまったく違う。

俺の視界に現れたのは体長1メートル近くある蜂だった。

「キラー・ビーが毒はないが尻の針での攻撃には注意しろ」

見ればこちらに気づいて向かって来てるのだが、その尻にはぶつと
い針が姿を見せている。

先端恐怖症なんてものの名前を耳にしたことがあるが、そうじゃな
くてもあれには恐怖するだろう。

これは断じて動けない言い訳ではない。

「どけ」

立ちすくむ俺を押し退けてセレナさんが前に出る。

そして弓に矢を番え撃ち放つ。

続けざまに三射射られたそれはキラー・ビーの頭、胸、腹のそれぞ
れに命中しキラー・ビーを地に落とす。

程なくしてキラー・ビーは光となって消え、後には白の魔石（小）
と小さな壺みたいなものとキラー・ビーに刺さっていた三本の矢が
残る。

セレナさんは矢を回収したのち、壺を拾うと袋の中に入れてから、
自身の手もその袋の中に入れる。

恐らく拾ったアイテムの確認をしてるのだろう。

「ハチミツか……」

そうじゃないかと薄々感じていたが、やはりハチミツだったらしい。
彼女が俺にその視線を向ける。

「ビビって動けないなど、私がいなければどうするつもりだったんだ？」

その通りだ。

今までのモンスターは前の世界ではお目にかかれなような存在だったので、戦えた部分もあった。

しかし、蜂という俺自身に馴染みがあり、良く知った存在が巨大になって襲い掛かってくるということに俺は恐怖を抱いてしまった。セレナさんがいなかったら……どうなってたんだろう。

「行くぞ、ヘタレ」

そう言っただけ俺の前を歩くセレナさんに黙ってついていくことしかできなかった。

しばらくは一本道でよかった……

帰還しました

「ビビった過去の自分よ、さよならっ」

なんとなく腹に力を込めて言ってみた。

キラ・ビーとの初遭遇から奴らの相手は全てセレナさんがしているのだが、もういい加減慣れた。

さすがは蜂というか、飛ぶスピードはそんなに速くないし、元の世界にいたから（こんなでえのはいないが）どんな存在か知ってるのは逆に好都合に思えてきた。

なにより虫だ。

虫なら殺せる！

「……………」

なんかセレナさんがわざわざ振り向いて可哀相な人を見るような目で俺を見ている。

確かに迷宮でいきなり大声出すとかモンスターに位置を教えるようなもんで、不用心だよな。

ほら、セレナさんの後ろにキラ・ビーが来ちゃったじゃないか。

ん？ 敵来てんじゃない！

セレナさんは気づいていない。

セレナ、後ろ後ろ！

ヤバイ。心の中で大御所の往年のコントを彷彿させる感じでふざけたせいで声出すタイミングを逸した。

キラ・ビーが迫る。

羽の音にセレナさんが気づくが遅い。

やられる。

「危ないっ！」

間一髪でセレナさんを押し倒してキラ・ビーの攻撃を回避する。
よかった、間に合った。

「ソーマ、後ろだっ！」

セレナさんの声に振り返ろうとしたとき、背中に痛みが走る。

「いつつー！」

ブスツていったよ。

痛い痛いっ。

奴め、旋回して人の背中を刺しやがった。

くっそ……虫ごときが

「いい気になるなっ！」

立ち上がって剣を構える。

キラ・ビーは俺から少し離れたところに漂っている。

こいつらの攻撃は、ただ針剥き出しで突っ込んでくるだけと単調だから避けることは容易だ。

だが攻撃を避けるのは簡単でも当てるのは難しい。飛んでるが故に相手の攻撃にカウンターを合わせるしか今の俺に攻撃手段はない。
キラ・ビーを見る。

奴の攻撃に移る時を見逃してはいけない。

……………来た。

キラ・ビーが攻撃のために突っ込んでくる。
やはりそんなに速くない。

とはいっても小学生の野球選手の球速くらいはある。
だがしかし、俺も小学生時代は野球にて不動の九番だった男。
こんなもん、絶好球や。

「うおおりゃあーっ」

キラ・ビーに合わせて刃を立てて剣を振りきった。
相手の突っ込んでくる力も利用され、キラ・ビーを両断することができた。

キラ・ビーが光になって消えるとそこには白の魔石のみが残る。
どうやらハチミツはドロップしなかったらしい。

「ソーマ、大丈夫か？」

セレナさんが心配してくれてる。
あれっ？
とゆーか

「セレナさんが、俺の名前を呼んでくれた……」
「は？」

「やつべー超感激だー！　ずっと貴様とか言われてて、キラ・ビーとの一件でヘタレに確定してたもんな。それにキラ・ビーへもリベンジ果たしたしな。良いことづくめだ」

「……大丈夫みたいだな。刺されたと思って心配したのだが、無駄だった」

「ん？　そういえば、あの針に刺されてプスッとかいうのは有り得ないな。どっちかというとプスッって感じだし……」

不思議に思っ て刺された箇所を触 ってみるが、ぶ っとい針が刺さ ったような穴は ない。

それに、痛みも針仕事してて誤 っ て指に刺した くらいのものし かない。

「セレナさん、俺の背中どうな ってます？」

セレナさんに背中を見せる。

セレナさんはまじまじと俺の 背中を見たり、触れたりする。

「特に外傷はないな。というか 見た目以上に丈夫な生地なんだ ね。あのキラ・ビーの攻撃で穴 すら開かないとは」

なんかジャージが褒められた。

まあ、神様に改造されてます からね。

それにしても、神様が以前こ の世界に俺を寄越す前に俺の成 長に合わせて強化されるって 言ってたんだけど、俺のレベル が上がって少しは丈夫になった のかな？

でも、キラ・ビーの針が効か ない（たぶん）っていうのは頼 もしい情報だ。

「しかし、貴様でも盾くらい にはなるんだな」

ムッ……盾ってなんだよ。

ちょーっと気を悪くしたのだ が

「……助かった。ありがとう」

囁くように呟いた彼女の言葉 が聞こえて、ニヤニヤが止まら なかった

た。

その後、モンスターを倒しながら最短ルートで四階層に行くことができた。

四階層では新しい種類のモンスターはおらず、今までの三種類のモンスターが迷宮内を闊歩していた。

セレナさん曰く五階層まではこの三種類しかでないらしい。

だとすれば問題ないと思い、これまでのように進んでいたのだが、モンスターが今までより明らかに強くなっていた。

そういえば、マダムが最初に言っていた。

迷宮の階層÷2の端数切り捨てが適性レベルだと。

つまり今までのモンスターはレベル1が適性レベルだったのに対して今の階層のモンスターはレベル2が適性。

強く感じて当然だ。

だが、苦勞するかというとそんなことはなかった。

適性レベルなんだから倒せない道理はないし、なによりセレナさんは今、レベル3らしい。

油断しないように気をつけながら進んでいき、無事に五階層にたどり着いた。

とはいっても五階層にたどり着いたから終わりということではない。結界のある場所に行かなければ銅の羽飾りは使えないのだ。

しかし、幸いにも結界のある場所は四階層からの階段からそう離れていなかった。

途中、モンスターと遭遇して戦闘になりながらも、10分ほどでたどり着くことができた。

結界があるのはそこそこ広い空間で、正に神殿で感じたような神聖な空気に包まれていた。

また、人口の池のような物もあり、澄んだ水がそこにある。
これって、飲めんのか？

「久しぶりに太陽を拝めるな」

俺が考えこんでいると、セレナさんが空間の中央に進んでいく。
良く見れば空間の中央には何やら魔法陣のようなものが刻まれている。

「ソーマ、先に行くぞ」

セレナさんが魔法陣の中央に立った。

「^{リターン}
帰還」

セレナさんはそう唱えると、淡い残光を残して消えてしまった。
これは、あれだな。

初めて迷宮に来たときに、前の探索者たちが消えた時と同じだ。
妙に納得しながら俺自身も魔法陣の中央に進む。

セレナさんの真似をすればいいんだよね。

緊張するなあ。

深呼吸しとこ。

それから三回ほどゆっくり深呼吸をして呼吸を整えた。

噛まないように気をつけねばな。とある眼鏡の魔法使いは噛んだせいで友人一家とは別の場所にワープ（？）しちゃったからね。

「^{リターン}
帰還」

そう唱えた瞬間、体がちょっとした浮遊感（ジェットコースターで高いところから一気に落ちた時の感じ）を味わったと思った次の瞬

間、目の前の景色が変わる。

どうやら迷宮の入り口の社に跳んだらしい。

「遅かったな」

セレナさんが声をかけきた。

どうやら律儀に俺を待っていてくれたらしい。

彼女の頭上を確認すると、既にHPなどは見えない。

どうやら、無事にパーティー登録を解除できたようだ。

「すみません」

「？ なにか謝るようなことをしたのか？」

「……いえ」

忘れてる？

でも、蒸し返して怒らせたくはないので、このままいこう。

「ところで、五階層にもどるにはどうすればいいんですか？」

「行きたい階層を言ったあと移動と唱え^{ジャンプ}ればいいみたいだぞ」

「ありがとうございます」

これで次からの探索もバツチリだ。

「フツ、では行くか。久々に太陽を浴びに………って暗いっ！」

外に出たセレナさんが騒いでいる。

確か俺が迷宮に入ったのは昼前くらいで、だいたい半日ほど潜っていたのだから暗いのは当たり前だ。

「夜が明けたら改めて太陽の光を浴びればいいじゃないですか」

とりあえず慰めておく。

「それもそうだな」

納得してくれたらしく、彼女はギルドに向かって歩きだした。

「あゝ、やっと来た」

ギルドに入ってところでリカちゃんが椅子に座っているのが見えた。

「もゝ、おっそいよ。日付変わっちゃったじゃん」

やっぱりそのくらいは経ってるんだな。
っーか

「待っててくれたんだ」

「そりゃ、まだ道覚えてないだろうし、お守りが必要になって」

いったいどれだけ待っててくれたんだろう。

「それはそうと、誰？」

リカちゃんが指を差すのは一緒にギルドに入ってきたセレナさん。

「人を指差しちゃ、めーです」

教育的指導入りました。

まあ、世話になってるので、強く怒れはしませんがね。

「おまえの女か？」

「ちやいます」

セレナさんの勘違いも即座に訂正しておく。
でも、悪い気がしないのは言うまでもない。

「えっと、こちらはリカちゃんです。すぐくお世話になってる方の娘さんでギルドに勤めてます。んで、こちらがセレナさん。迷宮内で偶然出会った方で、一緒に五階層に行ったんです」

それぞれに紹介をする。

いやあ、美女同士の邂逅の現場にいれるなんて運が良いなあ……

「はじめまして。リカといいます。今回は“うち”のソーマ君がお世話になりました」

うん、なんでリカちゃん喧嘩腰？

「いや、世話になったのは私のほうだ。ソーマとはこれから“も”仲良くしていきたい」

呼応するようにセレナさんの言葉も語調が強めだし……
というか

「今、これからも仲良くしたいって言いました？」

「あつ、うん、そうだな。盾として役に立ったからな。お前がどうしてもと言うのなら一緒に迷宮探索をしてやらんこともない」

な、なんだと……

俺の眼に映る彼女の姿は変わらないので嘘をついているということもない。

いったいどうゆう心境の変化が……

いや、盾として役に立ったって本人言っちゃってるし、それを望まれてんだろう。

それに超絶方向音痴の彼女からすれば誰かと組むという選択は当然だ。

たまたま俺に白羽の矢が当たったに違いない。

人間族嫌いの彼女が選んでくれたことがすごく意外だが、嬉しいことこの上ない。

「是非よろしくお願いします」

「そ、そうか。ならば私は明日は体を休めたいから明後日の昼にでもギルドで待ち合わせしよう」

そう言っただけで彼女はギルドから出ていこうとする。

しかし、途中で立ち止まると、振り向いた。

「それと、次からは敬語はやめろ。いいな」

そう俺に告げると返事も聞かずにギルドから出ていった。

アイテムの換金とかしてかないところを見ると独自のルートの物も知ってるんだろうな。

「ソーマ君、美人との遭遇率高いよねー」

「確かに」

「……納得しちゃうんだ」

「リカちゃんも美人の一人だよ？」

「セーキュー」

「You are welcome……ところでさ」

「なぬ？」

「いや、セレナさんに突っ掛かったのって……嫉妬？」

「んにゃ、ノリ」

リカちゃんは嘘をついていない。

それはそれでガツカリだ。

「もしかして、あたしがソーマくんに惚れてると思ったのん？」

「そ、そんなことはない」

「まだ、惚れるほどソーマくんのことは知らないしねー」

……まだつてところに望みを抱いてポジティブに考えよう。

俺達は俺が今回得たアイテムを換金してから帰った。

今回は

白の魔石（小）、ひとつ10R×10

動物の毛皮、ひとつ20R×10

ゴブリンコイン、いち枚50R×10

ハチミツ、ひと壺200R×6

計2000Rの稼ぎだった。

昨日の10倍も稼いだぞ。

とはいっても時給換算したら200Rしかないんだけど……
つかハチミツ高いよ。

狙い目か？

翌日は俺も体を休めると共にギルド指南書をじっくりと読んだり、剣を素振りしたり、あたりを散歩しながら時間を潰して、ゆっくuriとした。

焦って迷宮に挑んでも死ぬ確率が高まるだけだしな。

ちなみに約束の日、セレナさんは日が暮れてからギルドに姿を現した。

朝、体調が少し悪かったとか言い訳しているが、嘘は俺の眼に効かない。

きっとギルドに来るまでに迷ったに違いない。

……追求はしないけどね。

帰還しました（後書き）

無理矢理っばい……

待ち人來ず、知らない人は來た

セレナ（呼び捨てになった）と一緒に迷宮探索をするようになってから十日が経った。

その間は迷宮の下の階層へは行かず、五階層を中心としてあちこち動き回りながらモンスターと戦っていた。

基本的にお互いの道具袋にほどよくアイテムがいっぱいになるまで戦って、迷宮から出ることの繰り返しだ。

嬉しいことに換金した全体の金を半分ずつに分けてもらえるため、一日の稼ぎがちょっとばかり増えた。

そういうことを繰り返し続けたおかげで、少し金も貯まったのだが、基本的に必要な生活用品とか足りてないので、そういった物に形を変えて金は消えていった。

下着やシャツはいくつか買ったのだが、服というものは基本、今着ているジャージしかない。

これは防具も兼任しているし、神様の改造で常に清潔さを保たれているのだが、これ一着しか外で着る物がないというのも嫌だ。

そこで俺は考えた。普段他の奴らはどんなものを着ているのかと。注意して見たことなんてなかった。

周りを見回すと鎧やらローブやら、THEファンタジーといった服装の方がいっぱいいる。

いざ、観察タイム。

ちなみに今はギルドでセレナを座りながら待っていていり最中だ。例によって道に迷ってるのだろっ、すでに約束の時間から1時間が経過している。

他の者たちの服装は当然というか、自分の体に合った物で、ゴツい体のお兄さんは重鎧、ひょろいおっさんは軽鎧、快活な少女はローブを着ている。どっかのお嬢様みたいな縦ロールの角生えた人が重そうな鎧を着ていたのは少し異質で目を引いた。

まあ、他にも、それでいいのかという装備で迷宮に入る人もいた（上半身裸のムキムキ男やどうみてもビキニなお姉さん）

うーん……こう見てると普段着ってというか装備の観察だよね。

「それにしても……」

俺は袖を捲って、いわゆる中肉中背で適度な筋肉のついた腕を見る。俺ってすげえ普通だなあ……

ムキムツキの人とかと比べると自分とのあまりの違いに驚くしかない。

俺なんて神様からの能力がなければ取り留めて目立ったところがない。

だけど、俺はそんな自分が嫌いではない。

別にナルシストというわけではない。

ただ自分自身が嫌いなんて言うのは産んでくれた親に対する冒涇だと思っからだ。

「あー、ヤベ……母ちゃんに会いたくなってきた……」

今までは新しいことの発見などで、思い返すことはなかったが、いざ日常が安定しはじめると望郷の念にかられてしまった。そうなってしまうと思ひ出すのは前の世界のことばかり。

両親や友人、果ては近所のコンビニの店員さんまですべてが懐かしい。

ただ、忘れてはいけない。

あの世界での俺は死んだのだ。

もう、戻れない。
頭を抱える。

「はぁ……………鬱だ。世界中の不幸が俺に集まってるんだな」

思えば黙って成仏した方がこんなこと思わずにすんだだけ、楽だったかもしれない。

大体、違う世界に寄越すくらいなら無理矢理成仏させろっての！
……………こんなただの責任転嫁だよな。

「だけど恨まずにはいられない。それが俺のアイデンティティー」
「さつきからブツブツとうるさいですわね」

横から声がかけられる。

視線だけそちらを見遣るとさつき見た縦ロールの人がいた。
いつのまに隣に座ったんだ？

先程はちらりとしか見てなかったが、近くで見ればすつげえ整った顔立ちをしている。

炎のような赤い髪に金色の瞳、純白の鎧に身を包んでいるため体つきはわからんがどこからか薔薇のようないい香りがした。

また、頭に生える角が彼女が異種族であることを示している。

ギルド指南書によると角が生えた種族は竜族と鬼族の二種族。

んで、鬼族の角は尖んがっているのに対し、竜族は尖んがっていない。
彼女の角は尖んがっていないので、結論、彼女は

「竜族……………」

「人間族A、ワタクシは発言を許可した覚えはなくてよ」

すつげえ上から来られた……………

口調からいって良いとこのお嬢さんなんだろうな。なにより縦ロー

ルだし（偏見）。

つーかAかよ。

話し掛けといてモブ扱い。

いや、所詮俺なんてその他大勢の一人に過ぎないのだから当然の扱いか。

しかし、いきなりの雑言を軽く受け入れてやるほど俺の心は広いわけではない。

「あんたの許可を貰わないと発言できないなんてのはどこにも書かれてない」

「道理ですわね。今度からはそこら中に書いておきましょう」

皮肉が効かなかった。

「つーか、あんたいきなり何様だよ」

「ワタクシが誰だかわかりませんか？」

「あいにくと最近ここに來たもんで」

「なるほど。いいでしょう。高貴なワタクシの名をその耳垢の詰まった耳をほじくってお聞きなさい！」

そう言うと女はじっとこっちを見る。

言いたいならさっさと言えばいいのに……

「どうぞ」

あまりに沈黙が長いので促してみた。

だが彼女は口を開かない。

おいおいおい、まさか名前忘れたとかいうオチじゃないだろうな。

「……………耳垢をほじくりませんか？」

ようやく口を開いたと思ったら、俺の耳掃除待ちかよ。
めんどくさいので指で耳の穴をほじる仕草をする。

「ようやく準備ができたようですね。よく聞きなさい、人間族A。
高貴なワタクシの名前はオリビアⅡNⅡアンリ。皇位継承権をもつ
アンリ一族の長女ですわ」

「ふーん……」

どうすごいのか具体的によくわからん。
ただ、けっこういいところお嬢様なんだろうなというのは伝わって
きた。

「……反応それだけですの？」

不満そうだな。

確かにちよつとばかり薄かったか？

でも、お嬢様っていうのは半ば予想してたしな。驚くポイントが、
正直見出だせなかった。

「すごい。マジ、半端ねえー（棒読み）」

すごく馬鹿にしてる感が出てしまったな。
でも、他にやりようがなかった。

「当然ですわ。オーホッホッホッホッホッホッホッホッホッホッホ
ッホッホッホッホッ、ゲホッゴホッゴホッ…オエッ」

いくら高笑いがお嬢様の嗜み（偏見パート2）みたいなものだとし
ても長いわ。

「っ」か咽せるだけなら未だしも、嘔吐いちゃってるじゃん。

「んで、結局何の用なわけ？」

「そうでしたわ。隣に辛気臭い男がいたら鬱陶しいですから、どこかへ消えてくださいとお願いしたかったんですの」

なにその自己中発言。

「っ」かてめーが消えろと思ってても言えない小市民な俺。
さて、どうしたものか。

選択肢は二つ。

一つは彼女の希望通りにどっかに行くこと。
もう一つは居座ること。

前者は面倒は起きないが負けた気分になる。

後者は面倒が起きそうだが負けではない。

この場合は

「とりあえず仲間が来たらどっか行くんで、それまでお話でもしませんか？」

後者を選びつつも友好的にいこう。

「人間族Aごときのためにワタクシの貴重な時間を使えと？　しかし、それもまた一興ですわ。許可します。ワタクシを楽しませてみなさい」

いちいち偉そうだな。

「んじゃ、質問タイムといきますか。オリビアさんも探索者ですか？」

わかりきってるけど、取っ掛かりとして一応聞いておく。

「無論ですわ。とゆーかギルドに鎧を着けている以上、当たり前でしょうに。人間族Aは頭が悪いんですのね」

言い方が腹立つ。

そりゃ、頭いいとは思わないけど。

「なんでまた、迷宮探索を？ そんなことしなくても暮らしていいでしょう？」

お嬢様なんだし、優雅に紅茶でも飲んでろよ（偏見パート3）

「別に、ただ家の力の及ばないところに行きたかっただけですわ。でも生きるためにはお金いる。だけどワタクシは人に仕えるのは性に合いませんから、ここに行き着いたんですわ」

この都市にお前一族の家の力が及ばないなら、お前を知らなくても普通じゃないのか？

よほど一族が有名なのか、こいつ自身の名前が売れてるのか、自意識過剰なのか。

一体どれだ？

「今はどこまで迷宮探索を進めてるんですか？」

「そうですね。確か二十階層まででしたわね」

はい、名前が売れてる線は消えました。

ちなみに1番深い階層に進んでる奴は七十階層なので、初級者といったところか。

……初心者俺よりは上だけだな。

「それにしても、竜族のアンリ一族って俺、今まで聞いたことなかったです」

「そうですね？ まあ、ここは竜族の国から離れてる田舎ですし、そういう人もいるかもしれませんわね。だけど、己の無知を恥じた方がよろしくてよ」

確かに無知は恥じるべきなのかも……

うーん……一族が有名かどうかはとりあえず保留にしておこう。

「それにしても、オリビアさんは綺麗ですよ」

「いきなり、何を当然のことを言うのですの？」

当然とか真顔で言い出した。

いや、まあ、本当に綺麗だし、無駄に謙遜するよりは好感がもてるな。

絶対モテて色々と遊んでるくせに、「俺、モテないんですよ」とか言う奴よりは百倍はマシだ。

「いや、綺麗な人に綺麗って言うことこそ当然のことですよ」

「一理ありますわね。なら、もっとワタクシを褒めたたえることを許しますわ」

えええ……クッ、ノリで言葉は紡ぐもんじゃねえな。

いきなりでかい壁にぶち当たってしまった。

綺麗以外の褒めるところが見つからん。

適当に乗り切るしかない。

「まずは瞳が神秘的で美しいです」

「あらあら」

ぶつちやけ瞳が綺麗とか言う表現はよくわからん。
死んだ魚のような濁った瞳はなんとなくわかるんだけどなあ……

「顔立ちも上品です」

「まあまあ」

顔立ちが上品とか基準は何だろう？
下品な顔はすぐわかるのにな……

「体も均整のとれた素晴らしいラインですし」

「よろしくつてよ」

鎧着てんのにわかるわけねえだろうが。

「何より家柄が素晴らしい」

[illegible]

突っ込んだらダメだろうな。

とりあえず機嫌はよくできたみたいだな。

「つーかなんで俺はこの人のご機嫌とりしてんだろ。」

美人だからかなあ。

男が美人に弱いってのは当たり前だよな。

「あら、ワタクシの待ち人が来たようですね。それでは人間族A、ご機嫌よう。貴方との会話、そこそこ楽しめましたわ」

そう言うとな彼女は席を立て、似たような鎧を着た男達のもとへ歩み寄っていった。

あれが彼女の仲間なのだろう。

結局、俺のことは人間族Aで確定か。

まあ、あの縦ロール女とはもう関わることもないだろうとし気にする必要もないだろう。

それにしても俺のお仲間はまだこないのか？

……仕方ない、捜しに行くか。

待ち人來ず、知らない人は來た（後書き）

主人公はネガティブや怒りなどの負の感情の度合いによって黒くな
っていきます。

時として人は過ちを犯す（前書き）

注意

今回は主人公が少しばかりやっちゃってます

時として人は過ちを犯す

今、俺は全力疾走している。

なぜかと聞かれれば逃げていると答える他ない。

では一体何から逃げているのか。

それはほんの少し時間を遡って説明せねばなるまい。

縦ロール女との遭遇の後、ギルドから出た俺は迷子の搜索をしている。

無論迷子とはセレナのこと、彼女との待ち合わせでは毎回のよう
に俺が搜索隊として出勤している。

待ち合わせをしないで彼女を迎えに行けば早いと思うのだが、なぜ
かわからないが、「次は大丈夫だ」と自信満々に言ってくる彼女を
信じた結果がこれだ。

いい加減俺も彼女も学習するべきだろう。

ただ、彼女を待つ時間も嫌いではない。

だって………なんかデートみたいじゃね？

遅いぞとかセレナに言いつつも、内心ほくそ笑んでます。

とゆるいわけでセレナの宿泊する宿に到着しました。

とは言ってもすでに居るわけない、事実宿の人の話ではだいぶ前に
すでに出かけた後らしい。

前の世界みたいに携帯電話とかがあれば連絡もつくのだが、この世
界にはそんな便利なものはない。

ならば人捜しとは、単純に相手がどこにいるのか聞き込みをかける

か推理するしかない。

だが、忘れてはいけない。

俺には神様からもらったシックスセンスの能力があることを。シックスセンスは前の世界でも科学的には証明されていない。

だが、虫の知らせというようにただなんとなく自身の危機などの重要なことを感じ取ることがある。

俺の場合その感度が異常ともいえるほどに高い。まあ、それで見たくもない存在が視界に入ったりするのだが、慣れてきたら意図的に無視できるようになった。うん、半透明の浮いてる人なんて見えていないぞ？

そしてそのシックスセンスがなんとなくではあるがセレナがギルドとは真逆の方向にいることを伝えていた。

って真逆かよ……

宿を出てから進む方向くらいは記憶してて欲しい。

とんだファンタジスタだ。

セレナを探して三千里とまではいかないが、そこその距離があるっぽいのでゆっくり町を見ながら散策気分で歩いている。

石畳で舗装された道に軒を連ねる店や民間を見てると、なんかホントにファンタジーの世界に來たという感覚を与えてくれる。

「やめてください」

そんな声がふと聞こえたので足を止める。

俺の直感が美少女が助けを求めていると告げている。

しかし、辺りを見回すがそんな存在はどこにも見えない。

ひょっとして、未だ出会わぬか弱い存在成分というものを欲しだした俺の生み出した幻聴なのだろうか。

そう考え、歩みを再開しようとしたとき

「困ります、やめてください」

やはり聞こえた。

どこだ？

もしかして路地とかにいるのかな……おっ、いた。

そこには茶髪にレイヤーカットのミディアムヘアで毛先にパーマをかけた10代後半くらいの眼鏡の少女とそれを取り囲む三人のゴロツキ共がいた。

少女は頭に顔の横についた耳とは別にケモノっぽい耳がついている。それは獣人族の女性の証だ。

ちなみに獣人族の男性は完全に顔はその動物のものとなっている。この違いは何？

まあ、お蔭様でケモノ耳の女の子がそこら中にいて眼福ですけど。

状況から察するにゴロツキ共が少女を強引に口説いているに違いない。

メイド服の少女も困っている。

……………メイド服？

よく見たらメイド服着てるよ、あの娘。

ほ、本物なのかな……

よく見りゃ美少女だし、あんな娘に「ご主人様」とか言われてみてえ。

おっといけないいけない。

この場合は、彼女を助けねばなるまい。

はつきりいつてこれはいわゆるアレだ。

絡まれている美少女を助けてゆくゆくは…というフラグが存在して

いるに違いない。

.....

.....

.....

無理。

ダメだ、俺にはできない。

具体的には勇気が足りない。

これで相手が一人なら行ったかもしれないが三人は無理。

少女よ、すまない。

情けない俺を許しておくれ。

せめて君がこいつらの慰みものとなった後のフォローはするから（最低）

「離してくださいっ！」

「そう言わねえでオレらと遊ぼうぜ」

「そうそう、気持ちよくしてやるっつーの」

「おれっち達はいいいテクもってるから、楽しめるっすよ」

下品な笑みを浮かべながら少女ににじり寄る男達。

クッ、俺には見ていることしか出来ないのか……せめて特等席でかぶりついて見守ろう（さらに最低）。

「！ 誰だっ！」

動いたせいで音を立ててしまった。
だがなんとか誤魔化せねば。

「にゃーっ」

「なんだ猫か……」

フツ、俺の特技のひとつ、発情期っぽい猫のモノマネでなんとか乗り切れ……

「つーか今は猫の発情期じゃねーぞ。誰だっ！」

しまった！

つーかこの世界の猫の発情期がいつかなんてわからないんだよね。とゆーか今の季節すらわからない。

「くるっくー」

諦めの悪い俺としては奥の手の鳩のモノマネを出すしかない。

平和の象徴ともいえるコイツの鳴き声を聞いたらすべてはラブ&ピースに間違いない。

「なんの動物の鳴き声だ？」

「さあ、聞いたことないっす」

もしかしてこの世界に鳩いねえの？

選択をミスった。

ミンミン蝉にしとけばよかった。しかし後には引けない。

「新種だくるっくー」

「……こいつ馬鹿だろ」

「往生際わりいつつの」

「救いようがないっす」

……クズに馬鹿呼ばわりされるなんて屈辱だ。

ラブ&ピースが通じないのなら、あと世界に存在する教えはギブ&テイクの精神のみ。

つまり馬鹿にされたのなら、馬鹿にしかえすしかない。

世界中の人よ、そして動植物たちよ。俺に勇気と言う名の力を貸してくれ。

「フツ、人が動物の鳴きマネをしているうちに去っておけば痛い目にあわずに済んだものを……」

カッコつけてみた。

「誰だてめえは！」

「下賤なお前らに名乗る名前などない」

カッコつけ継続中。

「……とりあえず物陰から出て姿を見せてからカッコつけろよ」

無理無理無理。

顔見られたらおしまいだつて。

報復怖い。

「黙れ。嫌がる少女を無理矢理襲う不埒な輩ども。貴様らのポークビツツのような粗末なものなど誰も見たがらないということを理解して早々に去れ」

「なっ、貴様好き放題言いやがって」

男の尊厳馬鹿にしてんだからそりゃ怒るよね。

それにしても鳩はいないのにポークビッツはあんの？
ちなみにポークビッツとはミニサイズのソーセージのことである。

「リーダー、あいつが出てこなくてもおれっち達が近づいてけばいいんじゃない……」

「確かに。んじゃあのふざけた野郎を連れて来い」

「了解っす」

ゴロツキ共の一人がこちらに近づいてくる気配がする。
どうする？ 考えるんだ。

顔を見られずにここから逃げる方法を！

今の俺にあるのはただ怪我なくこの場を離脱することのみ。

……………よく考えるまでもなかった。

俺にはこの窮地を脱する能力があるではないか。
とゆーことで

【唸れ、俺の加速装置】

普通ならゴロツキ共を倒す。

だが、もし途方もないほど相手が強かった場合を考えて今は戦略的撤退だ。

全力でその場から離脱する。

そしてゴロツキ共から死角になるところに身を潜める。

「リーダー、なんかものすげえ速さでなんかが去って行きました」

「はあ？ ふざけんな。んで、隠れてた野郎は？」

「いないっす」

「ちゃんと探せつつーの」

「いないもんはいないっす。多分さっきのが隠れてた野郎なんじゃないっすか？」

どうやら俺の逃げる姿はよく見えなかったらしい。

よかった。動態視力次第で加速した俺の姿は普通に捉えることができるのだが、こいつらは油断してたのか見逃したようだ。さて、このままここから逃げるとするか。

「チツ、まあいい。邪魔者もいなくなったことだし、楽しもうかお嬢ちゃん」
「嫌です」

忘れてた。

クソッ、逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ。

……ふざけるのはもっとダメだよな。
なんとか俺も彼女も逃げれてハッピーな感じで終われる案はないのか。

………うん。

この方法ならやれなくもない。

そばにあった小石などを集める。

こいつをあいつらに投げつけてやる。

とはいってもちよいと怪我してもらおう程度だ。

いくら悪人相手でも人殺しなんてできるだけの覚悟はない。

要は注意を少女から俺に移してやればいいんだ。

でも、姿を見せるのは得策ではない。

なにか顔を隠すような物は……持っていないか。

……いや、あった。

しかしこれを着用するのは人としての尊厳が……
でも、背に腹は変えられない。

やってやるっ！

ついでにジャージも脱ぐ。この服はいろんな意味で目立つ。ほかに
着てる人見たこともねーし。

「キャスト・オフ……なんちって」

某ライダーの台詞なのだがキャスト・オフした後のチェンジオ○○
の音声が好きだったな……俺の股間のビートルの露出は絶対にあり
えないけどな（この状況での最低な下ネタ）。
さあ、いくぜいくぜいくぜー！

「ポークビッツ〜〜！」

大声でその名を呼ぶ。

「その声はっ！」

「あいつが戻ってきたっつーの」

「馬鹿な奴っす」

俺の声にゴロツキ共がこちらを見る。

「「「……………」」」

そして一様にその動きを停止し、信じられないようなものを見るよ
うな目を俺に向ける。

「貴様らの行いは人の道理に外れる。よって天誅をくだす」

「……いや、あんたに言われたくないわ」

「どう見ても変態だっつーの？」

「そつす。女物の下着被った奴に人の道理とか説かれたくないっす」

そう、今の俺の姿は客観的に見れば女性物の下着を覆面変わりにした変態だ。

女性物の下着とはもちろん神様からもらった物だ。

「うつせー。んなもん俺が1番わかってんだよ。死ねっボケッ！」

石を投擲する。

女の子に当てないように配慮はしているが、それ以外は狙いも糞もない。

ただ投げるだけ。

「ぐわっ、危ねっ」

「逆ギレしやがったっつーの」

「若者の暴走っす」

暴走してんのはお前らも一緒だろうに。

とゆーか20代の中盤なんて親戚の子供におじさん呼ばわりされる年齢だっつーの！

子供たちよ、俺はまだお兄さんと呼ばれたいのだぞ？ 少しは気遣ってくれ。

なんか腹立ってきた。マジで死ね。

俺は小学生時代、野球でライトを守っていた男。コントロールには自信がある。

だがしかし、blankとプラスして石の感触がボールとは少しばかり違うのか当たらない。

そして拾い集めた石は手元からなくなってしまった。

「……どうやら弾切れのようだな」

「悪い子にお仕置きの時間だっつーの」

「覚悟するっす。変態」

なんだよ……

俺がこんなことしなきゃならなかったのはお前らのせいなのに変態扱いかよ。

「お、覚えてろっー!」

嘘です。すべて忘れてください。

「あつ、待ちやがれっ!」

「変態め、逃がさないっつーの」

「待つつす」

まあ、目的も果たしたし上出来だ。

あとはうまく逃げてくれ、メイド服の少女よ。

そして冒頭に繋がる。

とはいってもそろそろ町中を下着を被って疾走するのも嫌になってきた。

だっていつのまにか追ってくる人達が増えてるんだもん。

具体的には道にいた善良な人々。

それがゴロツキ共と一緒に追ってくる。

……君達は本当の敵が誰かわかっていない。

俺なんてただ下着を被った男だぞ？

しかもいたいけな少女を救った正義の味方みたいなもんだし。
だいたいこれは自前の物だし。
盗ったわけじゃねえんだから問題はないはずだ。
頭上を見る。

HP	27 / 30
MP	28 / 30

うむ、問題ない。こいつらを振り切るには十分残ってる。
ちなみに先日レベル3に上がって最大値増えました。

【俺は風になる】

今一度加速を発動して世界をスローモーションにする。
そして一気に駆け抜けた。
そこそこ離れたところで物陰に隠れて覆面代わりの下着をとる。
これで大丈夫だろう。
念のため脱いでいたジャージの上を取り出して着る。
これで一応ばれないだろ。

物陰から出て、俺を追いかけていた集団の横を通ったがスルーされて安堵の息が漏れた。
それにしても最後の加速でMPがほとんどなくなっちゃったから本日の迷宮探索は見送りだな。
せめてセレナは見つけよう。
と考えていたところ、集団の中に見知った銀髪がいた。
セレナ、お前もか。

「よっ、こんなとこで何してんだ？」

「！ ソーマではないか」

「まったく、いつまで経っても来ないから探しにきたぞ」

「そ、そうか。それが私がギルドに行こうとした時に女性物の下着を被った変態が現れてな。女として許せないと思って追いかけているうちにこんな時間になってしまったのだ」

……露骨な嘘をつきやがる。俺の眼にはお前の鼻が某海賊漫画の狙撃手みたいに伸びて見えてんぞ。

だいたい、お前の言うその変態（認めたくない）が現れたのは約束の時間から大分経ってからだぞ。

でも藪をつつついて蛇を出したくないのでツツコミはなしだ。

「そりや大変だったな」

「う、うむ。今日は決して道に迷ったわけではないのだ」

「（嘘だって）わかってるって。それに俺も用が出来てしまったから、今日は迷宮探索は無理だしな」

「そうなのか？」

「ああ、だから明日同じ時間にギルドで待ち合わせしよう。それとも迎えにいかうか？」

「いや、大丈夫だ」

何を根拠にしてだよ。

「それじゃまた明日」

「わかった。……ところで宿にはどっちに行けばいいんだ？」

俺はセレナを宿まで送って行ってやった。

余談ではあるが、迷宮都市オースティアで女性物の下着を被った変態韋駄天男が出没するということでしたらく話題を独占した。

……ふざけんな。

少しはためらったよね？

俺が人として何かを失った翌日の早朝。

俺はセレナが宿泊する宿に来ていた。

大丈夫と言いつつも大丈夫じゃない彼女のことで、今日も迷子になるに決まっている。

故に迎えに来て損はない。

待ち合わせの時間まではまだ1時間以上あるのだが、アポイントなしに来たのだからこれくらいの余裕はみとかなきゃいけない。

待つこと10分ほどでセレナが宿から出てくる。

「おはよう」

「！ 来たのか。大丈夫だって言ったのに……」

「うん、でも一応ね」

「はあ……心配性だな。子供ではないのだからそう何度も同じ過ちを繰り返すわけあるまい」

子供の方がもつと学習能力はあります。

「んじゃ、ギルドに行こう」

「待て待て」

セレナを先導して歩きだそうとしたところで止められてしまう。
一体なんだというのだろうか。

「どうしたんだ？」

「今日はまず買い物に行こう」

これはひょっとしてデートのお誘い？

ヤバイ……今はちよつと持ち合わせがない。

この間下着（男もの）を買ってしまつてすつからかんだ。

「いや、また別の機会に……」

「私達もいい加減、下の階層に行くべきだからな。そのための準備をしなければ」

あ……そゆことですか。

そりゃそうだ。

なんでセレナが俺ごときをデートに誘わにゃならん。

この美貌だったらより取り見取りだ。

俺がこのクラスの女性を落とすには財力が必要だ。

今のど貧乏な俺なんて誰も相手にしてくれないに決まつてる。

「何をブツブツ言つてるんだ？」

「あ、いや、なんでもない」

「そうか。では行こう」

「ちよ、ちよつと！ 俺金ねーんだけど……」

「お前になら十日に一割の利息で貸してやつてもいいぞ」

それは暴利だと誰か教えてやつてー。

「フフ……冗談だ。利息なしで貸してやる」

まあ、俺もそれくらいはわかっている。

とゆーか俺の眼はこんな軽いジョークにも能力を発現するのか。

「あざーす」

とりあえずセレナに礼を言っておく。

本当はまだ下の階層に行くという覚悟は決まっていなかったのだが、セレナが行くと言った以上従うしかない。

このままだと俺はずっと下の階層に行く覚悟が決まらんかもしれないしな。

他人の意見に流されるなんてよくあることだ。

雑貨屋にてポーションと携帯食料、その他数点の道具を買い込んで準備を整えた。

場合によっては迷宮内で睡眠をとることもあるのだ。準備は怠れない。

ちなみにどうやって眠るのかというと休息用の簡易結界が一枚1000Rで売っているのだ。

これを敷いて、その上に眠ればモンスターは人を知覚できないし、近寄ってこなくなる。

ただ、地面に敷いて固定しなきゃ発動しないし、効果時間は6時間ほどなのに使い捨てなので費用が嵩む。これを三枚。

合計で1万R近くセレナから借金してしまった。

借金は嫌だが、貰ってるわけではないのでセレナのヒモではないというのが唯一の救いって奴か。
さっさと返さないとな。

いつもの如く人が並んでいないマダムの受付で迷宮探索の許可を貰い、迷宮内に入った。

迷宮の五階層に関しては隅々まで踏破しているので、下へ向かう階段の場所などはわかってる。

俺はセレナの手を握ってパーティー登録をする。

この瞬間は物凄い役得だ。

いつまでも手を握っていたいが、そうもいかない。

さあ、気を引き締めて頑張ろう。

とは言っても下への階段は結界からそう遠いところにあるわけでもない。

少しの時間で階段に着いたのだが、その間にホーンラビット（角の生えた兎型のモンスターでセレナに名前を教えてもらった）4体、ゴブリン5体、キラー・ビー4体と距離と時間のわりにモンスターとの遭遇率が高い。

………ん？　そういえば効率がいいと思って祝福をオンにしたな。

どうしようかな。

とりあえずこのままいこう。

敵と遭遇すればその分経験値とドロップアイテムが手に入る。

もうお腹いっぱいってなったらオフにすればいいんだ。

そう考えながら階段を降りていく。

いよいよ俺達にとっては未知の領域である六階層に足を踏み入れた。

「やはり構造は変わらないんだな」

六階層もこれまでと造りは一緒だ。

「だけどここの階層から出現するモンスターが変わる。気をつけろよ」

五階層ごとに結界があるように、モンスターも五階層ごとに変わる。より強力に、より凶暴に。

だから注意しなければならない。

地図を広げながら迷宮を進んで行く。

程なくして二体のモンスターに出くわした。

一体は蝙蝠のようなモンスター。

そしてもう一体はでかいキノコのようなモンスターだ。

今まで複数現れることはあったが、違う種類のモンスターが同時に現れたのは初めてだ。

「デビルバットとノコノコか。デビルバットは私が引き受けたから、お前はノコノコを頼む」

名前の雰囲気から俺が任されたのはキノコの方だろう。

よくあるRPGなんかでは森とかで出くわす雑魚の定番みたいな存在だが、油断できない。

でも、攻撃に幅というものがない俺は、とりあえず近づいて斬りかかるしかない。

「ちょいやつさー！」

掛け声が変わるのはご愛敬。

ただいましつくりくるのを模索中である。

俺の攻撃はノコノコとやらの当たりはしたが浅い。
こやつ、キノコの分際で回避行動とかとりやがる。

「ノコッ」

安直な声出しやがって。

カットマツシユルームみたいにしてやんよ。

今度は横風ぎに剣を振るう。

まあ、剣を振るといふよりも、野球のバッティングに近い。ちなみに右打席。

しかしこれも浅い。

「ノッコッ！」

ノコノコの攻撃はただの体当たりだ。

普通なら避けることも可能なほど単調なそれは俺の攻撃をかわしたあとの隙に行われたため、当たってしまった。いわゆるカウンターってやつ。

「つあつ」

ノコノコの攻撃が右腕に当たった。

普通に痛い、剣を振れないほどじゃない。

ノコノコにお返しとばかりに剣を振る。

テニスでいうバックハンドだね。

野球だと持ち手が逆だから。

この攻撃は相手を鋭く切り裂いたのだが、倒すには至らなかった。だが、あと一撃もあれば倒せるだろう。

俺が更なる追撃をかけようとしたとき、ノコノコの様子が変わる。なんと体を震えさせたのだ。

別に俺が強くて恐怖を抱いたとかそんなことはありえない。

その証拠になんか体から赤っぽい粉みたいなのが出てきた。

何だろコレ……って多分、孢子だよな！？

ヤバ……ちよつと吸っちゃった。

毒？俺、毒状態？ステータス緑ってる？

慌ててノコノコから離れて自分の状態を確認する。

でも別に吐き気とか眩暈はしない。

遅効性のものか？

とりあえずあらかじめ買つといった毒消しを飲んでおこう。

そう思つて道具袋に手を入れようとするが、急に目が霞む。

だが、やはり吐き気とかその他諸々、毒にかかった症状としてよく聞くようなものはない。

しかし何と言うか……

「眠い……」

今にでも眠りそうだ。

そういや、状態異常は毒だけじゃなくて、眠りつてのものもあるんだつたな……

こうゆうときはアレ？

自分に刃を突き立てて眠気を吹っ飛ばしたりする感じ？

だけど、自傷癖反対。

…… もういいや。

このままこの眠気に身を委ねよう。

あとはセレナに任せる。

セレナならきつとなんとかしてくれるはずだ（期待に満ちた顔）

んじゃ…… おやす、みつ！

突然左肩に激痛が走る。

肩を見れば矢が刺さってる。

え？ これって……

ちらりと後方を見る。

「眠気は飛んだか？」

「…… おかげさまで」

吹っ飛んで、どっか行っちゃいました。

味方に撃たれるなんて予想外過ぎる。

「つーか躊躇とかありました？」

「起こすのならもつと優しくソフトにしてほしかった。」

「具体的にいうと、俺がガキの頃発売されて今なお新作が発売されたりしてる携帯型ゲームでモンスターを集めて育てるやつのようならんのか。」

「あれってシリーズの赤緑青黄は通行の邪魔になってるモンスターを笛で起こすんだぜ？」

「まあ、なぜかそのあと寝ぼけたモンスターとの戦闘になるのだが……とにかく」

「味方を撃つなんて酷い」

「相手の容赦ない攻撃で起きるか永遠に目覚めないかよりはマシだろうっ？」

「……そりゃ確かに。」

「よく考えたら敵の目の前で眠るなんて格好の的だ。」

「なのに簡単に意識を手放して眠ろうとするとは、どうやら眠くて頭の回転が疎かになっていたらしい。」

「……助かった」

「いや、いいさ。それよりさっさとあいつを片付けろ」
「ういっす」

「つーてもどうすっかな……」

「ノコノコの胞子を撒く行為はまだ続いてる。」

「近づくのはナンセンスなのだが……ここはあえて行くっ！
剣を相手をつくように構える。」

「深呼吸を一回。」

「そしてまた、今度は大きく息を吸って、止める。」

「胞子を吸い込まないようにするための浅はかな知恵。」

そのまま俺はノコノコに向かって突進した。

ああやって胞子を出してる間は一步（足はないが）も動いていない。モンスターなんて何かしらの弱点があつてしかるべきだ。

恐らくは、動いていないのではなく動けないのではないか。

推測の領域を出ない話ではあるのだが、ひとつ賭けてみることにした。後ろにはセレナもいるしな。

俺は走る勢いをそのままにノコノコを突き刺した。

断末魔の悲鳴もなくノコノコは俺の剣の先で光となつて消えた。

あとに残ったのはお馴染みの白の魔石（小）のみ。

モンスターが変わってもコレかよ……

セレナの方を見ると、弓を仕舞いながらこちらに歩いてきていた。

いつの間にか蝙蝠型のモンスターは倒していらしい。

「フム……そちらも白の魔石のみか」

「そちらもつてことはセレナの方も？」

「ああ……白の魔石（小）だ。これはお互いにひとつずつ取るでない？」

「ああ、問題ない。……それにしても、これ何に使うんだよ」

モンスターを倒して一番お目にかかるこのアイテムなのだが、用途が全くわからない。

しかも安いし……

「これを何に使うのかつて……まさか、知らないのか？」

すごく意外なものを見たという顔でセレナに見つめられた。

「うん、知らない」

肩に刺さった矢を抜きながら正直に言う。

ついでに白の魔石を道具袋に入れて、代わりにポーションを取り出して飲む。

すると体が淡く光り、痛みが消える。

「お前は初めて会った時から、無知な奴だな」

思い返せば恥ずかしいものだ。

ぶつちやけ、よく許してくれたもんだ。

でもこれで、俺とセレナが結婚したりして子供ができた時には「パパとママの出会いだね。迷宮でパパが強引にパーティー登録をしてしまったことから始まるんだよ」とか言えるんだけどな。

まあ、そもそも俺とセレナがそんな関係になる確率は低いんだけどね（ゼロじゃない。決してゼロではない）

でも、異種族間で子供とかできんのかな？

興味があるので調べてみよう。

セレナに聞けば早いかも知れんが、なんの脈絡もない子供の話よりも

「んで、これって何に使うの？」

魔石のことを聞くのが優先だ。

「ウム、無知なお前にはやはり私が教えてやらねばな。仕方のない奴だ。いいか、魔石とは簡単に言ってしまうえばエネルギーだ」

「エネルギー……」

「エネルギーとは活動の源となる力のことで、他の呼び方で活動力……」

「あ、エネルギーって言葉の説明は別にいいよ。これがどうゆう風

に使われているのかを教えて」

「……………」

ヤベー……………つい話の腰を折っちゃった。

セレナが不満そうにしちゃってる。

「ごめん」

「……………まあいい、続けるぞ。魔石が何に使われているかだったな。その答えはあらゆるものと断言できるほどに我らの生活になくはないものになっている。地方では炎で明かりを灯すが、この都市では魔石を燃料にしたランプなどが用いられている。まあ、よく目にするからわかるだろ。そのほかにも今日行った雑貨屋のレジなどもそうだな。あとは魔法具の精製にも必要だ。まあ、白の魔石は純度とか諸々低いからろくなものに使えないのだがな」

要は前の世界で言う電気みたいなものか？

それにしても、またまたよくわからん単語が出てきたぞ。

「ちなみに魔法具って？」

「魔法力を注ぐことで奇跡を起こしたり、持っているだけで不可思議な効果を発動する道具だ。……………お前も持ってるだろうが」

俺も持つてる？

心当たりといえば……………

「これ？」

道具袋を持ち上げて見せる。

「そうだ。あとは銅の羽飾りや迷宮の指輪も魔法具の一種だ」

「ほえ……」

「これらは魔法力を注がなくても発動できる。しかし、魔法力を注がなくては発動しないものもある。それがこれだ」

そういつてセレナは自身の指につけていた指輪を外して手の平の上に乗せる。

「こいつにはウィンドスラストの魔法が宿っていて、魔法力を注ぎながら唱えると発動させることができる」

「ふーん……それってまだ一回も使ったことないよね」

「お前と組んでからはな。魔法力はピンチの時に温存してるんだ」

いや、問題はないんだけどね。

あと、どうでもいいことなんだが、魔法力ってMPのことではないんだよね？

っーかそれで納得しときますよ？

「一度見てみたいな」

やはり魔法！　って感じのものは是非とも拝見したい。

「うーむ……一度くらいならピンチでなくとも問題はないかもしれないな。何より見たことあるのとないのとはまるっきり違う。では、次の戦闘で見せてやることにしよう」

そういつてセレナは先陣をきって進もうとするが、それは押し止めて俺が前を歩く。

迷子になりやすいのに先に進みたがる性格なのは困ります。

それにしても、こんなに戦闘が待ち遠しいと感ずるのははじめてだ。

八階層到達

六階層での最初の戦闘が終わり、進みはじめてから程なくして魔法を見る機会は訪れた。

相手は蝙蝠型のモンスター、デビルバットとやらが二体だ。

「よしっ、ではやってみせるからな」

「えっと…片方俺がやった方がいい？」

「いや、いらん」

そう言うとセレナは先程見せてくれた指輪を嵌めている左手をデビルバットに向けて掲げる。

すると指輪が緑色に光を放つ。

「ウインドスラストっ！」

セレナがそう言い放つとデビルバットの一体が不可視の刃で切り裂かれていく。

これが魔法なのか……

なんとゆうか

「おもしろくない……」

ついつい本音を呟いてしまう。

切り裂かれてるのは解るけど過程が全く見えない。

魔法の名前から風の刃とかなんだろうけど見えないもんは見えない。おっかしいなー、ゲームとかだと緑色の刃みたいなものが見えるんだけどな。

所詮は空気か。これなら炎系の魔法の方が迫力もあるし、わかりや

すくていいんだけどなあ。まあ、持っていないもんをどうこう言っても仕方ないけどね。

そうこう考えているうちにデビルバットの一体は光になって消える。

「あと、一体」

セレナは左手をもう一体に向ける。

「ウインドスラストっ！」

そしてまた同じように唱える。

どうやらウインドスラストの攻撃対象は単体のみみたいだな。

そしてまた、見えない刃に切り刻まれてデビルバットは光になる。

「ふう……どうだ？」

一仕事終えたセレナが俺に感想を求めてくるがどうするべきだ？

とりあえず褒める？ それとも本心を話す？

いや、そんなの決まっている。

「すげーよ。これが魔法なんだなっ！」

好感度アップのためにはこっちしか選択肢がないだろ。

「これは魔力を注ぐタイプの魔法具でも最下級のもので安物なんだが、こんなものでそこまではしゃげるとはな」

呆れるようにセレナが言うが、どこか嬉しそうでもある。

俺の選択は正解を選んだみたいだな。

それにしても、安物ってことは俺にも買えんのかな。

「ちなみにおいくら万円ですか？」

「円？ これは10万Rだ」

高っ！ 魔法具高っ！

今の俺じゃ全く手が出ねーよ。

「フツ… お前が魔法具を買うためには、まず借金を返さなきゃな」
「ごもつとものです」

俺はセレナからだけではなく、実はマダム達からも借金をしている。
ここだけ聞くとなんか駄目人間っぽいな。

「それに、魔法具がなくても神様の祝福を受けていれば魔法に似た
奇跡を使うことができる」

「どゆこと？」

「繰り返すようだが、祝福を受けた神様や祝福のレベルによつては
魔法具などに頼らずとも魔法に似たものを使えるようになることも
あるんだ。ただ、全ての祝福がそうであるとは限らない。中にはた
だひたすらに身体の筋力を強化する祝福もあると聞く」

… ああ、祝福の隣に（レベル1）とかあったもんなあ。それに
しても俺の持つ神様の祝福で魔法のような力を使えるようになるん
だろうか？

どっちかというに限らない方のカテゴリーに含まれてそうだ。

「ちなみにセレナは祝福で魔法みたいなことできんの？」

「いや、私の祝福はレベル1ではそういうことはできないみたいだ。
まあ、そのうち祝福のレベルが上がれば使えることも出来るだろう」
「確か使えば使うほど力を増すんだっけ？」

「確かにそうではあるが、やはりモンスターを倒して経験値を得ていくことが大事だ」

「ん？ でもギルド指南書には……」

「間違っているとは言っていない。ただ、使うだけで上がるレベルなど高が知れていると言ったのだ。まあ、戦わないものには過ぎたる力でもあるからな。迷宮探索者以外には身体能力の向上だけでも十分過ぎるくらいだ」

にやるほどね。

まあ、確かに誰もが受けることができる祝福がただ使うだけで強力になるのだったら苦労はしない。

力を求めるならそれなりの代償も必要だということだろう。

この場合の代償とは無論命を賭けた戦いという意味だ。

「そんなことよりもほらっ」

そう言っつてセレナがデビルバットを倒してドロップした白の魔石のひとつを投げてよこす。

それをキャッチして道具袋にいれる。

これで俺の道具袋に入っている白の魔石（小）は8つ。あと2つで道具袋の限界だ。

「またこれだけか？」

「いや、違う」

そう言っつてセレナは何か拾うと俺に見せてくる。それはなんかの羽みたいなものだった。とゆーかこの場合の羽っつて

「蝙蝠の羽だよね？」

「だな」

セレナは自分の道具袋にそれを入れる。そしてそのまま道具袋に手を入れてアイテム名の確認を行っている。ここらへんこの道具袋は便利なんだよな。

「あつ、おいしい。さっきのアイテムは蝙蝠の羽ではなく、蝙蝠の翼という名前みたいだぞ」

ぶっちゃけどっちも変わらないと思うのは俺だけ？

まあ、とにかく新モンスターにおいてはじめて白の魔石以外のアイテムをゲットしたってことだ。

その後の六階層の攻略も概ね問題なく進んでいった。そして3時間ほどで七階層に辿りつき、4時間ほどの探索で八階層へと至る階段をほとんど問題なく見つけることができた。

さて、ここで概ねとかほとんどとか曖昧にした部分の問題を説明するとしよう。

と言っても本当に大したことはない。

ただ単にデビルバットに俺の攻撃が当たらず、一体も倒せなかったというだけの話だ。

さすがに凹む。まさか、繰り出す攻撃のことごとくを回避されるとは思わなかった。

奴の回避力は鬼だ。俺の剣戟の命中力が低いということも考えられるが、この際そこには目をつぶろう。

おかげでセレナはデビルバットを全て担当し、俺がノコノコを倒すときには臨機応変に動くという労働を強いることになってしまった。もちろん俺だってデビルバットに性懲りもなく立ち向かうのだが、囃役としてしか役に立っていない。

倒すモンスターの数は5：3くらいの比率なのだからセレナの方が

負担なの言うまでもないだろう。

見ればセレナも大分疲労を覚えているようだ。

「休憩を入れよう」

「そう、だな……」

俺の提案にセレナも頷く。

俺はセレナの頭上を見る。

H P 1 3 / 3 2

M P 1 5 / 4 1

続けて自分の頭上を見る

H P 1 9 / 3 0

M P 1 4 / 3 0

HPは何もモンスターの攻撃を受ければ減ると言うわけではない。

空腹を感じてもHPは減るし、MPも疲れを感じれば全くMPを使う行為をせずとも減る。

厄介といえば厄介な話だ。

連戦を重ねた俺達は、まだポーションなどに余裕はあるのだが、疲労という意味では結構キテいた。

「迷宮に入ってから大分経つし、ここらで大休止も必要じゃないか？」

「確かに……でも適切な場所がない」

「それなら八階層によさ気な場所を見つけてある」

「ほう、どこだ？」

俺が八階層の地図を広げるとセレナがそれを覗きこんでくる。

「……」

地図のある一点を指す。

九階層へと至る階段とは真逆とはいかないまでも少々遠回りとなるが、部屋のようになった空間だ。

ここなら入口のみに気を張っていれば問題はない。

「ふむ、問題はないようだ。では、ここを目指すでしょう」

そう言って立ち上がろうとするセレナの腕を掴む。

「なんだ？」

「いや、今は休憩中でしょ？ 急いては事を仕損じると言っし、休める時は休もう。目的地までは少なく見積もっても1、2時間はかかる」

モンスターの数によってはどれほどの時間がかかるかわからない。

一応祝福はオフにしておく。

出来ればオンにしておきたいが、モンスターの遭遇率は下げておきたいので致し方ない。

「……わかった」

俺の言葉にセレナも納得してくれた。

少しの休憩を挟んだあと、俺達は八階層へと歩みを進めた。
セレナの話ではここから出てくるモンスターの種類が増えるらしい。
しかし、運がいいのか悪いのか、俺達はノコノコとデビルバットに
数回遭遇しただけで目的地へと到着することができた。

「3時間交代で見張りをしつつ休もう」

セレナからそう提案されたのは当然と言えば当然だ。

いくら迷宮に入る前に購入した休息用の簡易結界があるとしても二人同時に眠りこけるのは避けなければいけない。

というのも万が一結界の効果が切れてしまった時に目を覚ましていなかったりしたら、それはもう恐ろしいことになるからだ。

具体的にはモンスターに襲われることもそうだが、何より迷宮に飲み込まれる恐れがある。

アイテムが袋の許容量を超えて、やむを得ず拾わないままにして残した場合、時間が経過すると迷宮に飲み込まれて消えてしまう。それと同じことが眠りにより微動だにしない俺達にも起こる可能性があるのだ。

それを防いでくれるのが結界なのだが、長い休息をとるときは気を付けなければならない。

「んじゃ、セレナが先に休みな」

結界を敷いた上に座りながらセレナに言う。

「いいのか？」

「無問題」

「そうか、では3時間後に起こせ」

そう言うときセレナは俺に懐中時計のような物を投げて寄越したのち、横になって眠りにつく。

手っ取り早く回復するためにはやっぱり睡眠が1番なのだ。

なので迷宮探索者は寝ようと思ったときにすぐ眠れることが必須のスキルであると言われている。

「それにしても……」

ついつい喉が鳴る。

無防備に背中を見せて眠るセレナ。

なんというか……たまらん。

襲ったらどうなんだと俺の頭の中の悪魔が囁く。

待て待て待て、まだ眠りが浅いはずだ。

って眠りが浅いとかじゃなくて襲うこと自体がダメですから、と頭の中の天使が悪魔に対抗しているが、かなり危うい。

とゆーか女性の寝姿を見ながら悶々とするなんて十代の女を知らない頃に戻ったみたいだ。

落ち着け俺。

ふと時計を見てみると早くも1時間が経過していた。

つか時間経つの早いよ！

どんだけ悶々としてんだよ。

それにしても、こうも容易く俺のそばで眠られるとわりと確かな信頼関係が築けているのかなと嬉しく思える。

最初は人間族ごときとか色々言われていたのだが、頼られている部分もある（主に方向音痴の補完として）

信頼していない相手に背中を預けるなんて有り得ない。パーティーを組むに当たって信頼関係というのは大事なのだ。その点で言えば俺もセレナには信頼をよせている。

そこによこしまな感情が一切ないとか聖人ぶったことを言うつもりはない。

だけど、もはや仲間としてセレナという存在は外せない。

俺だけがこう思ってるのかもしれないので、出来るだけセレナの意向に添う形で迷宮探索を続けていくしかない。

戦いに関して大した能力も技術も持たない俺がセレナに戦力外通告を出される可能性もあるが、出来ればセレナとは末永く一緒にやっていきたいものだ。

「うーん……」

セレナが寝返りを打つ。それによって顔がこちらを向いた。

普段は凜とした美人である彼女も寝顔はあどけない。

こんな風に彼女の寝顔を見た男が何人いるのだろうか。

つかこうやってセレナの寝顔を見てみると、入れてはいけないうる気スイッチがオンになってしまいそうなので顔を背ける。

とりあえず落ち着こう。

「あゝ、ヤニが欲しい……」

ヘビースモーカーというわけではないが、喫煙者だった俺は、この世界に来て意図せずに禁煙をしている。

まあ、購入する金がないのもあるのだが、何よりタバコがないのだ。もちろん煙管キセルや葉巻といった物は存在するのだが、俺の中ではタバコと言えば紙巻きタバコである。

やっぱ○イルドフとかキャ○ンじゃないとダメだ。

値上がりを機に止めようかとも思ったが、結局止められなかった。

この世界に来て一月も経っていないが、吸いたいと思う場面は多々ある。

「この際、葉巻に手を出してみようかな」

製造技術が拙いのか、雑貨屋で見たかぎり葉巻は安いもので一本5000Rと前の世界から考えると高い。

タバコなんぞは完全に嗜好品であるため、必要でないと言えばそこまでなのだが、自分へのご褒美としていつか買ってやろう。そんなことを考えながら時間を過ごしていった。

八階層到達（後書き）

相変わらず分かりづらい文章ですみません……

十階層到達

「馬鹿」

人をけなす時に用いられる言葉としては断トツで使用されると思われる言葉が投げ掛けられる。

誰から誰に？

答えはセレナから俺にである。

なぜこうなったかを説明するのはたやすい。
だってただ単に

「3時間交代と言っただろう！　なぜ、5時間近く経ってるのに起こさないんだ」

という理由だからだ。

「いや、セレナも疲れてるだろうし、寝不足は美容にも良くないだろうからしっかりと休んで欲しいと思ひまして……」

というのは完全な言い訳だ。

俺が起こす時間を間違えたのはただセレナの寝姿を見て色々なことを考えているうちに時間が経ちすぎただけの話である。

「それでお前の疲労が溜まっては意味ないだろ」

「その通りです」

「分かっているなら休め」

「ういっす」

すぐさま横になって目を閉じる。
この疲労感から考えれば、そう時間もかからず眠りにつくことができるだろう。

程なくして俺の意識は眠りの底に沈んでいった。

「……………きろ」

誰かの声で脳が無理矢理覚醒へと導かれる。
誰だこんなことしやがる奴は

「……………きろ……………ーマ……………」

うつせえ……………黙れよ。

「……………きろと……………ている……………」

だからうつせえって……………静かにしろや。

「起きろと言っているだろうが！」

「うるせえんだよっ！　ぶっ殺すぞっ！」

「なっ……………」

「まったく、ウゼーなこのくそアマが……………てめーのそのチョコレート
みてえな色の肌を俺の体液で白く染めてやろうか？」

「えっ？　あれ？」

人様の眠りを妨げやがって……………

マジで殺したるか。

「ソーマ……………だよ、な？」

「ああん？ それ以外の何に見えんだ、よ……………（覚醒）」

あれ？

今、わたくしはどなたに怒鳴り散らしているのでしょうか？

恐る恐る見てみればそこには啞然とした様子で俺を見つめる青い瞳とバツチリ目が合ってしまう。

ヤ、ヤバい……………俺の悪い癖が出てしまった。最近なかったから油断してた。

「な、なーんちゃって……………」

「……………」

ダメだ。「冗談にして煙に巻くのは失敗だ。
となればもう……………」

「すいませんでした」

謝るしかないよね？

つーか出会って一月も経ってないのにまたも土下座をするようなことをしでかすとは、なんたる失態だ。

「えーと、その、なんだ、寝起き悪いのか？」

「決していつもはこんなんでは……………たまたま今日は……………」

そこから俺はセレナに対してとりあえず弁明をはじめた。

それはまず人の眠りというものには、眠りが深いノンレム睡眠と眠りが浅いレム睡眠という物が存在することから始まり、90分の周

期で訪れるレム睡眠時に起きるとすつきり起きれるんだということを説明した上で、俺はノンレム睡眠時に起こされた時に極々稀に超寝起きが悪いことを説明した。ちなみにこの超寝起きが悪い状態の俺を家族や友人はディーバと呼称している（DARK相馬↓D相馬↓D馬↓ディーバ）。

ぶつちやけ男の俺にディーバってのはどうなんだと思うのだが、そこはノリと響きらしい。

このディーバ状態において失った友人や彼女の数は合わせると両手では数えきれない。

昔、修学旅行において大部屋で雑魚寝したときにディーバ状態になったときなんて……思い出したくない。ただ結果としてその後の学校生活が色褪せたことは言うまでもない。

つーかなにが最悪かって何を言ったか覚えてることだよ！ 何だよ肌を白く染めるって。どんな下ネタだよ。

こんなんじゃきつとセレナにも嫌われただろうな……

ちらりとセレナの顔を盗み見ると何やら難しい顔をしている。

「……まあ、誰にでも欠点と呼べるものはある。現に私もちょっとした方向音痴だ」

「ちよつとした？」

「……話の腰を折るな」

「す、すいません」

「でだ、お前はそれを受け入れてくれたというのに私がお前の欠点を受け入れないというのは器が小さいことだ。故に今回の件は許さう」

で、でかい……セレナがとんでもなくでかく見える。

「め、女神や……あんたこそ女神やつ！」

「そうやって茶化すのもお前の欠点のひとつだな」

手厳しいな。

「ところで俺はどれくらい寝てたんだ？」

「だいたい1時間ほどだな。本当はもう少し休ませてやりたいのだが、そろそろ簡易結界の効果がきれるのでな。休み足りないのなら新しく結界を敷くか？」

セレナの問いに俺は頭上にあるHPなどを確認する。

H P	2 2 / 3 0
M P	2 1 / 3 0

大して回復していないが、問題はないと言えるレベルだ。

「いや、進もう」

「そうか」

俺達は準備を整えてから結界を取り除いた。

さあ、はりきって迷宮探索をしよう。

俺達は八階層を進んでいくうちに新たなモンスターに出会った。

それはスケルトンという人骨っぽいもののみの体にボロボロの剣を片手に携えた輩だ。

「あれ、俺がやっていい？」

こう言い出したのはやはり俺の心のどこかでデビルバットのことで迷惑をかけていることへの後ろめたさがあるからだろう。

はつきり言ってしまうえば人を相手にしているようで恐怖の色が濃い。しかし、だからといって逃げるわけにはいかない。

「それも悪いわけではないが、二人でやろう。幸い相手は一体だ。

その方が消耗も少ない。逸るのはいいが、何事もやりすぎはよくないぞ」

「ああ」

逸りすぎってことか……確かに今無理しても意味はないかもしれないな。

「私が牽制する。ソーマはいつも通りやればいい」

「了解」

いつも通りとは敵に突っ込めということに他ならない。

剣技を習得しているわけでもない俺に出来ることなんて近づいて斬ることだけだ。

「はあああああ」

下段に構えたままスケルトンに近づく。

スケルトンは剣を縦に構えて俺を待ち構えている。

俺が攻撃の範囲に入ったことで振り下ろされたそれをほぼ同時に振り上げた俺の剣が迎え撃つ。

「ぐぬっ」

威力勝負は引き分け。重力を味方につけた振り下ろしの剣と走った

勢いをそのまま乗せた振り上げの剣は同極の磁石のように反発しあい、互いに弾かれる。

俺はすぐさま崩れた体勢を立て直す。同様にスケルトンも体勢を立て直そうとするが、そこへセレナの弓矢による邪魔が入る。よって俺の方が次の動作に移るのは速い。

「今だ」

「チェストー！」

いまだに掛け声は模索中である。

スケルトンに対して渾身の力でもって斬り掛かる。

完璧に入った攻撃ではあったが、一撃でスケルトンを屠るわけにはいかなかった。

「避けるっ！」

セレナの声に反応した俺はスケルトンが横尻ぎに剣を払うのを視認することができた。

普通だったらこのまま斬られるだろうが、あいにくと殴られるのはよくても斬られるのは今のところ遠慮したい。

とゆーことで

【加速っ】

加速状態になった瞬間にスケルトンの攻撃速度が緩くなる。

俺はそれが届く前に自身の剣撃を叩き込む。

それが致命傷だったのだろう。スケルトンは光となって消え、あとにはお馴染みの白の魔石（小）だけが残る。今回のドロップはこれだけみたいだな。

「骨のある奴だったな……スケルトンだけに」
「今回はそれしか落とさなかったようだな」

無視か。

「そうみたいだな。まったく、骨折り損だな……相手がスケルトンだけに」

「では、先に進むとしよう」

「……………スルーしないでよ」

この手の洒落は反応が全くないことが一番堪えるつてのは本当なんだなあ、としみじみ感じた。

「それにしても、最後の攻撃の時になにかしたのか？」

「へ？」

「いや、これまでのお前の動きとは比べものにならないほどの速さだったからな」

「えーと、うん。これ使った」

そう言つて自分の腕輪を示してみせる。

「これは？」

「なんつーか、魔法具？」

どう説明していいかわからないが、一番しっくりくるのはこの説明だろう。

「なんだっけ？ 魔法力を注いで発動させるタイプの奴と同じようなものだと思う」

「……………持ってたのか」

やべ……なんか不信そうに俺を見てるぞ。そりゃそうだ。持つてるのにあたかも初めて見たかのようにセレナ自身に魔法具を使用させ、説明までさせたのだ。

「いや、これのことはさっきまで忘れてたんだよ。それに魔法具のことを知らなかったのもマジだし……隠してたわけじゃないんだよ」「そうなのか。いや、別に隠してたとかそうゆうことに憤ってるわけではないんだ。聞かれなかったから答えなかった。ただそれだけのことだろう？ 私が今考えてたのは貧乏なお前がそれをどこで手に入れたのかということだ」

「はい？」

「魔法力を注ぐタイプの魔法具で速度上昇の魔法と言えばアクセルの魔法しかないのだが、身体能力に作用する魔法は効果の軽いものならば50万程度から買えるはずだが、さっきのあれから考えればかなりの強化がなされているはずだから少なくとも300万は超えてるはずだと思ってな。……まさかとは思うが盗んではないよな？」

すっげー疑惑の瞳で見つめられてるんですけど……つーか加速装置これ売ってんの！？

いや、それは置いといてまずはセレナの疑惑を解こう。

「人を盗つ人扱いしないでくれ。これは神……かみ……雷親父と近所で評判だった俺の父親が形見に遺してくれたものなんだ」

神様にもらったなんて言っていないものなのかわからなかったので咄嗟に嘘をついてしまった。

「ほんとにか？」

「イエスです」

「……なら信じよう」

嘘ついてごめんな。でも、盗んでるわけではないってことさえ伝わってるならそれでいいとおこつ。

「それじゃあ先に進もうか」

セレナの声に頷いて俺達は先へと進んでいった。

あれからそこそこの時間が経った。

俺達はなんとかあともう少しで十階層の結界へと辿りつくところまで来ていた。

ここまで来る過程において俺はレベル4となり、セレナはレベル5へとそれぞれレベルを1ずつを上げることができた。

「あとどれくらいだ？」

「うゝん……その分かれ道を右にいつて突き当たりを左に行けばいいみたいだ」

「右？」

「弓矢を構えた時に矢を持つてる方の手」

「ああ、こつちか」

だいたい道中交わされる会話の四割はこんな感じのものだ。

つかセレナは右左も曖昧なのか。

べ、別にかわいいなんて思ってるわけじゃないんだからねっ。

そんな感じで進んで行くと結界に辿り着く。

その造りは五階層のものと全く一緒のものだ。

ただひとつ大きく違うものがある。それは結界に入ってきたところとは逆の位置にある大きな門の存在だ。

「試練の間への入口だ」

俺の後ろからセレナの声がかかる。

「試練の間？」

「初心者と初級者を分ける境界線。この試練を乗り越えて初めて私は迷宮探索者と名乗ることができる」

「どんな試練なんだ？」

「聞いた話では強力なモンスターがいるらしく、それを倒すことが試練らしい」

中ボスみたいなもんか。

「不思議なことにこの門の中の試練の間には初めてのものが生きて再挑戦するものしか入れないらしい。試練をクリアしたものが門の中に入ったら十一階層へと至る階段が目の前に現れると聞いた」

「へえ」

再挑戦が出来るのか。とゆうことは負けたら確実に死ぬってことはないのかな。

という俺の考えは次のセレナの言葉に無惨に潰された。

「まあ、探索者になろうというものでここまで辿りついた者のうち実に5割がここの試練で死ぬらしいがな」

「……やっぱ死ぬんだ」

それも二人に一人の高確率で

「うん？　気にするな。私達はそれに当てはまらない。お前が死なないように私が援護してやるから」

頼もしいかぎりだ。

「とは言っても疲れたから、試練を受けるのはまたの機会だな。今日はもう帰ろう」

「そだね」

俺達は迷宮から帰還した。

外はまだ明るく、と言うか太陽が昇りはじめてそう時間が経っていない。丸一日というわけではないが、かなり長い間迷宮にいらしたい。

また、ギルドにて今回の収穫を換金した。

内訳は全体で

白の魔石（小） 10R×25個

動物の毛皮20R
×1枚

ゴブリンコイン50R
×2枚

ハチミツ200R×1壺

蝙蝠の翼 140R × 19枚

キノコの胞子180R×16袋

ボーンステック（スケルトンのドロップ） 220×5本

計7210Rでこれを半分にしてそれぞれの取り分は3605Rだった。

相変わらず大した額ではない。しかし実力がないうちはマイナスは当たり前というのが探索者の常識だということは色んなところで聞いている。

だからここで腐ってはいけない。

その後、出勤していたマダムに挨拶して、セレナを宿へと送り届けたのち、我が家とも言えるマダム宅の物置へと帰ってきた。そしてその扉を開けた時、一枚の紙が舞落ちる。

「なんだこれ？」

拾って見てみるとそこには『好きです』と文字が書いてある。どこからか風に飛ばされてきたのだろうか。でも、扉に挟まっていたように思っただけだな。リカちゃんのいたずらかなんかかな。そう思っただけは、その紙を持って物置に入り、紙をそこに置いて眠りについた。

この紙がこれから俺に起こる出来事の前触れに過ぎないことを俺はまだ知らない。

十階層到達（後書き）

基本的にモンスターのドロップアイテムは魔石が100% + それぞれのモンスターごとに違うアイテムが約20%と考えています。なんか締めが仰々しいかもしれませんが、そんな大したことにならないと思います。

笑えない手紙

ふと、物音がしたような気がして目を覚ます。

周りを見回すが変わったところはない。いつも通りの綺麗に整頓されたT H E物置な風景だ。

「気のせいかな……っか今何時くらいなんだろう？」

この部屋には時計はないし、俺も持っていない。また、窓もないため時間を知る術はない。

「とりあえず風呂に入りたい」

服は神様の力で勝手に綺麗になるのだが、自分自身の体はそうはいかない。帰ってきて速攻で眠ってしまったので、はやく風呂に浸かりたかった。

起き上がって部屋から出ようとドアに手をかけた時、ちょっとした違和感に襲われる。

とは言ってもドアの隙間から紙のようなものが覗いているだけのことなのだが。

その紙を手を取ってみると『好きです好きです』とどっかで見たような筆跡で書かれている。

「どこだっけ？」

少し考えて帰ってきたときに発見した紙の存在を思い出す。まあ、そんなことはどうでもいい。どうせリカちゃんのいたずらだ。今は風呂だ。

そう思つて俺は外にでる。

外は太陽が昇りきり、中天を過ぎた頃だった。大体6時間ほど眠つたのだらうななどと考えながらマダム宅の鍵を開けて入る。

基本的に自由に風呂などを使えるように俺はマダム宅の合鍵を貰っている。しかもどうしても腹が減つてゐるなら家の中にある食材を勝手に調理して食べてもいいとまで言われているほどだ。

はつきり言つてかなり信頼されているというか信頼しすぎじゃね？

と思わなくもないが、別に盗みを働くつもりもないし俺としても都合がいいことに違ひないので有り難く今の立場を甘受している。

真つすぐ風呂場に向かうと一応誰も入っていないことを確かめてから中に入る。

最初はリカちゃんとの嬉し恥ずかしドッキリ遭遇とか夢想してたりもしたのだが、んなことになつたら二度と家に入れないと言われてるので細心の注意を払っている。

「ふいゝ、あゝゝゝ」

バスタブに湯を張つて浸かる。至福のひと時とはこの瞬間のことだ。

「たまらんっ！ もゝタマランチ会長だっ！」

などといくだらないことを口走つてしまふ。

まあ、こんなことを言つてしまふくらい脳が緩んでいるってことだ。

「むむむっ？」

なにかを感じた気がして視線を上げる。すると換気用の窓が僅かばかり開いているのが見えた。

「はて？ 開けたっけ……」

俺が入った時は閉まっていたような気がするのだが、見逃したのだろうか？ わざわざ窓が開いているかいないかを確認して風呂に入るような真似をしていないので自信はない。まあ、開いてるのだから開けたのだろう。そう思ってその場は気にしないことにした。

「いやーええ湯でござんした」

頭を拭きながら物置へと戻ってくる。さっぱりした気持ちでドアに手をかけるとそこにはまたも紙片が挟まっているではないか。

抜き取って開いてみると『好きです好きです好きです』の文字が書かれている。起きた時に発見したものと同じ筆跡っぽい。つまりは同一人物だ。

「つーか増えてる」

なんか不気味だ。とゆーか今はリカちゃんはギルドでの仕事ではないはずだ。つまりはリカちゃんのいたずらではない？

「も、もしやストーカーって奴？」

言ってて恥ずかしくなってきた。

つーか誰が俺をストーカーするんだよ。心当たりがまるでない。とゆーか俺ごときがストーカーされるわけがない。

ではこの紙はなんだという話になるのだが、俺がここに住んでいることはセレナでさえ知らないことだ。別に隠しているわけではないのだが、マダムとリカちゃん以外で知っている者は皆無と言っている。

つまりは間違つてここに入れられた可能性がある。だってここは大変おモテになるリカちゃんの家だし、リカちゃん宛ての恋文（笑）がここに挟まれたと考えるのが自然ではないだろうか。

「うん、解決っ！」

はやく恋する少年もしくは青年。はたまたおっさんが間違いに気づくか、リカちゃんへ真っ向勝負をかけることを望む。

そんなことを考えながらその後は剣を振ったり、町をぶらついたりして過ごした。

それから数日が経った。

俺とセレナは試練には未だ挑まず十階層を中心にレベル上げを行っている。

と言うのも十階層の適正レベルは5であるにも関わらず俺のレベルが4のままで挑むのは不安だったからだ。

しかしそれも過去の話。今回で俺のレベルは無事に5となった。

「これで次回は試練に挑めるわけだな」

「まだ不安なんですけど……」

「そう言っつていつまでも先延ばしにするわけにもいかんだろ。それにずっと言っているが、私と一緒に試練を受ける以上大丈夫だ」

俺としてはその無駄な自信がどこから沸き上がってくるのか是非とも知りたい。

「大体お前は普段おちゃらけてるのに、ビビり過ぎだ。それで慎重になるのはわかるが、それも過ぎると前に進めないぞ。何事もほど

「ほどが丁度いい」

あなたは先走り過ぎですけどね。

「さて、今日と明日は体を休めて明後日に試練を受けよう。お前はそれまでにしっかりと覚悟を決めてこい」

「死ぬ覚悟？」

「馬鹿、不吉なことを言うな。私が言っているのは試練を受ける覚悟だ。当日ビビって駄々をこねても聞かないからな」

「善処します」

「便利な言葉だな」

呆れたようにセレナが言う。

「そりゃそうだ。だからこそこの言葉を政治家などのお偉いさんが使うんですよ。」

そしてセレナを宿まで送ってから、俺も帰ることにする。

「また、あるのかな……」

不安を口にする。

俺の不安と言うのは例のアレに他ならない。

「……あつた」

物置のドアを見つめながら呟く。

そこにあるのはドアに挟まった複数の紙片。

そう、複数だ。

日を追うごとに数が増え、そして

「うわあ……」

紙を一枚抜き取って、折りたたまれたそれを開いて見てみる。

そこには相変わらずの『好きです』の文字が書いてあるのだが、その量はもはや尋常な数ではない。今ではA4の紙ほどの大きさに小説などの活字よりも更に小さな文字でびっしりと書かれている。

少し遠くから見ればそれはもはや黒い紙に見えることだろう。

はじめは恋する少年（青年もしくはおっさん）を応援していた俺ではあるが、もやはそんなことは露ほども思っちゃいない。

一途なのはいいが、こんなん嫌がらせ以外のなにものでもない。リカちゃん達の身の安全も考えてそれとなくストーカーには気をつけてなどと言ってはいるが、やはり犯人を捕まえねば危険だ。

こういう奴は物語的に「僕の物にならないなら君を殺して僕も死ぬ」とか言い出しそうだしな。

誰かに相談しようにも知り合いらしい知り合いもないし、セレナに頼るのも男としてどうなんだと言うことなんで俺一人でどうにかしよう。

なあにストーカー少年（青年もしくはおっさん）ごとき俺一人でどうにか出来るだろう。

とゆうことで本日は隠れて物置のドアを寝ずの番をしながら見張ることにしよう。

紙が挟まれているのは絶対にドアだ。しかも毎日でなおかつ数時間に一回は確実に。

ならばここで張っていれば犯人は必ず姿を現す。そこを現行犯逮捕だ。

俺はそそくさと物陰に身を潜める。

さあ、犯人よ。いつでもきやがれ！！

朝になってしまった……

まさか一晩中見張ることになるとは思いもしなかった。

マジで寝ずの番をしたので超ねみい……

犯人は現れることはなかったのだが、叶わぬ恋と悟って諦めたのだろうか。

それならそれでいいことだとは思うのだが、だとすればタイミング悪いよ。せめてあと一日続けるか早くやめて欲しかった。

そうであつたなら俺も一夜を無駄に過ごすことはなかったのに……などと考えながら出勤するマダムとリカちゃんを物陰から見送る。

これじゃあ客観的に見て俺がストーカーみたいだよ……

まあ、危険は去つたみたいだしとりあえず寝よう。

そう思つて物陰から出て物置部屋に戻ろうとした時、ポケットから何かが落ちる。

それは最近よく目にするようになった物で、俺が眠らずに一晩過ごす原因となつた物。

恐る恐る拾い上げて開くと見慣れてしまつた筆跡で『好きです』という文字がびっしりと書かれている。とゆーか更に文字が細かくなつてる。

「な、なんで俺のポケットに……」

そのことに驚愕しながらポケットをまさぐる。

「う、嘘……」

指に当たる感触にさらに戦慄せざるをえなかった。

それを握り、ポケットから取り出すとそこにはさきほどと同じような紙が大量に出てくる。

「どどどどどうして!？」

思わず声を荒げてしまう。

そう一体いつ俺のポケットに入れたのだろうか。

いや……そうではない。

なぜ俺のポケットに入っているのか？

紙を一枚一枚開いて見てみる。

そこに書かれているのは『好きです』という言葉だけ。

そこが問題だ。

これがリカちゃんに宛てたものならば俺に渡す必要はない。それどころか『近づくな』と警告のようなものがあって然るべきだろう。

友好的で恥ずかしがり屋な奴だとしたら『これをリカさんに渡してください』とかあってもいい。とにかく俺に『好きです』と書かれた紙を渡す必要性を感じないのだ。

とゆーことはつまり。俺は思い違いをしていたということだ。

これはリカちゃん宛ての物が間違って物置のドアに挟まれていたわけではなく……

「俺に宛てられた物……？」

一気に眠気が覚めてしまった。

紙に書くように俺に好意を持っているのかいたずらなのかはわからないが、こんなを送ってくるというか俺に気づかれないようにポケットに入れるような男が俺を狙っているというのは事実だ。どっちにしろ

「こ、怖い……」

よく考えれば、風呂の度に違和感を感じていたような気がする。あと、物置部屋に常になんとも言えないような違和感を感じている。

それが何かはわからないがここに居ちゃいけない気がする。
俺はその場から走り出す。

とりあえず方角に見当はつけない。ただこの場から離れたかった。

走って辿り着いたのはよく見る建物の前。

正確にはセレナの宿泊する宿の前だ。

何故かここに来てしまった。

とりあえず中に入る。

「いらつしゃっ……おや、セレナちゃんのお迎えかい？」

「あ、いや。そうじゃなくて……セレナいます？」

「顔が青いけど大丈夫かい？」

「青春って感じですか？」

「どっちかというと青酸っ感じ」

毒？

「まあ、セレナちゃんなら部屋にいるよ」

「ども」

勝手知ったるなんとやらだ。

自分の泊まっている部屋さえ時々迷ってしまうセレナを部屋まで送り届けたこともあるためどの部屋にいるかもわかっている。

俺はその部屋の前まで行くと扉をノックする。

「はい」

中から凜としたセレナの声が聞こえて来る。

「助けてセレナえもん」

「帰れ」

「冷たい……」

「まったく、何の用だ？」

セレナがドアを開けてくれる。

「助けてくれ」

「本当に困ってるらしいな。とりあえず入れ」

セレナは俺を中へと招き入れる。

セレナの部屋はさして広いわけではなく、テーブルと椅子、そしてベッド以外には特になにもない簡素なものだ。

「その椅子にでも座れ。で、どうした？」

「あのな……」

ベッドに腰掛けたセレナに薦められるままに椅子に座り、ここへ来るに至った経緯を話す。証拠品として『好きです』と書かれた紙も見せた。

「ふむ……なるほどな」

「どうかお知恵をお貸しください」

セレナに頭を下げる。

「とは言ってもな……一晩張ってダメだったんだろ？」

「うん」

「それで気づかないうちに大量にポケットに入れられた、と」

「そうです」

「じゃあ、お前一人では手に負えないってことではないのか？」

「……そうかも」

「では、諦めて尻の心配でもしてろ」

「そんな殺生な！」

下げていた頭を上げて抗議の声を発する。とゆーかこの女、血も涙もないのか。

ちよつと前（前話）に女神だとか言ったの取り消しっ！

「とゆうのは半分冗談で、見ようとしてダメなら姿を見せざるを得ない状況を作るしかないだろ」

「どんなん？」

「さあ？ 姿を見せないような奴は嫌いだとても大声で喚いてみたらどうだ？」

な、なんて名案なんだ。

「そもそもお前はこの手紙を出したのは男だと思っているようだが女だという可能性

「よし、早速実行してくるっ！」

えっ？ あっ、ちよつと待て！ 人の話は最後まで……」

セレナの部屋から出て向かうのは宿の外。

そして外に出ると大きく息を吸い込む。

「俺はこそこそ隠れる奴は嫌いだっ！ 手紙なんてもんに頼らず、堂々と出てこいや！」

来るなら来いっ！

俺の尻の貞操は何人たりとも許しはしないっ！

笑えない手紙（後書き）

くだらない駄洒落とかは流し読みしてください……

不審者

「本当に言ったのか……」

後ろからセレナの呆れたような声が聞こえる。彼女と出会ってからこのような声を出させるのは何度目のことだろうか。

「えっ？ ダメだったん？」

「別にダメではないが、場所は選べ」

周りを見回すと何人も人が可哀相なものを見る目で俺を見ている。正直すごくいたたまれない気持ちだ。

「なに見てんだ、コラ」

とりあえず恥ずかしくないんだぞと端的に強がってみた。

「そこでその発言はどうなんだ？」

「いや、少しでも硝子で出来たマイハートの崩壊を防ごうと思ってね。ほら、あれだよあれ。天の邪鬼ってやつ」

「天の邪鬼と言うのはひねくれ者のことだ。お前はどっちかという道化だな。とは言ってもお前の発言で笑えるようなことは一切ないがな」

笑えない道化^{ヒエロ}ってどうなんだろ？ 想像したらすごく悲しいことになりそうだ。

とゆーかめっちゃけなされてるんですけどー！

しかもこの人の言葉がマジで言ってることが瞳の能力でよくわかる。

「まあそれでも滑稽であることには変わらないがな」

そう言つてクククツと笑うセレナ。なんとゆうか改めてなんでこの人が俺と組んでいるのか疑問になった。

「ん？ どうした？」

「いえ、なんでもありません（棒読み）」

「馬鹿にされたと思つて拗ねたのか？」

「ちゃうわい！」

「フフツ、そう拗ねるな。私自身はお前のそういうところは好ましいと思うよ」

「茶化すところは欠点だとか前に言つてなかった？」

「それはそれ。これはこれ。とゆーか欠点であると指摘はしたが嫌いだとは言つていないぞ」

曲解してセレナは俺に惚れてると言うことか？

「違うから」

「思考を否定しないでよ」

「やっぱり勘違いしてたのか。お前に対してあるのはあくまで仲間としての好意だから勘違いするな」

「その台詞をもう少しツンデレの風味を効かせてもう一度言つてくれ」

「はあ？」

「例えば、『あ、あくまで仲間としての好意なんだから！ 決してあなたのことを男として好きじゃやないんだから勘違いしないでよねっ！』つて感じで。さあ、リピートアフターミー。いや、Repeat after me」

「……可哀相に。早くも脳の壊死が始まっているのか」

ああ……冷たい。視線がものすごく冷たい。
なぜだ。なぜ理解されないんだ。

「とゆうか助けてくれと泣きついてきたわりに余裕だな。もう大丈夫なのか？」

そう言われると不安になってくるのが人の心というものだ。

「大丈夫じゃないんで、今日は泊めてつかあさい」
「嫌に決まってるだろ」

即答で断られた。

まあ、予想はしてたけどね。

「とゆうかもう帰れ」

「おいおい、それは冷たすぎやしませんか？ 例えるなら真冬に流氷の浮かぶオホーツクの海に水着で飛び込むくらい」

「例えがよくわからない」

出たよ。ジェネレーションギャップならぬアナザーワールドギャップ。

元の世界のネタは基本的に通じないからやりきれない。

「なんだったら送っていつてやるつか？」

「……あなた帰れませんやん」

「余計なお世話だ。せつかく人が……」

「とにかく！ これでこの手紙の主と真っ向から話し合っことが出来る」

「いや、そんな都合よくいくわけないだろ。そもそもさっきのを聞いているという保証もない」

言われてみればその通りだ。

それじゃあ扉にでも大きく書き置きでもしておくか。

それですべてが万事うまくいくとは限らないが、今現在これ以上のことは思いつかない。

だけど一人で帰るのは不安だ……

しかしセレナを連れていくなんて無理だしな……いや、セレナが帰れないなら帰さなければいい。つまり、泊めちゃえばいいんだ。

となればうまく誘導していかなければなるまい。

「や、やっぱり不安だからついてきてくれないかな？」

「帰れないとか馬鹿にしてただろ」

「そ、それならいつそ泊まっちゃえばいいじゃん！」

「は？」

「あつ、しまった。つい本音が……ち、違うんだ。別にやましい気持ちはひとつもなくて、その、なんとゆうか……」

「それは俗に言う墓穴というものではないのか？」

どうする？ どうするんだ俺。このままじゃ早くも計画が破綻してしまう。

何か、何か起死回生の一言を言わねば俺はただのスケベ野郎になっ
てしまう。

「いや、あれだよ？ べ、別に俺の部屋に泊まれとかそういうんじ
やなくて、大家さんというかマダムの家に泊まればいいんじゃない
かと思っただけだよ」

俺なに言ってるの？

つーか俺の立場で勝手に決めていいことではない。

「マダムというのはあのお方が」

俺と組むようになってからセレナもいつもマダムの受付を使用して
いるので面識がある。

「そう！ 俺、マダムの家の敷地内に住ませてもらってるからさ」

「ふむ、そうなのか。どうりであのお方相手に気安いと思った」

「どゆ意味？」

「別に」

なにその某記者会見で、様付けで呼ばれている人がとった態度みた
いな反応。

週刊誌とかワイドショーで叩かれても知らないよ？

とゆうかマダムって何者なんだ？

「まあ、それなら問題はないかもな。それにお前がどんなところに
住んでいるのか興味がある」

物置ですがなにか？

「それでは行こうか。あ、そうそう。道中でさっきのように何回か
叫んでみたらどうだ？」

「やめておくよ」

人々の哀れんだ視線を浴びるのは一日一回で十分だ。

そして俺達は一路マダム宅敷地内物置部屋へと向かった。

「とゆーことでこちらが俺の住むお部屋です」

「……どう見ても物置だな」

「うん」

物置です。だが、ここが我が城だ。

「手紙は……挟まってない」

「とゆうことはまだ姿を見せていないという訳だな」

「んじゃ貼り紙をしておこう」

その場で一筆奏上して扉に貼付ける。

ちなみにではあるが筆で空中に書いてはいない。

「これでよし」と

なかなかの出来栄えに惚れ惚れする。

「んじゃとりあえずマダム宅でマダム達の帰宅を待ちつつお茶でも飲もつか」

「よく考えたら私が来た意味ってないだろ」

「いやいや。セレナは俺の精神安定剤だよ。不安で一人で帰れなかったんだもん」

「いい年こいたおっさんの癖にな」

「今の発言に俺は今世紀最大の傷を心に負ったよ……言っとくけど俺の心はまだまだ若いんだよ？ フットワークとか結構軽やかなんだからね」

「はいはい」

流されたよ。

「つか俺なんてまだ、本当のおっさんに「最近の若いもんは……」

とか言われる年齢なのに……

「くやしー！ もうくやしー！ たまらんー」

「うるさい」

「くっ……セレナの方角音痴ーっ！」

捨て台詞を吐いて物置部屋の扉を開けて中に入る。こうなったらもうふて寝するしかない。

セレナなんてもう、どうすればいいか困って帰るという選択肢を選んだ後に迷子になればいいんだ。

「……あれ？」

部屋に入っただけはいいが何かがおかしいことに気づく。

とゆーか確かな違和感がある。

具体的にはこんもりと盛り上がった毛布の存在感が異様だ。

明らかに誰かが潜んでいる。

とりあえず回れ右をしよう。

ついでに扉も閉める。

「どうした？」

俺の行動に疑問を持ったセレナが尋ねてくる。それに俺はなんと答えたらいいのかわからない。

だが、ひとつわかることもある。

それは……

「助けてください」

助けを求めることだ。

「なんだ、どうした？ 情緒不安定か？」

「とにかく何も聞かずに中へ入ってください」

「え？ あ、ああ……わかった」

セレナがゆつくりと物置部屋の扉を開けて中に入る。

そして問題の物体を見つけたのか、彼女の視線はただ一点で止まる。

「あまり広くはないのだが、誰かとルームシェアでもしているのか？」

「そのような記憶はございません」

「ではこれは？」

これと言ってセレナが毛布を指差す。

「我は知らぬ。つーことでGOセレナ、GO！」

「わ、私がめくるのか？」

「俺にはそれをめくるだけのガッツが足りない」

「お前の問題だろうに」

「とか言いつつも？」

「ウザいからやめろ」

そう俺の小ボケを切り捨てつつ、セレナは恐る恐るといった調子で盛り上がっている毛布に近づいていく。

そして毛布を掴むと一気に引きはがした。

そこにあらわれたのは肌色の世界。

いや、肌色の果樹園か。大きな桃と二つの程よい大きさの林檎、そして林檎と共に実った小粒のさくらん……ゲフンゲフン。

セレナにもものすごい目で睨みつけられたので魅惑の果樹園から目を

逸らす。

「どういうことだ？」

「こっちが聞きたいくらいだよ」

「お前の女が勝手に入って寝ているとかいうオチは？」

「ありません」

「では、誘拐監禁か？」

「なんでそうなんのさ。正真正銘無実を主張する。つーかその娘のことは本当に知らないです」

「神に誓うか？」

「……ないよね？ 会ったことないよね？」

リ力ちゃんではなかったし、他に女の子の知り合いなんていないもん。

つーかよく考えたら甘い果実の鑑賞に夢中で顔とか見てないわけだが、どうしようか。

「……おい、その間はなんだ」

「いや、よく考えたら顔は見えてないので……」

「だったらどこを見ていたんだ？」

「今日は天気がいいな」

つい空を見上げてしまう。

こんな日は実に洗濯物がよく乾くことだろう。

「……それでどうするんだ、スケベ」

「男は皆スケベだから、その言葉を固有名詞として人につけるものではないと思考します」

「この娘、すっかり寝入ってしまったてみたいなのだが起こすべきだよな、むつつりスケベ」

ひどくなつた……

「オープンスケベなら許されるんですか？」

「そうゆうのは後で聞いてやるから今はこの娘のことだ」

「ご心配なくです。起きてます」

のそりと眠っていた少女が起き上がる……気配がする。
かわいい声だなー。

「……狸寝入りか」

「狸？ リンを狸呼ばわりですか？ リンはこの通りワンちゃんですよ？ わんわんっ！」

見ないように努めているため音声しか聞こえないが、不覚にもわんわん発言に萌えてしまった。

「そんなことはどうでもいいだろう……とりあえず服を着ろ」

「なぜですか？」

「とゆうかなんで脱いでんの？」

「インパクトを重視してみたんです」

大変インパクトがありました。

「いいから服を着ろっ！」

「わかりました」

ゴソゴソと何やら興味をそえられる物音が聞こえて来る。

ちよつとだけ……ちよつとだけ見るくらいなら神様も許してくれるよね？

「お着替え完了です」

「早いよっ!」

ついつい大声を出してしまった。

そして、そこで俺は初めてその娘の顔を見るに至る。

茶髪にレイヤーカットのミディアムヘアで毛先にパーマをかけた10代後半くらいの眼鏡の少女。眼鏡の奥の垂れ気味の赤い瞳が優しい印象を受ける。そして何よりもの特徴は彼女の頭に生えた犬耳だろうか。そしてもうひとつよく目立つ特徴がある。それは格好だ。彼女はいわゆるメイド服を着用している。ちなみにスカートの長さは膝頭が見えるくらいだ……くそっ、中途半端めっ!

それにしても彼女の姿はどこか脳に引っかかりを感じるのだが面識はなかったよな? とゆうかこんな美少女と面識があつたら忘れない。ただでさえ俺はこの世界では知り合いが少ないのだから。

「……誰?」

率直な感想だ。

全然知らない娘だ。

「申し遅れました。リンは楊・美玲ヤン・メイリンと言います。ご主人様のご要望に答えて馳せ参じました」

そう言って彼女——楊・美玲はヒマワリのような明るい笑みを浮かべた。

不審者（後書き）

今回は主人公のダメさが出てたらいいなと思っています。

手紙の主（前書き）

（一応の注意）

人によつてはちよつと見苦しい表現があるかもしれませんが、
ライトに受け止めて頂ければ幸いです。

手紙の主

ヤン・メイリンと名乗った少女は俺に向けてご主人様と言った。
なんというか……

「もう一回ご主人たまって言って」

「はい、ご主人様っ！」

「ヤバイ……いいわ」

「おい、その馬鹿」

「ふあいつ！」

危ない危ない……

ついつい思考が飛びかけたのだがセレナの声に呼び戻される。

「んでどうなんだ？」

「なにが？」

「だから、彼女の名前を聞いて思い当たることはあるのか？ とうかがご主人様呼ばわりされておいて知らないわけないだろう？」

「そうは言ってもなあ……」

どっかで見たことはあるような気もするが、名前を聞いてもピンと来ない。

一体どこで知り合ったのだろうか。

「えーと、メイリンさんだけ？ 少し君について質問させてもらってもいいかな？」

「はい、なんでもどうぞ」

「そっか……なら、ガーターベルトはきちんと着用あぶっ！」

セレナが殴った。

超痛いんすけど……

「くだらないことを聞くな」

「俺の中では重要だったりするんだけど」

「知らねえよ」

言葉にトゲの幻覚が見えた気がした。

「ガーターベルトは着けてます」

「えっ？ も、もちろん黒だよね？」

「はいです」

「……帰っていいか？」

セレナがすごく冷めた表情で部屋から出ようとする。

「すみません。真面目にやるんで帰らないでー」

「本当だな？」

「ういっす」

「ふざけたら帰るからな」

「ほぼ確実に一人では帰れないと思うけどあえて口にはせず、ふざけないということを誓います」

「……今のはカウントしないでやる」

そういつてセレナは深くため息を吐く。

どうやらさっきの俺の発言も本来ならふざけたものに数えられるらしい。……気をつけよう。

「とりあえず場所変えよっか？」

そう言つて俺はマダム宅の鍵を取り出すのだった。

「粗茶ですが」

いつも食事をとるところに来て着席を促し、椅子に座った二人の前に中国茶つばいものを出す。

そして俺も空いている席に腰掛ける。

「さて、何から聞けばいいのやら……とりあえずなんで俺の部屋に？」

「えっ？　だつてご主人様がリンを読んだんですよ？」

「ということみたいだが？」

デリヘル？

いや、でもそんなものを呼んだ覚えはない。

「俺がいつ呼んだの？」

「そうですね……少し前でしょうか」

「やっぱり覚えがないや」

「……私からひとつ聞いていいか？」

「どうぞです」

「ソーマがお前を呼んだというのはどこでだ？」

「いやですよ。あなたのご宿泊している宿の前で大きな声で私を呼んでたじゃないですか」

どういうことだ。

俺がセレナの宿の前でこの娘を呼んだ？

電波系って奴か？

せつかく可愛いのに……

「そうか。やはりか……」

しかし、セレナはそれで納得がいったという様子だ。

「わかりやすくかみ砕いて教えてよ」

「わからないのか？ 彼女がお前に手紙を出した者ということだ」

セレナの言葉を理解するべく俺の脳みそはフル稼働する。

しかし、そんなこと信じられるわけがない。

俺には確証が足りないんだよ。

「えっと、これ君が書いたの？」

そう言って例の手紙をメイリンさんの前に広げて見せる。

「はいです」

はい、早くも確証を得ました。

「な、なんで？」

「だって好きですもん」

彼女は曇りのない表情でそう告げる。

俺の瞳の能力で嘘ではないとわかるだけにその言葉が不思議でしうがない。

「て、てゆーか知り合いじゃないよね？」

「そうですね。リンはご主人様のことを知っていますが、ご主人様

はリンのことをよく知らないと思います。イコール知り合いではありません」

俺は彼女を知らないが、彼女は俺を知っている？

「俺を知っているというのは？」

「えへへ、ご主人様のことならだいたい知ってますよ。とは言ってもご出身は存じません。だけど身長、体重、好んで食べる物からお風呂で最初に洗うのはどこかなんてのは知ってます」

出身に関しては別の世界だから知りようがないとしても他はどうや
ったんだ？
というか！

「風呂でなんか感じると思ったらもしかして原因は君？」

「はい。ご主人様時々無駄に勘がいいんですよね。リンはこれでも
気配を隠すのとか得意なんですけどね」

「そういう問題じゃないでしょ。覗きは犯罪ですよ」
「えへへ」

なんで照れてんのこの娘……
褒めてないよね？

「というかお前は本当にコレに惚れてるのか？」

黙って成り行きを見ていたセレナが口を挟む。
とゆうかコレ扱いなんですね。

「おかしいですか？」

「いや、別に好みは人それぞれだから私がとやかく言うことではな

いのだが、どこに惚れる要素があっただ？」

遠回しにけなされてる気がする。

「全部です。リンはご主人様のすべてが好きです。でも、あえてきつかけを言うならその正義感でしょうか」

「「正義感？」」

あつ、ハモったー。

つて、俺はともかくセレナも正義感に疑問を抱いたんかい。

「コレに正義感……」

そこっ！ 疑わしげな目でこちらを見ないように。

「はい、暴漢に絡まれたリンを颯爽と救いだしてくれました。あの姿は物語の王子様のようでした……」

そう言つてメイリンさんはうつとりとした表情になる。

「お前、そんなことをしてたのか……少し見直したぞ」

見直したということはそれまでの評価は低かったってことですか？
とは言つてもそんなことあったかな？

……いや、あった。

「そうか！ あの時の娘かつ！」

「はいです」

そうだそうだ。

暴漢三人に絡まれているのを助けた時のあの娘だ。

なるほど白馬の王子様のごとく助けに現れた俺に惚れたというわけか。

納得納得……………いや、待て。

俺はあの時、正体が露見して報復を受けないようにと変装していたはずだ。しかも逃げる俺を追いかける人達もきっちり撒いた。

「……………なんで俺だと知っている？」

「どうした？」

「なんで君を助けたのが俺だってわかったんだっ！？」

「落ち着け、どうしたんだソーマ？」

セレナがいきなり取り乱した俺を心配そうに気遣うが、今の俺にはそんなことは煩わしく感じる。

バレた。

正体がバレている。

あの格好をしていたのが俺とバレている。

まさか、あの三人組にも…………

「大丈夫です。リンしか知りません」

「え…………」

「だから大丈夫ですよ」

メイリンさんが優しく諭すように俺に話し掛ける。彼女の言葉に嘘はなく、安堵する。

「話が見えんのだが…………」

セレナは頭にクエスチョンマークを浮かべている。

「ご主人様は正義のヒーローのごとく正体を隠してリンを助けてくれたのに、正体を知られていたことに慌てただけですよ」

違う。あの変態が俺だと知られていたことや、暴漢共にもバレていて報復がくるのが怖くて取り乱しただけだ。

「なるほどな。ではなぜメーリンはわかったのだ？」

「セレナさん、人の名前は正しく言うてください。リンの名前はメーリンではなく、メ・イ・リ・ン。字で書くところです」

そういつてメイリンさんは懷から紙とペンを取り出すとそこに『美玲』と書く。

漢字なんだー。なんかすごい親近感。

「さらに言えばご主人様もソーマではなくソ・ウ・マです。字で書くところです」

美玲さんは美玲と書いた隣に『相馬』と書く。なぜか相合い傘も書いていることにツツコミを入れるべきなのだろうか。

「む？ そ、それはすまん。ソーマ、いや、ソウマもすまん」

「いや、呼びやすいように呼んでいいよ」

「ですよー。リンもメーリンでいいですよ」

「……この女」

セレナの顔が完全に怒ってるよ。
ど、どうすればいいんだ。

「それで、なんでわかったのかでしたね。それは簡単ですよ。答えは匂いです。リンは犬型の獣人だから匂いを元に探したんですよ。」

わんわんっ!」

「わんわんっ!」

「こら」

「……はっ! ついつられてしまった……」

「まったく……匂いで探したねえ、どれ」

そう言ってセレナは俺に鼻を近づける。
すっぱードキドキする。

「うん……確かになんかいい感じだな」

「ですよ〜」

そこでなぜか俺の匂い談議に華を咲かせる乙女たち。

「つか匂いってもしかして神様の祝福で出た奴が関係してんのか?
あれってモンスターにだけ効果があるもんじゃないのか。

今はレベル上げのためにオンにしていたままだしな。オフったらどうなるんだろ……気になるけど今は置いておこう。

「はいはい、匂いにまつわる乙女トークはそこまでしなさい。
そして美玲さん、ちょっといいかな」

「美玲と呼び捨てでお願いします。それがお嫌ならば雌犬でもいいです」

「……………美玲、少しいいかな?」

「おい、なんで空白の時間があつたんだ。悩んだのか? お前、悩んだのか?」

「……違っよ?」

「なぜ疑問形になるんだ」

「黙秘します」

「それは答えたようなものだ」

「うっ……と、とにかく美玲はちょっとこっちに」

「はいです」

美玲を部屋の隅に連れていく。

「あ、あのな……」

「なんですか？」

うお……なんて純真な瞳をしているんだ。
つーか近くで見るとやっぱり美少女だな。

「いや、あれだ。俺の変装時の姿なんだけど……」

「あつ、はい」

そう言つて彼女はスカートの中に手を入れると何かをずり下げるか
のような仕種をみせる。

「つてちやうわいつ！」

「え？ ストックがなくなったから欲しいというお話では……」

「ありません」

「そうですか。残念です」

「俺も……じゃなくて、あの時の恰好のことは誰にも言わんでくれ
とお願いしたいんだ」

「はい、いいですよ」

「えっ？ マジで？」

なんかすげえすんなり受け入れるんだな。
嘘をついている様子もない。

「リンはご主人様の言葉ならなんでも従います」

「ああ、そうなんだ……戻ろう」

可愛い娘になんでも従うとか言われてエロいことが浮かぶのは普通だよな？

元の席に戻るとセレナが生ゴミを見るような目で俺を見ていた。

「……いやらしい」

「な、なんのこと？」

「下着を脱がそうとしていただろう？」

あつ、そっちか。

会話が聞こえていて、心を読まれたわけじゃないのね。

「あれはちよつとした誤解があつたんだ」

「どうだか……それよりも彼女、どうするんだ？」

「どうするとは？」

「彼女がお前に対して手紙を出した人物だというのはわかっただろう。しかも言動から推察すると他にもストーカー行為を働いていたと思われる。違うか？」

「いやあ、あんな程度でストーカーなんて温いだろー」

「……私やり力とか言ったか、お前の知り合いが同じことをやられていたら？」

「許せんっ！　ぶち殺すっ！」

風呂を覗くだけで死罪確定だ。俺ですら彼女たちの生まれたままの姿は見たことないのだからな。

「だ、そつだが？」

そう言つてセレナは美玲を見る。

あ、やべ……

「……………」

美玲の表情は誰が見てもわかるくらいに沈んだものとなっている。

「……確かに、勝手にご主人様の私物をこっそり拝借して新しい物と交換したり」

どうりで最近の毛布が綺麗になったり、脱衣籠に入れた下着がなんか違うなと思ったはずだ。

「眠っているのをいいことに添い寝やキスしようとしたり」

それは知らなかった。

「つか触れたんか？ 唇は触れ合ったんか？」

「ご主人様が行く先々には必ず後を付けて行きましたけど」

えっ、マジ？

「決してストーカーなんてものじゃありません。言うなればこの気持ちは純愛です」

「いくら純粋な愛情だろうと行き過ぎ、かつ一方的であればそれはストーカー行為というんだ。とゆうかソーマはそれだけされてたことに気づかなかったのか？」

「あんまり」

「さすがだな」

どういう意味でござんしょ？

「ともかく、お前のやったことはストーカーだ」

「そ、そんな……そんなことありませんよね？」

美玲が俺に縋り付いてくる。

「えっと、行為自体はストーカーみたいだね……」

「あっ……ご、ご迷惑でしたか？」

「……少なくとも受け入れられないかな」

「そう、ですか……」

そう言っただけで彼女は俺から離れると後ろ手に何かを取り出す。

それは刃が軽く反り返った長さ二十センチほどのコンバットナイフのような物。

……で、出た「受け入れられないんならあなたを殺して私も死ぬ」だ。

どうしよう。こういう時ってドラマとかでどうやって解決してんだ？ ドロドロしたのは嫌いなので見てないんだよ！。

「それをどうする気だ？」

セレナが美玲に問いかける。

「どうするんです」

そう言っただけで美玲は右手に持ったナイフで自分の左手首を躊躇なく切った。

彼女の血が吹き出す。

「……やっぱり手首ではそう簡単には死にませんね。なら今度は心

臓に」

そう言っただけ彼女は右手に持つナイフを逆手にし、自身の心臓に向けて突きだす。

俺とセレナはいきなりすることに呆然としていたのだが、その彼女の行動にはほぼ同時に戻ってくる。

だが、間に合わない。このままではマダム宅で自殺死体が出来上がってしまう。

【加速】

世界の動きがゆっくりになる。

だけど安心はできない。ゆっくりとではあるが確実にナイフは美玲の心臓に進んでいる。

「ほいつ！」

右手を握ってそれ以上ナイフが進まないようにしてから加速状態を解く。

「なんで止めるんですか？」

少し前まであった彼女の明るい雰囲気はなくなり、そこには感情の色が見えない。

「さすがに自殺は止めるでしょ」

「なら、ご主人様が殺してください」

「死にたがる意味がわからない」

「ご迷惑をおかけしたのですから死んでお詫びするのは当然です」

なにその短絡思考。

とりあえず切った左手首も持って万歳をする。

ふざけているわけではなく患部を心臓より高い位置に上げたただだ。

「セレナ、なんか縛るもんくれ」

「こんなときに緊縛プレイか」

「二の腕あたりを縛って血がこれ以上流れないようにするんだよ」

「ああ、そうか」

俺をセレナはどんなだと思ってるのか聞きたくなった。

「なんでですか？」

「うん？」

「止血するということは生かすということですよね？」

「つか自分で自分の命を絶つのは感心できない」

「でしたらご主人様が殺してください」

「嫌だよ」

「……………」

「俺が人殺しなんてしたくないってのが理由のひとつだけど、そんなことよりもっ！」

「なんですか？」

「美少女が美少女のままで散るのは惜しい……………どうせ死ぬならババアになつて天寿を全うして欲しい」

「……………」

「俺の言うことなんでも聞くって言ってくれたよね？ あれがまだ有効ならどうか死なないでくれ」

「……………はい」

俺の言葉に美玲が頷く。

よかったよかった。

「あの、右手は離してくれませんか？」

「え、でも……」

「ナイフはしまいます」

「ああ」

右手を離す。彼女はその手をそのまま腰に回す。

次に右手が現れた時にはその手にナイフはなかった。そのかわり彼女の指に嵌められた指輪のひとつが青い光を放っていた。

よく見れば彼女の指は五本すべてに指輪が嵌められている。

「ファーストエイド」

彼女の言葉と共に持ち上げている左手を見える。

血でよく見えないが傷は塞がったように思える。

「ソーマ、腕を縛るようなものは見つからなかった。少し長いんだ

が縄が見つかったんだが代わりにならないか」

「大丈夫みたいだ」

「はあ？」

「美玲が自分の魔法で治した」

「そうかそれはよかった」

なんか申し訳ないな。

せつかく探してもらったというのに。

「どうせだから使う？」

「何にだ？」

「いや、緊縛プレイとか」

「お前が動けないように縛ってやろうか？」

セレナがにじり寄ってくる。

目が本気すぎて怖い。

場を和ませる俺の小粋なジョークなのに……

「ソーマきゅん、たっだいむあ〜」

そこへなぜカリカちゃんが帰宅してくる。

まだ昼なのだが、今日は早い。

つーか帰ってきた音がしなかった。

「いや〜鍵開いってからソーマ君がいるんだと思って音も立てずに忍び込んだじゃったあたしってお・茶・目。そういえばお昼まだだよね？ 今作るから一緒に食べ……よ」

そこでリカちゃんがこの場の状況を認識する。

血まみれのメイド服の少女とその左手を掴んで上に上げてる俺。そしてその俺に縄を持って近づいていたセレナ。

「ど、どげなプレイやねんっ!」

「プレイじゃないっ!」

「えっ? じゃあ修羅場? 複数同時攻略はうまくやりなよー」

「一から説明するから変な想像はしないでくれ」

「うん、じゃあとりあえずその血っぱいの片付けよっか?」

そう言つてリカちゃんは雑巾とバケツを持ってきて掃除を始める。

俺達三人もそれにならつて掃除をした。

つーかりカちゃん、切替早いのね。

手紙の主（後書き）

彼女はヤンデレではありません。

新たなる

「なるほろね……」

掃除を終え、事情説明を聞いてリカちゃんは納得したというように頷く。

「つまりは痴情の纏れって奴ね」

何も伝わっていなかったらしい。

「話聞いてましたか？」

「うん、聞いたよ」

返ってきたのはなんとも軽い返事。

「ならば痴情の纏れじゃないのは明白でしょ……」

「うむうむ。まあ、自殺を止めたのはグッジョブでした。人様のお家で自殺とか迷惑極まりないし、後始末がめんどいからね」

「申し訳ありません……」

リカちゃんの言葉に自殺しようとした本人が謝る。

とゆーか後始末云々はどう受け取るべきなのだろうか。その意味が指すものが隠蔽とかだったら恐ろしい……

「それでストーカーちゃんはどうすることにしたん？」

「え？」

「都市の警備兵にでも突き出すのん？」

よくよく考えれば生きるとお願いしたのはいいけど、根本的な解決には至っていない。

普通に考えれば警備兵に連行させるべきなのだろうが、美玲にそれを？　ありえないね。

「ストーカーは犯罪です。よって美玲、^{メイリン} 今後は無断でのストーキング行為は控えましょう」

「はい、控えます」

うん、いい返事だ。

素直なのはいいことです。

「とゆーことで、無罪放免お疲れ様」

いやー、いいジャッジしたぜ。

裁判員も参考にしてしまうぐらい公正な裁定だ。

「あくまで『控えろ』なんだな……しかも『無断で』ということとは許可があればいいってことじゃ……」

「ん？ セレナ、なんか言った？」

「いや、別に……」

美玲とは違っではつきりとしらない奴だな。でも、美人だから許しちゃう。

男なんて美人には優しい生き物だからな。

「問題は解決したみたいやね」
「残念ながらまだです」

リカちゃんの言葉に美玲が反応を見せる。
はて？ まだ何か問題があるのだろうか。

「何？」

「えっと……リンをご主人様のパーティーに入れて欲しいのです」

少し躊躇った後に意を決したように美玲が言う。

「ぱーちー……」

こりやまたいきなりなことだな。

ちらりと横目でセレナを見てみるが特に表情への変化はない。
セレナに反対がないようならば俺に拒む理由はないのだが……

「ダメだ」

少しばかり予想していたが、やっぱり断ったか。

「どうしてですか？」

「どうしてだと思う？」

「質問に質問で返すのは愚かな所業だと思いませんか？」

「フンッ、そうゆうお前こそ質問で返しているようだが？」

「ガバチヨ……」

セレナと美玲が睨み合う。

つーかガバチヨってなんだ？

それにしてもセレナの返しがすっぱー意地悪いな。

それはそうとセレナが美玲を受け入れない理由……：そういえばセレナは前に信頼できない相手と共にには行けないことを言っていた。
押し付けてきた他人にいきなり仲間に入れてと言われて即答でいい

ですよと答える大人はそうはいない。

物事にはなんでも理由がある。

セレナがまず聞きたいのはこれではないのだろうか。
ならば俺が代わりに聞いてやろう。

「えっと……どうして俺達の仲間になりたいの？」

「何を言ってるんだお前は……そんなものお前がいるからに決まってるだろう？」

美玲ではなく、セレナが答える。

違うか？ とセレナが美玲に尋ね、美玲はその言葉に違いませんとはっきりした口調で応じる。

つか美玲が仲間になりたい理由は見当がついていたらしい。それも俺がいるからという単純な理由だ。

「んじゃ何が不満でこねてるのさ」

「ごねっ……あのな、名前以外実力も何もわからないストーカー気質の女を仲間に入れるわけないだろ……」

「ストーカーの件は解決したっしょ？」

「一応はな。だからって簡単に信用できるのか？ とゆうかなんかお前、仲間にするの前提で話を進めようとしてないか？ そんなことじゃ美人局に騙されるぞ……」

呆れたように俺に言うセレナ。

まあ、セレナの断った理由は俺の考えの通りだった。
それにしても……

「仲間にする前提で言ってるんだよ。セレナにきちんと断る理由があるならそれでいい。俺はセレナの決定に従う」

「ご、ご主人様……」

俺が味方をしないということを口に出したことで美玲が絶望したような表情を見せる。

しかし、俺は等しいレベルの美人ならより親しい方を優先させる。すまん美玲……

「と言うことで反対二票でお前の提案は否決だ。パーティーを組みたいのなら他を当たれ」

セレナが美玲にそう告げる。

「はいはい。私は賛成に一票」

とそこに右手を高々と挙げてリカちゃんが割って入る。

「貴女には関係ない」

「うん、たすかにね。でも、セレナんの挙げた理由だけでパーティーを組まないという結論に至るのも早計だと思うよ？」

「セレナんとは私のことか？ とゆうかその根拠はなんだ？」

「だって彼女をパーティーに入れることでのメリットがアウトオブ眼中になってるもの。そこを考えるべきでしょ？ とゆうかそもそのデメリットは？ 感情だけで物事を判断してるんじゃないやそう遠くない内に死ぬよ？」

美玲がパーティーに入って出るメリットとは単純に戦力が増えることだろう。美玲の実力がいかほどか知らんが、頭数が増えるということ自体がメリットと言えなくもない。

戦力の強化は迷宮での死亡率の低下に直結する。

では、デメリットはなんだろうか？

簡単に挙げれば、レベルアップに必要なモンスターの絶対量の増加

だ。単純計算でレベルアップには1・5倍ほど倒すべきモンスターの数が増える。

だが、よくよく考えれば戦力が増えれば倒すモンスターの数も自然と増えるのだからそう悪いことでもない。

では収入か？

俺達はアイテムを換金した金を等分にして分ける。三分の一とあれば当然取り分は減る。ただでさえ少ないのにこれ以上減るのはいただけない。

「フム……メーリン、迷宮の指輪に触れさせてくれ」
「どうぞ」

何か考えていたセレナは美玲の左手の指輪に触れる。五本の指すべてに指輪がつけられていた右手と違って、左手には人差し指に迷宮の指輪がついているのみだ。迷宮外で唯一、他人のHPを見るためには迷宮の指輪に触れるしかない。セレナはそれを確認したかったのだろう。

「俺もいいか？」
「もちろんです」

便乗して俺も触れる。
すると彼女の頭上に

探索者ランク H
レベル 8
HP 51 / 60
MP 64 / 68

と表示される。

HPやMPが減っているのはさきほどの自殺未遂のせいなのだろうが、それよりも探索者ランクとレベルが俺達より高いことに驚かされる。

俺もセレナもレベルは5だし、探索者ランクは一番下のEランクだ。つまり美玲は俺達よりもワンランク上の探索者ということだ。

「今は何階層を探索しているんだ？」

「基本的には十五階層の辺りです」

「私達はまだ第一の試練も突破していない。それでも私達のパーティーに入りたいのか？」

「試練を突破していないことは存じています。こっそりとストーンキングもとい後をつけていましたから」

「メーリン、これでは君へのデメリットの方が大きいのではないか？」

「何をおっしゃるビッチさん、です。ご主人様と一緒に迷宮探索、このご褒美の前には多少の不便はないも同然です」

「ビッチ……？ まあ、いいか。確かにメーリンとパーティーを組むことのメリットはある。ものは試しということでパーティーを組むことも悪くはない……しかし、簡単には信用は得られないと思え」

ビッチは否定しないの？

お父さんはそれを全力で否定して欲しい。

これが俺の最優先事項です。

「とゆうことはパーティーに入る許可を頂けたということですね？
ありがとうございます。この楊・美玲、必ずやご主人様のお役に立ってみせます。よろしく願いします」

美玲が土下座をしそうな勢いで頭を下げる。

「あ、うん、よろしく……時にセレナ、お前はビッチなのか？」

「だからビッチってなんだ？」

「尻軽とかアバズレのことです」

「なっ……」

「そんな服を日常的に着ていれば当然の帰結だと思います」

美玲が笑顔で断言した。

「わ、私は断じてビッチなどではないっ！　とゆうか見た目で人を勝手にビッチにするなっ！」

セレナは顔を真っ赤にしながら否定する。

その言葉には嘘偽りない。お父さんは信じてましたよ。

「よくぞ言った。美玲、セレナをビッチ扱いするのは今後禁じる」

「はいです。リンはセレナさんを今後ビッチ扱いしません」

「……なにかおかしくないか？　禁じないと私はビッチ扱いされることをやむを得ないのか？」

そんなこんなで美玲が俺達のパーティーに入ることが決定した。

「話もまとまったところでごはん食べよっか」

話が一段落ついたところを見計らってリカちゃんが提案する。

「うん、そうしよう」

「んじゃ作っからちよいとばかり待ってておくれやす」

「あつ、手伝います」

美玲が立ち上がったってリカちゃんにそう言った。

「いやいや、リンリンはお客なんだから座って待っててよ」

なんだその日本にやってきたパンダみたいな愛称は

「リンはメイドですから」

「ほう……ならばその腕前、見せてもらおうか」
「はいです」

二人は連れだつてキッチンへと入っていった。
この場に残ったのはセレナと俺の二人。

「セレナは行かないの？」

「私は料理できないしな。邪魔になるくらいなら行かない方がいいだろう」

「ふゝん、残念だ」

「それは私の存在が？」

「セレナの作った料理が食べられないことがだよ」
「そうか」

あれ？ 照れるかと思つたのに軽く受け流された。わりと勇気を出したんだけどな。

「それにしても美玲がパーティーに入ってくれるなら試練も楽になったな」

「馬鹿か。彼女は十五階層まで攻略してるのだから試練はすでに突破している。よって彼女と共に第一の試練には挑めない」

見落としてた……

んじゃ二人で試練に挑むしかないってことか。

「まあ、新たな仲間は歓迎すべきだね。収入が減るのはいただけないけども」

「減らないぞ？　とゆつか私達二人に関してはいくらか増える」

「え？」

「彼女は銅系の道具袋を持っていたからな。三人の袋の総量を等分するとなれば一人頭が僅かに増える」

えっと、俺の道具袋は同じアイテムが10個ずつ入って、銅系の道具袋が15個ずつ……合計25個を二人で等分すると一人12.5個分の収入で、そこに美玲の分の道具袋の総量を加えて等分すると一人頭約13.3……本当だ、増えてるよ。

「とゆーか美玲は減ってるじゃん」

「お前と組むことによつてな。ちなみに私も減つてるということを念頭に置いておけ」

「おおっ……」

ボディーブローが来た。

足を引っ張ってるのは俺か。

美玲にもセレナにも迷惑をかけてるダメな存在、それが俺。

「だけど私もそして多分メーリンもそれを承知でお前と組んでいるんだからな」

「セレナ……」

これがいわゆる飴と鞭ってやつか。現代で言うツンデレ。

あたい、これからセレナについていくっ！と思わせられた一幕だった。

その後四人で少し遅めの昼食を取った。

その際に改めて美玲のことを聞いた。

なんでも美玲は、俺が探索者だとわかった翌日にはそれまで組んでいたパーティーから離脱したらしい。

俺と組むためだとはいえ、見切り発車もいいところだ。

また、試練の内容についても聞いてみたのだが、話せないの一点張りだ。試練の内容に関しては強いモンスターと戦うと以外の情報を伝えることはできない仕様らしい。

昼食後俺はセレナを宿まで送っていくことになった。

美玲の件が片付いた以上セレナを留める理由がなくなってしまったからだ。

それを惜しく感じても、セレナが帰ると言い出したのだからどうしようもない。

「さて、色々あったが明日は予定通り試練に挑むぞ」

「延期は……しないよね？」

「別に延期しても何も変わらんのだろ」

「いや、レベルとか上がった方が……」

「確かにそうかもしれないが、レベルが上がるほど浅い階層では経験値は貯まらん。そんなことは無知のお前でもわかっているだろう？」

それに言っているだろ、私がいるのだから大丈夫だ」

セレナの根拠のない自信は慣れたものだが、不思議と今回のものはそんな気にさせられる。

「ああ、頑張ろうな」

「うむ、ではな」

俺達はそう最後に言葉を交わすと別れた。

「あの人、無駄に自信過剰なところありますよね」

「どわあっ！ 美玲いたのか……」

いきなり背後から美玲が現れた。

すごく心臓がドキドキしてる。

ちなみにではあるが、ビックリしたからであって、美少女が近くにいることで興奮してるわけではない。

「ご主人様、ご自分で無理だと考えているのなら止めた方がいいですよ。なにも急ぐ必要はありません」

「……でも、セレナが試練を受けるって言ったからね」

「ご主人様がそうおっしゃられるならそれでいいのですが……でも、一つだけご忠告を……ご主人様、セレナさんが総てにおいて正しいわけではありませんよ。……それではお先に戻らせていただきます」

そう告げると美玲は俺を置いて先に行ってしまう。

優柔不断な俺の態度に呆れてしまったのだろうか。

いや、優柔不断ではないな。俺は責任というものをセレナに押し付けているだけだ。

なにか失敗してもセレナがそう言ったからと逃げ道を作っているだけなのかもしれない。

でも…… だけど……

「俺は何にも知らないんだからしょうがないじゃないか……」

この世界のこと、そして迷宮探索というものをよくわかっていない俺が他者にすぎることが悪いことなのか？

自問自答しても答えは出ない。

とりあえず俺は今の現状にだいたい満足している。

とにかく今は帰って明日に備えておこう。

「ん？」

とそこで俺はひとつの疑問にぶち当たる。

「先に戻るって……どうゆうことだ？」

その疑問はすぐに解けることとなった。

なんと美玲はマダム宅に住むことに決まっていた。

マダム宅は二人（プラス屋外に一人）の暮らしのわりに部屋数が多く、いくつか部屋が余っている。その一室に住むそうだが、

俺が物置で美玲が普通に部屋に住むことに若干の嫉妬を感じたが、脳内の俺の女の子だからいいんじゃない？ の一言で快く迎えることができた。

そして翌日、俺とセレナ、そして新たに美玲を加えた三人で迷宮に入るのだった……

新たなる（後書き）

美玲が仲間になりました。

次回はいよいよ第一の試練に挑みます。

美玲は参加できませんが、パーティーに入った翌日に置いていくわけにも行かないので……

第一の試練・前編

ギルドにて迷宮に入る許可をもらい、社から十階層に階層ジャンプを行う。

そして十階層にて三人が巨大な門の前に立つ。

すでに俺とセレナはパーティー登録を済ませてある。

美玲メイリンに関しては今回はパーティー登録はしていない。ただ一緒に迷宮に入ったただけだ。

「緊張するなあ……」

「所詮は通過点だ」

門から発せられる威圧感に圧倒されている俺とは違い、セレナは涼しげな声でそう答える。だが、横目でちらりと見た限りでは顔が少々強張っているように思える。

「リンは門の先の十一階層へと続く階段の前でお二人を待たせていただきます」

「ここまで連れて来といて何だけど、待ってて暇じゃない？」

「連れて来たのではなくついて来た、が正解だ」

「大丈夫です。ご主人様の無事をお祈りしていれば時間なんてすぐに経っちゃいます」

「祈るのなら神殿に行け」

「なんでそう突っ掛かるのさ。仲良くしようよ」

さつきからセレナが美玲に発する言葉にとげがある気がしてならない。

「別に突っ掛かっているわけではない。でも彼女がここにいる意味が

見出だせないだけだ」

「ご主人様の近くに居たい。ただそれだけの理由です」

「見上げた隷属根性だな」

「ご主人様、リン褒められちゃいました」

そう言つて美玲はニコニコと嬉しそうに笑う。

なんと返してよいのかわからない。

隷属根性が褒め言葉になるなんて初めて知ったよ。

「えーと……んじゃ門の中に入ろうか」

「ご主人様、ちょっとお待ちください」

話題転換のため門の中に入ろうとした俺を美玲が呼び止める。

「どしたん？」

「これをお持ちください」

そう言つて美玲は右手の薬指の指輪を外すと俺に差し出す。

「えーと……」

「黄色の魔法、ライトニングが宿る指輪です。お守りの代わりに持つていてください」

くれると言つたものを断るのは気が引ける。知らない人から物をもらうのはダメだと言われて育ってきたのだが、美玲なら問題ないかなと思う。

なにより魔法が使える魔法具って超欲しかったからな。

「ありがたくもらつておくよ」

美玲から指輪を受け取る。

「ただ、美玲が着けていただけあって小さい。しかし、なんとか右手の小指に嵌めることができた。」

「その指輪がご主人様の助けになれることを願っています」

「ああ……ところで、さっき言ってた黄色の魔法ってなに？」

流そうかとも思ったが気になったので聞いてみた。

「魔法は色で表される。基本色として赤、青、緑、黄の四色と扱うのに才能がある白と黒の二色の計六色が現在確認されている。魔法を発動するタイプの魔法具は魔法力を込めると発光するだろ？ あれによって分けられるんだ。先に挙げた四色は誰でも使いこなせるが後の二色に関しては才能が必要だし、人の手では作り出せない」

「へえ」

セレナが魔法について説明してくれたが、要は魔法力を込めた時の発光色で分けているということでもいいのだろう。

「それではソーマ、行くぞ」

「うん」

セレナが門を押し開く。

その奥は黒い闇に覆われて窺い知ることはいかない。

「それではご主人様、ご武運を。仕えた翌日にリンを野良雌犬にしないでくださいね」

「何言ってるんの君？」

なんだよ野良雌犬って……

俺達は美玲をその場に残して前に進む。

「お一人でもめげずに頑張ってくださいっ！」

そう後ろから声が聞こえたと思ったたら門が閉まってしまった。

「え？ 一人ってどういうこと!？」

そうツツコミを入れてみるが、応える声はない。

そう、誰も応えてくれない。

美玲が応えないのはわかるが、こういつとき大丈夫だと声をかけてくれる女性すらもないのだ。

「セレナ？ セレナどこにいるんだっ!？」

大声で呼んでも応えは返ってこない。

いや、そもそもセレナの気配らしきものがいきなり消えたこと自体がおかしい。

セレナは俺のすぐ目の前にいたのに忽然と姿を消してしまったのだ。明らかに作爲的に俺達を引きはがした。

美玲も言っていたではないか「一人で頑張れ」と。つまり……

「試練は一人で受けるものなのか……?」

どうしよう。

早くも帰りたい。

セレナがいるから大丈夫だと思ったのに、一人でやらなきゃいけないなんて想定外もいいところだ。

生憎と真っ暗でどっちがどっちかわからない。

またいつもならシックスセンスによってこっちに行けばいいと感じ

るのだが、今回はなぜかそんなものはない。
とりあえず真後ろにそのまま進めば出られるだろうと思って進む。
しかし、せいぜい10メートルほどしか門から離れていないはずなのに一向に辿り着く様子はない。

「……どうなってるんだ？」

でも進むしかない。

立ち止まっても助けなんて来なさそうだしな。

しばらく歩くと突然、目の前に扉ほどの白い空間が現れた。

「入ってってことか？」

意を決してその空間の中に入ってみる。

そこはただただ白い空間だった。

一応壁と天井を確認できるだけの要素はあるが、一面真っ白ということに変わらない。広さは大体20メートル四方ほどの大きさだ。そしてその真っ白い空間の中央にそいつは鎮座していた。

羊、最初の印象はそれだった。丸まりながらも立派な角を持つ羊。実際遠目から見れば確かにそうだったから。

しかし、よくよく見れば明らかに違った。

下手な軽自動車ほどの大きさなのもそうなのだが、それよりもなんと顔が人のそれだからだ。

「なんだよ、あれ……」

不気味に思っ て踵を返すが、そこには先ほど俺が入ってきた入口のようなものはない。

「よく来た、人よ」

底冷えするような低い声でそいつが俺に語りかけてきた。

「我は饗饗、^{トウテツ}此度の貴様の試練を担当する」

「セ、セレナをどこにやっただよっ！」

「我は知らぬ」

俺の言葉はただ一言で切り捨てられてしまう。

「此度の試練は個々の資質を見るもの。貴様に課せられたのは我を倒すことのみ。他者の心配をする余裕があるのか？」

「いいから教えてくれ。セレナは無事なのか？」

「我は知らぬと言った」

トウテツとやらの表情は冷淡で何を考えているかわからない。こいつにも効くのかどうかかわからないが一応瞳の能力は発動していない。

「さて、先ほども言った通り貴様は我を倒せばそれで良い。掛け金は貴様の命だ」

「ちよつと待ってよ。掛け金が命って……試練に失敗したら生きて出られないということか？」

「たまに失敗しても生きてここから立ち去る者もいる。だが、それは資質を示しながらも我等に届かなかった者に温情を与えただけのこと。基本的には試練の失敗は死を意味する」

「リタイア！ ギブアップ！ 今日はこちらで鍛え直して出直します」

「認めぬ。試練の門をくぐった以上、途中で離脱はできない」

やるしかないってことか……

くそつ、何が私がいるから大丈夫だよ。いねーじゃん。

美玲も美玲だ。試練が一人で受けなきゃいけないならそう言ってくれよ。

ロングソードを鞘から抜き放ち構える。

「やる気になったようだな。ではこれより試練を開始する」

そう告げるとトウテツは腰を上げる。

……来る。

しばし睨み合いながら互いの距離を縮めていたところ、不意にそう感じて横に跳ぶとさきほどまで俺の居たところにトウテツが突進していくのが見えた。

間一髪最初の攻撃をかわすことができたみたいだ。

すぐに自分の体勢を立て直す。

そして剣を構えるが斬りかかる隙を見つけれない。

「初撃をかわしたのはなかなかだ。誇れ人よ。これだけで死んでしまふ弱き者も少なくない」

トウテツはそう言う感情が籠らない瞳で俺を見る。

そして大きく口を開けた。

そこに見えたのは猛獣の如く鋭い牙。あんなものに噛まれたらひとたまりもないことは想像に難くない。

「はあはあ……」

ただ対峙しているだけで精神が削られる。

恐怖で心が黒く染まり、気を抜けば一步も動けなくなってしまうそうだ。

その前に決着をつけるしかない。

俺の持ち得る最高の一撃をお見舞いする。

とは言っても俺が出来ることといえばただ近づいて斬るということだけだ。

でもただ近づくだけではない。神様からもらった加速装置を発動させて斬る。

それでおしまいに出来るはずだ。

【加速装置・発動】

発動させた瞬間にトウテツに近づいていく。

今の俺は10倍の速度で動いている。

いかにトウテツが強くても捉えきれているはずはない。

「うおおお」

両手で剣を持ち、トウテツの背後にまわって渾身の力を込めて振り下ろす。

ガキンツとまるで岩でも斬りつけたかのような感触。

徐々に手から肩へと衝撃が伝播し俺の動きが止まってしまう。

「我に立ち向かう勇氣は良い、だがそれだけだ」
「ぐふっ」

いきなり腹部への衝撃が走り後方へ3メートルほど飛ばされる。

「ゲホッ、ゴホッ」

一瞬、呼吸が困難になるがすぐに復活する。

トウテツに腹を蹴られたみたいだ。

それにしても攻撃を喰らってしまうとは……どうやらビックリして

加速状態を解いてしまったらしい。

「ほう、今ので内蔵破裂を起こさぬか……よき衣を身につけている」
ダメだ……死ぬ。

斬れない相手をどうやって倒せつてゆーんだよ。
この試練はまだ俺には早かったに違いない。
力の差が大きすぎる。

「どうした？ かかってこないのか？」

トウテツが俺を見ている。

その眼はかかってこないのならば自分が行くぞという意志を伝えてくる。

「くそがつ」

死にたくない。

この思いを勇気に変えて立ち上がる。

背中がダメだった。

なら今度は正面からそれも顔に突き刺してやる。

体は化け物とはいえ、顔は人だ。

普段の俺ならばそんなことは考えたとしても実行に移せるわけがない。

だが、この死を感じさせる空間が俺の心の枷のいくつかを崩壊させていた。

【加速】

今一度加速装置を起動させる。

そして半身になり、剣先をトウテツに向けて肘を曲げて構える。
そのままトウテツに向かっていく。
トウテツはただ何をするでもなくその光景を見ていた。

「喰らえっ」

そのことを不気味に感じながらもトウテツの目の前でトウテツの顔面に向かって走ってきた勢いのままに剣を突き出した。
殺ったと思ったのは剣を突き出した瞬間だけだった。

剣先はトウテツの顔に当たった瞬間からその皮膚を貫くことなく何か強い力で押し返されたかの如くしなり、刀身が半分に折れてしまったのだ。

「なっ……」

今まで共にあった愛剣の呆気ない最期に呆然としていたのも束の間、左腕から感じた鋭い痛みが俺を戦いの場に呼び戻す。

またしても加速状態を解いてしまっていた。

そこにあっただのはトウテツがその鋭い牙を俺の左腕に突き立てている光景。

「ぐわあっ！」

あまりの痛みに剣を取り落とす。

それでもなんとか左腕を解放しようと右手でトウテツの顔を殴り続ける。

するとトウテツの噛み付く力が強まり出し、俺を銜えたまま首を振る。

「うわあっ」

その動きによつて壁にまで飛ばされ、背中を強かにぶつけてしまう。

「いってー……」

やはり勝てない。

つーかどうやつても無理だ。

「え？」

そこで俺は信じられないものを見た。

いや、見てしまった。

さきほど噛まれた左腕の肘から先がない。

「あ、がああああつ！」

痛い。いや、熱い。身体中の熱が左腕に集まったかのようだ。

左手の喪失感。左手の拳を握ろうにもその命令を受けるべき手はもはやない。

言葉がうまく紡げない。

口から漏れるのは痛みを叫ぶ声なのか腕を失った悲しみに泣く声なのか自分でも判断ができない。

無意識に右手で失くなった左腕の付け根に手を置く。

触れてみて改めてわかる。俺は左腕を失ったのだと……

トウテツと俺しかいない白い空間に血の朱が広がり、俺の唸り声が反響していた……

第一の試練・前編（後書き）

敵強すぎですかねー？

それでは後編をお楽しみに（ただし期待値のハードルは下げてくだ
さい）

第一の試練・後編

左腕を失った痛みで悶える俺は、その左腕を奪った存在を憎しみの籠った瞳で睨みつける。

「ほう、腕を失ってもなお戦意は消えぬか……いや、先ほどよりも増したか？」

「……殺す」

この痛みを与えた大元であり、また左腕を奪った存在を許すわけにはいかない。

ここにきて今までトウテツに対して感じていた恐怖は薄れていき、憎悪の色が濃くなっていつている。

だからと言って俺には最早、武器も左手もない。

戦力は半減どころではない。

血を凄い勢いで失いつつある現状で長期的に戦うのは無理というものだ。

右手を腰に括り付けた道具袋に突っ込む。

すると目の前にアイテム欄の様なものが現れる。

「ポーション2」

そこからポーションを2つ取り出す。

片手を失ってしまったため開けにくいその蓋を開け、飲み干す。身体が淡い光りに包まれ、左腕の痛みも多少引いたように思えるが、血が流れていることに変わりはない。

「律儀に回復薬を飲み終わるのを待っててくれるなんて親切だな」

「窮地に陥った貴様がどうするのか見てみたいだけだ」
「はあ、はあ……そうかよ」

ただ立っているだけで体力が奪われる。
その中で今俺が出来ることを考える。
少なくとも武器がいる。

けどロングソードはトウテツの足元に落としてしまったし、替えはない。

そもそも奴にロングソードは弾かれてしまっただけで効かない。
ではどうするべきか。

こんなとき大して頭がいいわけでもない俺が思いつく方法なんてと
てもオーソドックス、つまり王道とも呼ばれる方法しかない。
要は

「外がダメなら内側からってか……」

あの口の中に渾身の攻撃をぶち込むしかない。
けどロングソードは折れてしまったし……折れた？

剣の柄はトウテツの足元に落ちている。では、剣先の部分は一体どこに？

視線だけを動かしてその行方を探す。

すると右斜め前方3メートル地点にその姿を確認できた。

プランは決まった。

では後は行動に移すのみ。

頭上のHPを確認する。

HP	31 / 40
MP	30 / 40

ポーションを飲んだばかりにも関わらず早くもHPは四分の一ほどまでに減っている。
当たり前だ。

こうしている間にも血は失われているというのに補充はされていないのだから当然の結果だ。

「行くか」

最早俺は高い確率で死ぬだろう。

それが出血多量による失血死なのかあのトウテツに向かって行って死ぬのかの違いしかない。

でもどうせなら一矢報いたい。

俺の左腕を奪ったあのファツキンシープの口に極上の鉄を食わせてやる。

落ちている折れた剣先に向かって走っていく。

トウテツは傍観しているのみだ。

余裕ということだろう。

折れた剣先に辿り拾い上げる。

そしてそのままトウテツに向かって走り出す。

「馬鹿の一つ覚えだ。選択を誤ったな、貴様はまだ試練を受けるべきではなかった」

うるさい黙れ。そんなもん骨身に染みてわかっている。

「ひと思いに楽に殺してやる」

そう言うとトウテツは口を大きく開ける。

その中では炎が揺らめくのが見て取れてしまった。

まずい。

あれを吐き出させれば、こんがり丸焼きにされてしまう。
まだあんなの隠し持ってたのかよ。

だけど……

「させねーよ」

【加速】

心の中でそう唱える。

すると俺はそのまま緩慢な動きになったトウテツの大口を開けたその口に手に持つロングソードの剣先を突き立てた。

「があああああ……」

竦った声でトウテツが唸る。

それを間近で聞きながらさらに剣先を奥へ奥へと擦込む。

「多分俺は死ぬかもだけどせめてやられた分は返させてもらっ」

そうトウテツに言いながらも剣先を進める手は緩めない。

普通の剣とは違い、柄もなにもないそれは握る力を強める度に右の手の平を裂いているが、アドレナリンでも出ているのか痛みは些細なものだ。

もうすでに右腕も肘の辺りまでトウテツの口内に侵入している。

これを縦なり横なりに動かせばトウテツに致命傷を与えることが可能だろう。

「ぐうがあああ」

「なっ……くっ！」

そろそろ脳でもぶった切ろうと考えていた時、トウテツがその口を閉じる。

左腕を奪い去った牙が今度は右腕に食い込む。

「……往生際が悪い」

痛みには耐えながら絞り出すように悪態をつく。

しかしトウテツの眼もまた俺にそう言っているようだった。

更に噛む力が強くなるのを感じながら、本当に自分が終わりなんだということを感じた。

死の間際には走馬灯を見ると言うがまさにそれが見えた。

そこには両親や友人との思い出だけではなく、この世界に来てから親しくなった人達との思い出も浮かんでくる。

と、そこで一番近い過去の思い出が脳内に再生される。

それは試練の門をくぐる直前に美玲メイリンに渡された指輪の記憶。

「ぐっ……ライトニングっ！」

力の限り叫んでみるが何も起こらない。

ダメだ……発動しない。

一体どうやればいいんだ。

確かセレナは魔法力を注いで魔法の名前を唱えると発動すると言っていた。

つまり、さっきは魔法力が指輪に注がれていなかったに違いない。

どうすればいいのかはわからないが、わからないなりに指輪に力が流れるイメージを頭に浮かべる。

そしてその魔法の名前を再び唱えた。

「ライトニングっ！」

その瞬間、トウテツの身体がブルツと震えて痙攣する。

噛み付いていた顎の力も緩まるが、これはチャンスだと思い、そのままトウテツの口内に置く。

そして先ほどと同じように指輪に力の流れるイメージをしたのちに魔法を唱える。

「ライトニングっ！」

またもトウテツの身体が痙攣した。
そしてまた、魔法力を指輪に流し

「ライトニングっ！」

発動する。これをMPが空になり、魔法が発動できなくなるまで何度も繰り返した。

「はあっ、はあっ……と、ど、め、だっ！」

そして剣を少し引き、腕を口内から出すとそのまま脳天に剣先を当て、突き刺した。

「げおっ」

なんとも気持ち悪い声を出しながらトウテツが徐々に淡い光となっていく。

どうやら倒せることは倒したらしい。

だが、俺もそろそろ限界だ。

見上げればもうHPは4しかない。

「まったく……試練厳しすぎだよ……」

その場に俺は倒れてしまう。最早、指も満足に動かせない。そのまま強烈な眠気が俺を襲ってくる。

やば……これ寝ちゃったらもう起きないだろうな……

光となっていたトウテツが完全に消えると共に扉が出現したのが確認出来た。

そして俺はそのまままた襲ってきた眠気に身を委ねた。

「う……ん……」

不意に眼を覚ます。

徐々に意識が覚醒していくと辺りを見回す。

辺りは一面白の空間。

「……天国？」

『違う』

俺の独り言に答える声がある。

この声はもしか……

「神様？」

『私だ』

「あ、いや分かってます」

神様が現れたということはやはりここは死後の世界ではないのか？

『違う、間違っているぞ。人よ、お前はまだ死んでいない』

「え？」

『周りをよく見てみる』

神様にそう言われたので周りをよく見てみる。

するとそこは所々血のようなもので汚れた白い空間であることがわかった。とゆーか、ぶっちゃけトウテツと戦った場所だ。

「どうゆうことだ？ 俺、死んだんじゃ……」

『その問いに簡潔に答えよう。まずはオープンと唱えた後、頭上を見る』

「……オープン」

神様の態度に訝しみながらも頭上を見上げる。

一体なんだと言っのだろうか。

探索者ランク H

レベル 6

HP 12 / 55

MP 02 / 55

世界神の祝福（LEVEL 2）

レベル 1 神のいたずら：体臭がなんかいい匂いがする（オンオフ可）

レベル 2 神の戯れ相手：時々世界神が話し掛けたりしてくる（拒否不可）

あつ……なんか増えてる。

しかもなんかまた微妙な感じの祝福だ。

『微妙とはご挨拶だな、人。その微妙な祝福によって生きながらえ
たと言っのに』

「はあっ？」

『話し掛けたりの方りの部分使って腕くっつけてやったりしたんだ
ぞ？ 有り難く思え』

腕をくっつけた？

すぐに視線を左腕に移す。

そこには変わりなく存在する左手の姿があった。

手を見つめながらグーにしたりパーにしたりと思ひ思いに動かして
みるが支障がない。

「すげえっ……」

『別にお前に余裕があつたら戻つて神殿で治療を受ければ結果は同
じことになっていた。だが緊急事態につき私が治した』

「あ、ありがとうございます。でも……なんで？」

『遊びの一環だ』

素直に感謝していいのかわからなくなった。

「……よっと」

立ち上がってみるが一瞬視界が霞み体がふらつく。いわゆる立ちく
らみに襲われた。

『無理はするな。怪我はだいたい治したとはいえ、血が足りていな
い』

「っーか神様がいれば死ななさそうっすね」

『それは間違いだ。いくら私でも即死はどうしようもないし、体内
の毒を浄化することもできない。また、お前のことを見ていなくて

もアウトだ。今回はたまたま手を貸せるケースだったに過ぎない。あまり当てにはするな』

「すいません」

それっきり俺と神様の会話が止まる。

俺は折れた剣を回収すると気絶する前に現れた扉に向かって歩き出す。

扉を開けて中に入るとそこは狭い個室のような空間だった。

今入ってきた扉とは別に奥に扉がある。

ただ今はそれよりも部屋の中央に置かれた宝箱のようなものが気になっ

「開けていいのかな……」

恐る恐ると言った調子で宝箱に近づき開けてみる。

そして箱の底にあったものを取り出してみる。

箱に入っていたのは1メートルを超える長さを持つ両手剣と白い何かの鍵のようなもの。

鍵を道具袋に仕舞い、両手剣をよく見てみる。拳三つ分の柄に剣の鍰の部分には赤い宝石のようなものが嵌め込まれている。鞘から抜き放つ。すると黒い刀身が姿を現す。

「なんか悪役が使う魔剣っぽい……」

でも、なぜか禍々しい感じはしない。

ちょうど今まで使っていた剣も折れてしまったことだし有り難く頂戴しておこう。

鍵についてはよくわからないので、クロースの爺に見せて鑑定して貰うことにしよう。

そう決めると奥の扉に向かって歩き出す。

扉をくぐるとそこにはただ祈るように手を組んでいる美玲と壁にもたれ掛かるように眼を閉じているセレナがいた。

「ご主人様っ」

先に俺に気づいた美玲が俺に近づいてきて抱き着いてくる。

「よ、よがったです。だ、だめがどおもいまじだ」

そして顔を俺の胸に押し付けながら泣いてしまう。

熱烈な歓迎に呆気にと取られているとセレナも俺の傍に近づいてきていることに気づく。

「あ、えっと……うわっ!？」

抱き着かれているのが恥ずかしくなつて美玲を引きはがしてくれるようセレナに頼もうとした所、セレナもまた俺に抱き着いてくる。

「な、なに!？」

これはさすがに予想外だった。
一体どうしたというのだろう。

「……ソーマ、すまなかつた。無事でよかった……」

耳元で呟くセレナの言葉の真意を理解できない。
何が起こったらこんなことになるんだ？

『簡単なことだ』

あつ、神様まだいたんですか？

『神は暇を持て余しているからな。それより彼女らの態度の理由なのだが、簡単に言えばお前が試練の門をくぐってから丸一日以上が経ったからだと推測できる』

丸一日以上ですか？

『左腕の修復に思った以上に手間取つてな。あとは本人達から聞け。私は寝る』

……神様も寝るんだ。

それつきりまた、神様は沈黙してしまう。

なんともマイペースなお方だな。

いや、まずは抱き着いている二人をどうにかしなければなるまい。

「……つってもどうすりゃいいんだろ」

女の子なのだから手荒にはできない。

「はあ……なんて気持ち悪い行動をしてしまったんだ……ソーマ、忘れてくれ」

思案しているうちにセレナが勝手に離れていく。つか気持ち悪いってなんやねん。

まあ、あとは美玲だ。

「えーと……美玲？ 君がくれた指輪のおかげで試練を突破できた。

ありがとう」

「ご主人様……」

美玲が顔を上げる。

「あと、少し離れてくれないか？ このままだと俺の男の部分が出てきちゃいます」

「リンはそれでもいいんですけど……」

そう言いながらも美玲はお願い通りに俺から離れる。

セレナと美玲が俺を見つめている。

なんか言わなきゃダメな雰囲気だ。

「黒木相馬、恥ずかしながら帰って参りました」

なんか無性にこれを言ってみたかった。

セレナに呆れたような眼で見られたことは否定できない事実だ。

第一の試練・後編（後書き）

なんと言えがいいのか……とにかく、ご都合主義ですいません。

試練後迷宮から出て（前書き）

不適切な表現があるかもしれませんが……

試練後迷宮から出て

試練を終えて迷宮から出て、ギルドに入ると入口付近にマダムが立っていた。

「戻ったのかい」

ぶつきらばうなそのたった一言にいろいろなものが詰まっているように思えた。

マダムには迷宮に入る時の受付で試練に挑むことは告げている。だいぶ心配をかけてしまったらしい……

「戻りました」

「第一の試練を突破したあんたらはもう立派な探索者だ。おめでとう」

マダムからの祝福の言葉。

それによってギルドにいた多くの者達がこちらを注視することになる。

なんとゆう羞恥プレイ……

「とゆーことでリカが家でお祝いの準備してるから帰ろうか」

「え？ あ、いや……マジすか？」

「リカも心配してるだろうからね。早く行って安心させてやりな」
「はいっ！」

リカちゃんが待ってるのならば帰らねばなるまい。
待っててくれ、今すぐ帰るからっ！

「お、おいソーマ。ちょっと待てっ！」
「ご主人様お待ちをっ！」

背後の声を無視して俺は走りだした。

ある意味前後不覚と言えなくもない状態だった。

「リカちゃんっ、今帰ったぜ」
「あ、おっか」

ダイニングに入って帰りを告げた俺に返ってきたのは予想に反して
すごく軽い出迎えのリカちゃん。
熱烈な歓迎を心に描いていただけになんとも拍子抜けだ。

「た、ただいま……」
「もう、おっそいよ」。料理冷めちゃったじゃん」

そこ？

確かにテーブルの上には所狭しと色々な料理が並べられている。
また、壁には『祝！ 第一の試練突破おめでとう』と書かれた横断
幕まである。

しかし料理は冷めているものもあるものの今だに湯気が立ちのぼる
ものもある。

「……冷めてない物もあるじゃん」
「ど、どうでもいいでしょ」

なげどもる。

ちよつと彼女の挙動が怪しいので追求しようとした時

「帰ったよ」

「ただいま戻りました」

「お邪魔する」

置き去りにしてしまったマダム達が帰ってくる。なぜかセレナも一
緒だ。

「お帰り」

リカちゃんがそれを出迎えるために玄関へと向かう。

追求の手を伸ばそうとした所を肩透かしを喰らった気分なのだが、
まあ大したことないことだしいいか。

「おや、準備は万端みたいだね」

マダムがダイニングに入ってきて部屋の中の様子を見て呟いた。

「あれ？ 他の二人はどうしたんですか？」

ダイニングに入ってきたのはマダム一人。後から続いて入ってくる
様子もない。

「リカに言つて風呂に連れてかせたよ。あんたも二人の後に入りな
「マジすか……」

マダム宅の風呂はマダムの豊満すぎるデラックスな体を受け入れる
くらいに広い。二人や三人くらいならば余裕で入浴できる。

それにしても二人の残り湯に入れと言うんですか。
ごちそうさま……いや、ありがとうございます。

「顔が緩んでるけど、湯を張替えるように言っておくべきかね……」
「すいません……馬鹿な俺を許してください」

「ふふっ、それにしてもまあ、よくこれだけ作ったもんだ。多分何かしてないと落ち着かなくてずっと料理しつづけてたんだろうねえ……」

マダムの言葉に時が止まったかのように思考が停止する。

その言葉が真実かどうかはわからないが、ポジティブに生きたい俺としては都合よくマダムの言葉を真実として受け入れておこう。

「いやゝ、あの二人ええ身体してまんなあゝ」

そこへリカちゃんがなんともおやじ臭いことを言いながら戻ってくる。

心配してくれてごめん、そしてありがとうの意味を込めてその顔に微笑みかける。

「……ソーマくん、妄想はいいけど覗くのはダメだよ?」

真顔で言われてしまった。

残念ながら俺にはニコポの才能はないらしい……

その後、俺が入浴した後（変態にならない範囲で堪能）宴が催された。

試練開始から俺が丸一日出てこなかったため、迷宮から出てきたのが昼頃だったこともあって太陽はまだ中ほどであった。だというの

に宴は大いに盛り上がった（ちなみにマダムとリカちゃん是有休をとったらしい）

日も暮れはじめた頃、電池が切れたかのように若い娘三人は眠りについてしまった。

その三人をベッドに運んでマダムも自分の部屋に戻ってしまった。

つまり俺は一人取り残されたというわけだ。

本来なら俺も疲れて眠りにつくべきなのだろうが、如何せん試練後に気絶という名の眠りについていた俺にしてみれば、まだまだ夜はこれからだぜー！　とゆう感じである。

「外で一人祝杯でもあげるか……」

席を立ち、外に出る。

マダム達との宴も楽しかったのだが、残念ながら酒は出なかった。

とゆうのも俺以外誰も酒など飲まないからだ。

今の若い子は酒を飲まなくなったと前の世界のテレビで聞いたことがあったのだが、この世界でもそうなのだろうか。

まあ、マダムが飲まないのは意外と言えば意外だ。

少し歩いて手頃な酒場に入る。

洋民とか坪七みたいなリーズナブルな居酒屋とかはないのは残念ではある。

「お姉さん、一番安い酒と安い肴をください。言っておくけど本当に魚を所望しているわけではなくて、おつまみって意味の肴だから」「余計なこと言わなくて言いですよー。ウザいだけなんでー。それじゃあちよつと待っててくださいーい」

この対応、軽くへこむわー。

「つか接客のなんたるかが分かってないよ。新規のお客さんにウザいはないでしょうが。そうゆうのは気心知れた常連さんにこそ言つてよ。そんなじゃリピーターはつきませんよ？」

若干の不満を抱きつつも、届いたやつすい味の薄いアルコールをチビチビと飲みながら肴として出された野菜炒めらしきものを口に入れる。

味はまずくはなかった。

「いい加減にしてくれっ！」

人がいい気分でアルコールの摂取に勤しんでいるというのにそれをぶち壊すような怒声が隣のテーブルから聞こえてくる。
はつきり言って不快だ。

どんなバカヤローが揉めてるのか面でも拝ませてもらおうと視線を動かせば、そこに居るのは喧嘩を売りたいほどに鍛えられた筋肉を持つ壮年っぽい、顔がバイソンの獣人族の男性とどこか見たことのある赤髪縦ロールの竜族の女性がいた。

「不倫？」

ただなんとなくそう思ったのだが、壮年の男と若い女性が二人きりでいることとイコールで結んでしまうのは早計が過ぎるだろう。

「飽きたからやめるって君は勝手が過ぎるっ！」

男がさらに怒声を響かせる。

だと言うのに他の客は一切関心を示していない。不思議だ。
それにしてもやっぱり不倫か？

捨てられた男が惨めに縋るとは……その気持ちなんとなくわかる気

がする。

所詮は遊びってことなのか？

だが、おじさんもひと時の夢を見て幸せだったでしょENDだけはやめてあげてください。可哀相で見るに堪えないから。

「飽きたも何も最初に言ったではありませんか。ワタクシに合わないようならいらないと」

痛烈……

相変わらず超自己中なんですね。

「合わないって……君からも合わせるように歩みよるとかさ」

「何を言ってますの？ わざわざ自分に似合う服を探すのは三流のすることですわ。ワタクシみたいな一流には似合う服をわざわざ持つてくるべきですよ。あなたはワタクシに似合う服を持ってこれなかった。ならこれ以上お付き合いする理由はありませんでしょ？」

女王様かよ……いや、確か自称いいとこの出身だったな。出で立ちに関してはお嬢そのものだし。

「わがままもいい加減にしたまえ。君がパーティーから抜けると僕は困るんだよ」

あれっ？

不倫じゃなかった。

失敗失敗。

テレビドラマに毒されてるなあ……

「そんなこと知りませんわ。とにかくあなた方とは組みません。お分かりになったらとっとと去りなさいな」

「……………っ！」

一方的にそう告げられた男は立ち上がるとそのまま店を出ていってしまった。

店から出る直前に女の方を睨みつけた時は勘違いでなければ殺気を放っていたようにも思える。

報復とかされんじゃねえのか？　と思って女性の方を見つめていると目が合ってしまう。

「なにを見てるんですの」

「そっちこそ何見てんすか？」

うまい返しが思いつかなかったので質問返しをしてしまった……

「貧相な男がこちらを見ていたら不快になるのは自然の理ですわ」

「……人のことデイスるのうまいですね」

「なにをよくわからないことを言ってますの。とにかくこちらを見ないようになしてくださいな」

俺の視線の行く末を勝手に決めないでいただきたい。

「相変わらず偉そうですね、オリビアさん」

「なぜワタクシの名前を……ファンですの？」

心底驚いたという様子で童族の女性オリビアさんが尋ねてくる。

「つかもしかして忘れられてる？」

「会ったことあるんですけど……」

「あなたのような人間族の顔なんてどれも同じに見えますから覚えてませんわ」

なら仕方ない……のか？

まあ、ただでさえ特徴がないと言われる人間族のなかでも俺は個性がない方だという自負があるから受け入れがたい事実というわけではない。

そういえばオリビアさんに自己紹介した覚えもない。

「んじゃ、自己紹介します。俺の名前は黒木相馬。相馬が名前です」

「別に名乗られても覚える気はありませんわよ？」

「いや、名乗ったという事実が大事なんで……」

「変わってますのね」

奇妙なものを見るような目を向けられる。

一体俺のどこが変わっていると言うのだろうか。

「ワタクシは当たり前のことを言っただけなのになぜかそれで憤慨する方が多いですからね。褒美として名前を覚えて差し上げますわ。確かクロキなんちゃらとか言いましたわね」

「相馬ね。黒木相馬」

[illegible]

名前を覚えてもらったくらいでどう光榮に思えるというんだ。

「不服そうですね」

表情を読まれたみたいだな。

「ソーリーソーリー。つつい名前を覚えてるだけで物足りない」

「気持ち顔に出ちゃいましたか？」

「物足りない……ですの？」

首をちょこんと傾けた仕草が可愛いじゃねえか。

「そうです。名前だけではなく、黒木相馬という漢をその身に刻みませんか？」

「……ああ、あなた馬鹿なんですよのね」
「失敬な」

わりと決まったと思っただのに……

「まあ、精々頑張って生きなさい。馬鹿でも生きる権利くらいはありますから」

「どうゆう意味？　ねえ、どうゆう意味？」

「それではワタクシは失礼させていただきますわ」

そう言うオリビアさんは颯爽と去っていった。

フォローとか説明しないで帰るなんて酷い……

その後は一人酒を飲みながら酒場に閉店間際まで居座った。

「日曜日に女房が逃げた、子供と一緒に消えた、月曜日は月給落として、火曜日に会社で土下座」

一週間の歌の不幸バージョンの替え歌を唄いながら家路へと歩いている。

泥酔とほろ酔いの間の程よくいい気分だ（つまりは普通に酔ってるだけ）

こんな日は月も綺麗に見えるぜ。

「おらあつ」

「てめーふざけんな」

あら、こんな綺麗な夜に似つかわしくないと汚いだみ声が耳に入ってくる。

つか男の怒鳴り声を一日二回も聞くななんて胸糞悪いな。
無視して帰るか。

「相手は一人だ。囲めばやれる」

「殺してやる」

おいおい穏やかじゃねえな。

人の好奇心というものは飽くなきものだ。

ついつい声の発生場所を探索してしまう。

そしてお約束というかなんとゆうか路地の裏でその光景を見つけることが出来た。

暗くてよく見えないが一人の人間が多数の人間に囲まれている。ざつと10人はいるだろうか。

多勢に無勢とはこのことか。

果してどんな人間がこんな憂き目に会っているのだろうか。
よく目をこらして観察することにする。

「全く、よくもまあ懲りねえもんだな」

暗闇の中から月の光を浴びて現れたのは肩ほどまでの茶髪に耳にくつものピアスを着けた身長160前後の美人さんだ。

「またこうゆう場面に出くわしちゃったよ……」

やるのか？ またあれをやるのか？

いや、ただどあれはなんか色々失った気がするから二度とやりたくない。

それに今回は人数も多い。

ダメか……

「今日こそ落し前つけさせてもらう」

「はっ！ いいぜ、どいつもこいつも全員狩ってやるよ」

えええ……お姉さん随分と好戦的だな。

そんなこと言って大丈夫なのかよ……

そんな俺の心配をよそにそこから始まったのはただただ一方的な蹂躪だった。

茶髪のお姉さんは拳打のみで他の男達を圧倒していく。

それは見ていて惚れ惚れするような身のこなしだった。

男達の懷に潜り込んで一人ずつ確実に倒していく。

そして男達の攻撃に関しては全て読み切っているのかかすりもしない。また、当たりそうな攻撃は拳を当てて的確にポイントをずらししていく。

「……強い」

気づけばその動きに目を奪われていた。

荒々しくも洗練されたその動きは見るだけでも勉強になる。

しかし……

「やり過ぎだ」

すでに男達の中に立っている者はいない。

だと言うのにお姉さんは倒れている男をわざわざ捕まえて起こして殴りつけていた。

もうどっちが悪者かわからない。

「もうやめなつて」

物陰から出て行為を制止する。

「んだテメエは？」

「通りすがりの紳士だ、覚えとけ」

決まった――っ！

「ぶち殺すぞテメエ」

なんなのその反応……

「コホンッ、ちよいとお嬢さんや。少しばかり口が悪すぎるのではないかい？」

「お嬢さんだあ？ テメエ、オレを女扱いしやがったな？ まじでぶち殺す。っーか少し口が悪すぎるって矛盾してんぞ」

細けえよコイツ……

とゆーか何？ コイツもしかして男だったりするの？ いや、待て。女扱いが嫌いな女の方かもしれない。

「何だおまえ、そんなナリで股間に短剣ぶら下げてんのかよ？」

「下品な物言いしやがって……俺の股間についてんのは槍だ」

なんか答えてくれたんですけどー。

つかやっぱ男なんだ……すっげえ残念。

「槍？　なんだ長くても細いのか？　長いだけじゃダメだぞ」

「……やっぱ煙突だ」

こだわりが強いな。

それにしても煙突……この体にか？

失礼だとは思ったが近づいてジロジロとその姿を見つめてしまう。

彼女、いや彼の顔は吊り上がった金色の瞳でかなり人相に獰猛さが現れている。また、その頭の上には鬼族の特徴である先の尖った角がある。

また、赤いジャケットにエナメル質のパンツを穿いており、十人中十人がチンピラと評するだろう恰好をしている。

それにしてもベルトの代わりに鎖が腰に巻いてあるのはギャグなのだろうか。

「なにジロジロ見てやがる。……殺すぞ」

さっきまでは単なる威嚇だった殺す発言に明確な殺意がのった。

「どうどう、落ち着こう」

「死ね」

ぜっ！

繰り出される拳を間一髪かわした。

確実にシックスセンスのおかげだ。

彼が攻撃にでる一瞬前に感じ取れたおかげでなんとか俺の力量でも

回避することができた。
でなければそこらに転がっている男達と同じように顔が潰れていたに違いない。

「へえ……少しはやれるじゃねえか。久々に狩り甲斐があるぜ」
「まぐれなんですけど……」
「オラッ！」

【加速】

脳が危機を感じ取った瞬間に体を加速状態にして攻撃をかわす。
ワンツートのコンビネーションで放たれた拳打は通常時の俺では確実に潰されていただろう。

彼の拳は10倍に加速した俺であってもかわすのに苦労するほどのものだ。

「ひやはっ、いいじゃねえか……だが、前に出ない奴には勝利の女神も微笑まねえ。打ってこいよ」

某燃えよの方みたいに指でカモンのサインを出される。
前に出ない奴には……か。
だけど何の因縁もないのに人は殴れない。

「な、なんでこんなところに子供がつ！」
「あん？」

使い古されて、今日日誰もひっかからない手ではあるがオスカーも取れるんじゃないかという迫真の演技によってお姉さんみたいな男は背後を振り返る。

【加速】

その一瞬の隙をついてその場を離脱する。
これで、ちよつとやそつとじゃ追いつけないだろう。

「まあーちいーやあーがあーれえー」

妙にゆっくりとまぬけに聞こえる声を背に浴びながらMPが切れる
まで俺は走りつづけた。

おかげで帰ったら物置部屋で速攻で眠りにつくことができた。

試練後迷宮から出て（後書き）

どうしても主人公の発言をダメ人間風にしてしまう……
まあ、実際ダメ人間ですが

いざ、十一階層へ

試練をクリアーしてから二日経った俺達はまた迷宮探索を再開することにした。しかし迷宮に入る前にギルド内にあるクロースの爺（換金してくれる人）のところに向かった。

「アイテムの鑑定をしてくれ」

爺の前に鍵を置く。

アイテム名は白鷺しろなぎの鍵。

これに関しては袋に入れた結果知ることができた。

だけどこの鍵が何を開けるためのものなのかはわからない。

クロースの爺はしげしげとその鍵を見る。

途中、眼鏡をかけたり違う眼鏡に変えたりとせわしなくやっていたのだが、少し経つと眼鏡を外して顔を上げ、俺を見る。

「こいつをどこで手に入れたんじゃ？」

「第一の試練が終わった後に入った部屋の中にあつた宝箱みてーなものに入ってたんだけど……もしかして持ってきたちゃダメだった？」

クロースの爺があんまりに真剣な顔をするものだからなんかすげー悪いことをしてしまった気になってしまった。

「ほう……なるほどのう。安心せい、試練を突破して手に入れたのならご褒美みたいなもんじゃ。試練は突破するとギフトと呼ばれる特別な道具が贈られるんじゃ。何が贈られるのかはわからん。じゃが、そやつに合った道具を手にすることが多い」

ギフトと言えばハムしか思い浮かばない。

なんか無性に食いたくなってきた。

「それでこの鍵のことじゃが、なんとゆうか第一の試練でと偉いもんを引き当てたのう」

「いい意味か？」

「肯定じゃ。これは鍵と言えるものをほぼ全て開けることができる伝説の鍵じゃ。鍵穴さえあれば開け放題じゃ」

「はあ……」

そりやすげえや。

泥棒は涎垂らして欲しがるんじゃないのか？

「すごいですよ、ご主人様っ！ これなら迷宮内にある宝箱も開け放題ですね」

キラキラした顔で美玲^{メイリン}が俺を見つめる。

「宝箱あんの？」

「はい、十階層から上には構造が変わるたびに宝箱が出現します。ほとんどの宝箱には鍵がついてますし、鍵開けを失敗すると消えちゃいますから鍵を開けれる道具というのは素晴らしいものなんですよ」

「へえ……」

んじゃこの道具はすげえラッキーだったってことだな。

なんたる強運なんだ。前の世界ではくじ運とかからきしだったんだけどな。唯一の当たりといえはスクラッチで500円当てたくらいか。

「それでなんじゃが……どうじゃ？ この鍵、2億Rで売らんか？」

「に、2億っ!？」

爺の発言に驚愕以外の感情が出ない。

この世界の物価は今ひとつ掴めていないが、前の世界で2億って言えば高卒のサラリーマンの生涯賃金とだいたい同じくらいだったはず。

それがこの鍵一つを売っただけでポンツと手に入るといつのか。

「……ゴクリ」

思わず生唾を飲んでしまう。

2億あれば、働かないで暮らせるんじゃないだろうか。
マダム達への恩返しも豪勢なものを送れる。

「せっかくのお話ですが、そのお話は断らせていただきます。さあ、行くぞ」

襟首をガツシリと掴まれて引きずられる。
相手はセレナだ。

「ちよっ、なんで勝手に……」

「うん？ 売りたいのか？」

心底不思議だという顔でセレナが尋ねてくる。

「かなり売りたい方向に傾いてる」

「そうか……だったら売ればいい」

「え……いいの？」

てっきり反対だからさっさと断ったのかと思ったんだけど……

「いいもなにもそれはお前が手に入れたものだろう。お前が売りたいというのなら私にそれを止める権利はない。ただ……私個人としては売らないでもらいたいところだ。なにせ迷宮の攻略での大きな助けになる」

「その言い方はちよいとばかり卑怯だよ……」

なんか個人的にとか言いながら売らない方向に思考を誘導する狡猾な手段のように思えてきた。現に俺の心の天秤を五分どころか売らない方向優勢に傾けてしまった。

こういう時はもう一人の意見も聞いておくべきか。

「美玲はどう思う？」

「リンはご主人様の御心のままになさるのがいいと思います」

「むう……」

若干予測通りではあったが、やはりこう来たか。ここでその発言はなしにして君はどう思うのかとさらに聞くのは無粋だろう。少なくとも二人とも俺の好きにしたらいいと意見を述べているわけではあるしな。

「……爺さん、とりあえず保留していい？」

「よいぞ。壊れさえしなければ鍵は何度でも使えるしの。ただし、壊れてしまったら使い物にならんからこの話はなしじゃぞ？」

「ああ、んじゃ迷宮行こうか」

「……優柔不断」

セレナが背後でぼそつと呟く。はっきり言ってめちゃくちや核心を突く言葉だ。

俺の性格として明日できることは明日に回すというものがある。俺

の予定が前倒しになることはほばないといって良い。そのせいか追い込まれないと力を発揮できない体質となってしまった。簡単に言ってしまうえば夏休みの宿題を夏休み最終日にやる典型的な例が俺という存在だ。

2億というのは魅力的だが、今売らないまでも同等の金が手に入るといふのなら限界ぎりぎりまで使って売るのが正しい選択のように思えた。まあ、多少あくどいかもしれないことは否めない。

迷宮第十一階層。そこは十階層までのどこか洞窟の中を思わせる造りとは違い、廃れた遺跡の内部という感じた。迷宮の通路は幅四メートル弱、高さ三メートル程と十階層までとそう変わらない。

だが明りに関してはだいたい三メートルごとに燭台があり、そこで燃える炎により照らされているため薄暗く感じる。

「エジプトとかにありそうな雰囲気だな」

「どこだそれは？」

「遠いところ」

前の世界の住んでいた所の基準から考えてもそうだし、今ここに至っては絶対に行けないところだ。

「ご主人様の故郷ですか？」

「違うっっちゃ違うけど、そうだといえばそうかな？」

「……よくわからん」

俺もどう説明していいのかわからん。今更「俺は違う世界から来たんだ」とか言ったらどうという反応をみんなは見せるのだろう。

……なぜだろう。頭の中身の心配をされる未来しか見えない。

「それはそうと美玲と一緒に戦うのはこれが初めてだよな」

「たしかに……できればメーリンの戦闘スタイルを教えてくださいませんか？　ちなみに私の戦闘のスタイルは……」

「あつ、お二人の戦闘スタイルは存じています。ご主人様を見つけてからずっと後についてまわってましたから」

「迷宮の中までストーキングしてたのか……ご苦勞なことだ」

まあ、セレナさんだったら呆れたような顔しながら皮肉を言うなんて、怖ろしいザマス。

「苦勞なんかしてません。どちらかといえば至福のひと時でした。それでですね、リンの戦闘スタイルはナイフを使ったフリーランスな戦いを得意としています。ナイフはいいですよ……斬つてよし、投げてよし、突き刺してぶつ殺すのもよしですから」

そういつて美玲は右手を腰に回し、どこから引き抜いたのかいつか見たナイフをその手に持つてうつとりとしている。とゆーかにこやかな顔でぶつ殺す発言はやめてほしい。

「フリーランスってどういう意味だっけ？　たしかフリーアナウンサーがフリーランスのアナウンサーの意味だったから、そんな感じのニュアンスでいいだろう。結果的によくわからんがどうせ俺のやることに変わりはないしな。」

「そして、なんと！　魔法もいくつか使えるんです」

「「知ってる」よ」

「つか手首切ったときにソレで治してたじゃん。」

「リンのボケがご主人様に華麗にスルーされました……」

今のがボケだと？

天然ではなくて計算して言ったというのか。

お、恐ろしい……だとすれば頭がイカれてやがる。

「美玲、お前のボケのセンスは皆無だ」

「お前が言っな」

俺が言っな？ それって目糞、鼻糞を（笑）状態のときか幸せなやつが不幸なやつに『気持ちわかるぜ、相棒……』ってアホ発言したときによく用いられる言葉ではあるが、この場合セレナはどちらの意味で言っただんだ？

「ねえ、どっち？」

「なにがだ？」

「いや、俺が言っなっていう発言の意味としてボケの才能がないやつが同じく才能がな

「そっち」

「いやっ……」

あれ……なんだか胸が痛い。別にボケの才能がないと言われたことに関してはそのショックでもない。才能があるって自分で自負してるなら笑いの道に進んでいたはずだからな。それにセレナには面白くない的なこと言われ慣れてるし。

では、なにがショックかといえばセレナが食い気味どころか発言途中に割って入ってくるくらい俺のボケを否定したこと。

なんかもう完全否定ですよね？

人の話は最後まで聞けと子供の頃に教育されなかったのだろうか。いや、されなかったに違いない。

「まったく、馬鹿話をしている暇はないぞ。敵だ」

セレナの言葉に前方に目を向ければモンスターが4体ほどいるのが目に入った。

やはりというか、今まで出会ったことのない種類のモンスターだ。

「スタッグビートルとスライムですね。ご主人様、スタッグビートルは堅い表皮に覆われていますし、スライムに関しては魔法攻撃以外は聞きにくいです。総じてどちらもご主人様との戦闘の相性はよくないです」

「それは遠回しな戦力外通告ですか……」

「そういうわけではありませんが……」

ありませんがつてなんだよ。

お兄さんはその先に続くであろう言葉が気になって仕様がありませんよ？ あ、やっぱいい……聞いたらへこみそうだ。

それにしても似てる。キラー・ビーもそうだったけど、このスタッグビートルとやら、足が異様に長いことと体長が目測およそ1メートルほどあることを抜かせばまるつきりクワガタじゃないか。しかし、クワガタといえは5センチほどの体長でさえ、数々の芸人の鼻を挟み込みうめき声をあげさせた実力の持ち主だ。それがあのかさじゃ、挟まれたら真つ二つとかもあり得るんじゃない……

そして、スライムというモンスターはなんかバケツでグレープゼリーを作ってひっくり返して取り出したような姿だ。古来より数々のRPGで雑魚キャラとして序盤に出てくるモンスターだが、生意気にも魔法攻撃以外が効きにくいだと……そりゃマ○ンテとか使ったりするけど、雑魚には変わりない奴だったじゃんか。

しかしだ、美玲よ……いくら何でも俺をなめすぎだ。

俺は試練を乗り越え成長したんだ。ついこの前の俺と一緒にしない

でくれ。

クワガタなんて所詮は昆虫。節足動物は継ぎ目が弱いと相場が決まっているのだ。そこを寸断すればいくら堅い表皮を持つ甲虫であろうと恐れるに値しない。そしてスライムなどこのライトニングの魔法があるのだから問題なしだ。

そう、俺は試練突入の前に美玲に渡されたライトニングの指輪をいまだに装備している。返そうと思ったのだが、あげますと言われればもうしかあるまい。

そして何より、試練突破で手に入れたもう一つのアイテムの初お目見えだ。

剣を鞘から抜き放つ。黒き刃がその身をあらわにする。アイテム袋に入れても『剣』としか表示されない謎なものだが、不思議と手によく馴染む。

「ソーマ……それは？」

「クロースの爺に言わせればギフトって奴だよ」

「鍵がお前のギフトではなかったのか？」

「もう一個入ってた」

「……ギフトが二つ？」

「さあ、いくぞっ！ ブロックサダー！」

昔から愛用の物には名前を付けてしまうという癖を持つ俺は早速この剣に名前を付けた。ちなみに初名づけはママチャリのはやて1号だ。前のロングソードは元の持ち主がいるわけだし、みだりに名前を付けられなかったが、この黒い刀身の剣は紛れもなく俺の物。ちなみに名前の由来は試練で使用したライトニングの魔法から雷であるサンダーを連想し、黒い刃ということでブラックと頭に付けた。なかなかカッコいい響きだ。

狙いはスタッグビートルだ。覚悟しろ。

「その名前はダメだと思うぞ……」

背後で弓を構えながらそんなことを呟くセレナの声が聞こえてきた気がした。

十一階層での戦闘

現れた敵はクワガタっぽいモンスターであるスタッグビートル3体とバケツ作成のグレープゼリーなスライム1体。

「おりゃあっ！」

敵の集団に近づいた勢いそのままに斬りつける俺のお得意の攻撃（つーか相変わらずそれしか戦術パターンがない）をスタッグビートルのうちの最も近い1体にかます。
狙いは無論細長いやつ足の継ぎ目。

「殺^とった！」

足を斬っただけで倒せるはずはないとは思いながらも、口をついて言葉が出た。

「……………おうっ」

しかしながら、俺の予想とは真逆にスタッグビートルの足が切断されることはなかった。

放った斬撃は狙いとは少しずれ、人で言う弁慶の泣き所、つまりは脛にあたる部分に命中した。

腕に残る激しい痺れ。まるで巨大な岩を野球のバットでフルスイングした時のような衝撃だ。

「かってえー、あ……………」

気を抜いていた。

例え強固な鎧だろうとこの○ラック○ンダーなら切り裂けるとどこかで過信していた部分もあったのだろう。

俺に対してスタッグビートルがその大きな顎を開いて挟み込むのをただ眺めているしかできなかった。

「ご主人様っ」

真つ二つの未来が迫ろうかという直前に誰かに襟首を掴まれて後ろに投げられてしまう。

「おふっ」

背中をしたたかに打ち付けて空気が肺から漏れる。

ついで右腕に鋭い痛みが走った。

見てみれば二の腕が裂け、血が溢れてきている。

「大丈夫ですか？」

声のした方に目を向ければ、心配そうにこちらを見ている美玲と目が合う。
メイリン

どうやら投げ飛ばして助けてくれたのは美玲らしい。

「……ああ、助かった。ありがとう」

「よかったで……ご主人様っ！ 腕から血がっ！」

俺の無事を知り、安堵の息を漏らそうとした美玲は俺の怪我を見つめるや血相を変えて詰め寄り、そばにしゃがみ込む。
背後から迫るモンスターの群れはまるで無視だ。

「美玲美玲、後ろからモンスターが……」

「よくもご主人様を……殺してやります。喜びなさい虫けら共、メイド服を着ているリンが冥土に送ってあげます」

ゆらりと幽鬼の如く立ち上がり構えた美玲は迫りくるモンスターをその視界に納めながら両手を腰に回してナイフを取り出す。

美玲さん二刀流なんですか。それにダジャレをぶち込むとは……つか冥土って仏教用語だったはずなのだが、神様に続き仏様もいたりすんのかこの世界。

ナイフを逆手に持ち、先程俺が斬りかかったスタッグビートルに向かっていく美玲。

てゆーかそれじゃ俺の二の舞にならんのかね。

そんな俺の心配は杞憂に終わる。

スタッグビートルに肉薄した美玲は俺とは違いた確に足の継ぎ目を寸断していく。

しかし、敵もさるもので足を寸断されながらも美玲の体を挟み込むように顎を広げ、それを閉じれば美玲の体を逆に寸断してしまう位置についた。

「美玲っ！ 危ないっ！」

注意を促すため声を張り上げる。しかし美玲はそれを全く意に返さず、スタッグビートルの頭の部分に左手に持ったナイフの刃先を置き、右手に持ったナイフを順手に持ち替えて大きく振り上げた。そしてそのままスタッグビートルの頭の上に置いたナイフの柄に向け振り下ろした。

ナイフの柄同士がぶつかった衝撃音が聞こえるとともに美玲が相手取っていたスタッグビートルの体が光となって消えていく。おそらくではあるが美玲の奴は金槌の要領でスタッグビートルの頭をかち

割ったに違いない。

「これはもうダメですね……」

そう言っただけで美玲は左手に持っていたナイフを投げ捨てる。それは先ほどの攻撃の影響が刃がぼろぼろになっている。

「次っ」

右手のナイフをしまおうと美玲はおもむろにスカートの中に両手を突っ込む。こんな時になんだが卑猥だ……いったい何をするつもりだ？ そう思ったのも束の間のことですカーッと手を出した美玲の手には刃渡り10センチほどのナイフが数本握られていた。刃の形状からしてあのナイフは斬るものではなく、突き刺すものだろう。

美玲はそれをスタッグビートル2体に向けて投げた。

足の継ぎ目継ぎ目に刺さったそれはそれだけでスタッグビートルの行動力を奪ってしまう。

しかし、スタッグビートルのみに気を取られている美玲はもう1体のモンスターの動きを追うことを疎かにしていた。そう、敵はスタッグビートルだけではない。いつの間にかスライムが美玲の足元まで迫ってきていた。スライムはその体を大きく広げ美玲の体を包み込もうとしていた。声をかけようと思ったが美玲の姿を目で追うことに夢中になっていたため俺もまたスライムの動きを失念していた。

「ウインドスラスト」

その時、背後から凜とした声が響く。そしてその声とともに不可視の刃がスライムの体を襲う。そして程なくしてその体は光となって消える。

「まったく、お前たちは猪か何かなのか？」

呆れたように俺たちを皮肉るセレナ。

「あなたに見せ場を作っただけですよ？ それとただ後方でリンとご主人様が戦う姿を眺めているおつもりでしたか？」

そしてそれに真っ向から皮肉で応える美玲。

やめてよ……なんか怖いんですけど。つーか俺戦ったと言えないし……試練を突破したことで無駄な自信をつけていたみたいだ。やはり俺は役立たずの足引っ張る要因でしかないのだろうか。

それは嫌だ。

そうなればいつかこの二人に見捨てられてしまう。以前の世界のすべてを捨てられて得たものを失いたくない。

でも、俺はまた守られている。以前はセレナだけだったが今度は美玲という新しく仲間となった少女に。

男として、そして大人としてなんてかつこ悪いんだろう。

「このまま、女の子にまかせっきりにして初戦敗北のままってのも駄目だよな、相棒」

本日初めて実戦に投入した黒い刀身の剣に語りかける。

ジュル……ジュル……

ん？ なんかおかしいぞ？ 愛剣ブ○ツクサン○ーが奇怪な音を放っている。

しかしこの音、どつかで聞いた覚えもある気がする。どこだっけ……あ、そうだ。ファミレスとかでコップに注いだ飲み物を最後の一滴までストローで啜ってる時の音とおんなじだあ……

んで、こいつは何を嚙ってるんだろうか？

剣を注視してみれば先ほど負った腕の怪我から滴った血が剣に落ちると手品のように消え失せてる光景に出遭う。

「こいつ俺の血飲んでるーっ」

怖っ、なにしてんのこの子？ 魔剣？ ちょっとというかもしかしたら程度に思ってたけどこの子魔剣なの？ あわわ、えろいじゃなかった、えらいこっちゃ。

期せずして魔剣をこの手に取ってしまうとは……なんだよブ○ツク○ンダーって…… かつこいい名前付けてんじゃねーよ。お前なんかブラックじゃなくてブラッディじゃねーかよ。ん？ いいなそれ。

「よし、お前の名前はブラッ○サ○ダー改めブラッディサンダーだ」

「お前はこんな時に何を言ってるんだ……」

「あっ、セレナ。いや、こいつがね？」

セレナに諸事情を説明しようとしたとき、ブラッディサンダーの鰐にある赤い宝石が光を明滅しだす。なぜかそこにこの剣の意思が宿っているように感じられた。

「いけるのか？」

剣に向けて問いかける。客観的に見ればちょっとばかりイタイ人に見えるかもしれない。だが、俺の問いかけに答えるように赤い宝石が強力な光を放つ。

「いい返事だ。改めて覚悟しろ、スタッグビートル。お前をタナトスと呼んでいる」

そして俺は美玲によって行動力を奪われたスタッグビートルに向かって駆ける。

「あの馬鹿、また考えなしに突っ込むつもりかっ」

背後から呆れと焦りの混ざったセレナの声が聞こえる。確かに先ほど駄目だったことを再度実行する俺の姿は究極のアホに見えるだろう。だけど相棒はそれでいいと言っている。

「ご主人様！？」

俺の突貫に驚いた反応をする美玲を追い越してブラッディサンダーを右肩に乗せ両手でその柄を握った。

「くらえっ！ ブラッディサンダースラッシュ！」

「かつこ悪っ！」

「ださいけどかつこいいですご主人様」

すこぶる不快な声を背後から浴びながらも黒い剣を袈裟斬りに振り下ろす。

継ぎ目を狙うとかそうゆう配慮は一切ない。スタッグビートルの堅い表皮との真っ向勝負。一度、失敗したということはずでに頭になり。相棒ができるって言うてる（気がする）からできる、ただそれだけだ。

そしてその考えの通り黒き刃はまるで豆腐を切るかのごとく軽々とスタッグビートルの表皮を斬り裂き、スタッグビートルを二つのパーツに分け光へと変える。

「お、おお……」

自分でやっついてなんだがこうも容易くあれを斬り裂けるのか。
凄、凄過ぎるぜブラッディサンダー。お前は最高の相棒だ。
この調子でもう1体やってやる。

すぐ近くにいる別のスタッグビートルに向け、横凧に剣を振るう。

「へうつ！」

しかし、敵を斬り裂くと思えた俺の攻撃は覚えのある衝撃とともに
スタッグビートルの表皮に止められてしまう。

「な、なんで……」

手が痺れ相棒が手から離れる。もしかしてあの切れ味は一回限りの
大技かなんかですか？

だめだ、動けない。スタッグビートルが俺を挟むためにその顎を広
げる行為がやけに速く感じる。

「へ、ヘルプミー！」

俺の情けない叫び声とともに一本の矢がスタッグビートルの決して
大きくはない目に突き刺さる。

「調子に乗るからだ」

「あら？　そこがご主人様の魅力の一つでもありますのに」

そして先ほど追い越した美玲が右手に長さ30センチほどのナイフ
というか短刀を逆手に持ち近づいてきていた。

「紅蓮斬り」

短刀を振るう直前に美玲が呟くと短刀から炎が噴き出す。そしてそのまま短刀を振り上げるようにしてスタッグビートルの片方の顎を切り落としてしまう。そしてそのまま振り上げた短刀をスタッグビートルの頭に突き刺すように振り下ろした。その一撃で勝敗は決した。

「問題はございませんかご主人様？」

美玲が手を差し出す。そこでやっと今の自分の状態に気が付く。どうやら俺は屍餅についていたようだ。

「大丈夫、大丈夫だから」

その手を断つて自分で立ち上がる。

よかった、腰が抜けていたわけではないみたいだ。

それにしても結局彼女たちの助けを受けてしまった。何事も初めが肝心とか終わりよければ全てよしというが途中だけよい場合は評価されないのだろうか。

「ソーマ！」

セレナの声に無意識に下を向いていた顔を上げる。そこで目に入ったのは俺に向かって投げ渡される白い石とよくわからない物体。

「おっと」

受け取ろうともがくが白い石しか取れなかった。落としたよくわからない物体を拾い上げてまじまじと見るとどうしても黒い棘としか形容できないものだった。大きさは手のひらで隠せないくらい大きくはあるが。

「これは？」

「お前が倒したモンスターのドロップアイテムだ。お前の道具袋に入れておけ」

そうか、敵を倒したんならそりゃアイテムをドロップするよな。てことはこっちの白い石はお決まりの白の魔石か……でも、なんかでかくね？

道具袋に入れて名前をしてみる。すると棘のような物体は大きな棘と表示され白い石は白の魔石（大）と表示された。

「い、石が進化した」

「大きくなっただけで、進化では断じてない」

「冷静なお答えサンキューです……それはそうと、美玲の最後の一撃のあれはなに？ 刃がぶわあーと燃え上がったやつ」

「あれですか？ あれは武器自体が魔法具なので魔法の一種になりますね」

へえーそんなもあるんだ。

指輪とか身に着けるものだけじゃないんだな。

「ご主人様の剣もそうですよね？」

「へ？」

「だって最初の攻撃は弾かれたと思ったら、いきなり物凄い切れ味でスタッグビートルを両断してたましたし、あのブラッディサンダースラッシュというのが魔法名ですか？」

「違いますけど？」

凄く冷静に返せた気がした。今思うとブラッディサンダースラッシュっていう恥ずかしい言葉はなんなんだ。安直にもほどがあるだろ。

「それじゃどうしていきなり切れ味が向上したんですか？」

さて、美玲の問いにどう答えたものか……

ぶっちゃけ俺もどうしてなのかよくわかっていない。わかっていることは俺の血を嚼つたら切れ味が向上したということだけだ。ここは事実を言うしかないか。

「気合いだ」

面倒になってだいぶ端折った説明をしてしまった。

十一階層での戦闘（後書き）

ネーミングセンスがないっていうのは割と致命的だと今更ながらに感じました。

ねえねえ、子供ってどうやったら生まれるの？（前書き）

サブタイトルはあんまり本文と関係ありません。

ねえねえ、子供ってどうやったら生まれるの？

十一階層でいくつか戦闘をこなし、割と早い段階で下の十二階層へと続く階段を見つけたのだが、本日は試練突破後の肩慣らしみたいなもので、長く潜る準備をしていないためやむなく見送り、十一階層を隅々まで探索することにした。

「なあ、^{メイリン}美玲の親も獣人なんだよな？」

ふとした時に常々気になっていたことを聞いてみた。

「いえ、リンの父はエルフ族なんです。獣人族はどちらかと言えば魔法が得意なのですが、リンの魔法的な才能は父親から受け継がれたんでしょうね」

「父親がエルフ？　じゃあなんで美玲は獣人族として生まれたんだよ」

普通、エルフの子供はエルフとして生まれるはずだ。疑問を口にしながらも、自分自身で正解であろう答えは持っている。しかしそれが確実に正しいとは言えない。やはりこの世界のことはこの世界の住人に聞くのが一番だ。

「そんなものメイリンの母親が獣人だからに決まってるだろ」

言外に何言ってるんのお前？　とついてきそうな調子でセレナが答える。

「母親が獣人だと子供は獣人ってことか？」

「子供が女の子の場合は、です。リンの家族の場合は、両親の間に生まれたのが男の子の時はエルフが生まれてましたね」

「つまり、両親の内で同じ性別の親の種族が生まれるわけか」

「その通りです」

「とゆーかなんでこんなことも知らないんだ？」

「あはは、俺が住んでたところは人間族しかいなかったもんで……」
「なるほどな……」

「どこのご出身なのか気になります」

なるほど、俺の立てた仮説の母親と同じ種族が生まれるってのは間違っていた。やはり聞いて良かった。

「はつきり言うが人間族は我らとは別だ」

「へ？」

鋭いセレナの言葉に思わずまぬけな声が漏れてしまう。

「両親の内、どちらかが人間族だと、例えば性別が同じでも他種族の子供が生まれる確率が低くなるんです」

「それどころか、ハーフなんていう血の薄まった成りそこないまで生まれてくることも稀にだがある」

「えっと……なんか俺、すごい責められてる？」

なんかチクチクくるんですけど……

「いえ、そういうわけではありませんよ。ただ、自らの種族に無駄に誇りを持つ方は人間族を嫌悪してますからお気を付けください」

「おい、今の発言は取り消せ」

何が気に障ったのか、セレナが美玲に食ってかかる。

「何をですか？」

「自らの種族に誇りを持つことのどこが無駄なんだ！ 今すぐ取り消せ」

そうだった。セレナが迷宮に潜る理由はダークエルフと言う自分の種族の優位性を示すため。つまり自分の種族大好きさんだった。しかも、今ではそんな風に思えないが出会った頃は人間族ってことでセレナには邪険に扱われてたな。

「そういえばセレナさんも人間族を認めない派でしたね。ん？ でもなんで人間族であるご主人様とパーティーを……もしかして惚れてるんですか？」

「何を馬鹿なことを……ソーマとパーティーを組んでいるのは、あいつが泣いて縋るから仕方なくだ」

そんなことしたっけ？

いや、忘れてるだけでもしかしたらしたのかも……

「何言ってるんですか？ リンが調べたところによりますと、地図が存在する二階層でご主人様に保護されて、ご主人様の道案内のもと五階層に着いたものの、この先の迷宮探索が不安になって、丁度よく弱味を知られたご主人様を利用しているだけじゃないですか」

「なっ……」

図星なのかセレナが言葉につまる。

そして何気に今の発言に俺も傷ついてます。つーか経緯知ってんじやん。惚れたとか聞いたのはからかっただけですか？

「なんでそれを貴様が知ってるんだ」

同感です。

「ま、まさかソーマ、貴様話たのか!？」

「ノン。ノンですノン」

あらぬ疑いをかけられてしまい、必死に首を横に振る。

「調べたんです」

それで片付けようとするあんたはすげえよ。

「とりあえず、人の目を背けたい過去を詮索するのはダメだね。セレナは俺の大切な仲間、その事実だけで今は十分でしょ？」

「……ご主人様がそう言うのなら」

まあ、客観的事実を告げられたのは心情的に痛いけど、どこかで道案内みたいに利用されてるのも思ってたしな。

「……ソーマ。私は確かに人間族を好いてはいないし、最初はメリンの言ったような理由でお前とも組んだ。だが、今ではお前やリかなど一部の奴らのことは好意的に見ている。それだけは頭の中に入れておいてくれ」

「うん、イエス、はい」

少し前の自分を殴り倒したい。
セレナを疑ってんじゃねーよ。

「それにしてもさあ、話を戻しちゃうけど異種族同士の結婚って大変そうだな」

特に相手が人間族の場合。娘は人間族ごときにやらんとか言ってるやぶ台ひっくり返されそうだ。

「血痕？」

「ケツコン……ですか。なんですかそれ？」

なに？ なんなのその反応……

「いや、あれだよ。籍を入れること」

「席を入れる……」

「なんでいきなり椅子の話になるんだ？」

だからどうしたってんだよ。

「だから、ウエディングドレスやら白無垢着て行っハッピーマリッジ的な儀式のことだよ」

「よくわからんが、怪しい儀式なのか？」

「ご主人様っ！ 儀式には犠牲が付き物です。危ないことは御身のためにもやめてください」

あ、だめだ。マジで言ってるよこの子ら……

「んーと……ほら、恋人がさ。なんか節目的な時に同一の苗字を名乗ったりするじゃん？」

「しない」

「しませんねえ」

さて、どうしたもんか……

「んじゃあさ、美玲達の苗字ってどつたの？」

「リンは母様からいただきました」

「私もだ」

「ああ、そうなんだ……父親のは？」

「女の身である私が父の苗字を貰うわけにはいくまい」

「ですね」

つまりはあれか。

同一の性別の親から種族としての特徴を引き継ぎ、苗字ももらうのか。

んで、結婚という概念はない、と。

「ご主人様、ケツコンって結局なんなんですか？」

「……なんか神様の前で永遠の愛を誓う行為だよ」

まあ、この世界に結婚がないとは意外だったな。

「つまりは、誓約の書のことか」

「ああ、そうですね」

「……なにそれ？」

「そこに書いた誓いは決して破ることは許されないという紙ですね。誓いを破ればあらゆる天罰がくだされるという一品です。少しお高いですが、それを色恋のために使う方も少なからずおられますしね。そのことを言っていたのでは？」

頷いていいものやら、どうかわからん。

ただなんとなく、指切りげんまん之歌を実際に行うためのものという感じに思える。

「具体例を織り交ぜて詳しくプリーズ」

「具体例ですか……それなら色恋に使われた例を挙げますね。永遠にお互いだけを愛そうと決めたカップルがいて、確か女の方が書いたものは男性が他の女に手を出したのなら去勢というもので、男性側が書いたものは浮気したら浮気相手のブツがへし折れ、女性があらゆる性病に犯されると書きました」

女の言い分は当然のように思えるが、男の方なんなの？ 相手の女だけじゃなくて、その浮気相手まで抹殺しにかかっているよ。

「結果として、女性側が妊娠してしまったことで性欲を持て余した男が無茶をして、二度と子作りできない体になり、女性は子供を生んだあと、新しい相手を見つけて幸せになりました、とさ」

男は何やってんだよ。

一時の無茶で一生を失っちゃったよ。
っーか！

「女も新しい相手見つけてんじゃない！」

「はい、誓約の書は誰かが逸脱した時点でその人に対する罰を発するだけのものに成り代わりますから。それ以外の人はもう誓約の書に縛られることはありません」

なんて恐ろしいんだ……

もしかして、男が浮気するように女が仕組んだとかそんな心理戦、頭脳戦の入り乱れるドラマを頭で組み立ててる俺がいるじゃねえか。ヤバイ……ゴールデンタイムに流せないほどドロドロした展開になってきた。

こりゃ昼ドラの枠をもらうしかねえ！

「まあ、大事な商談に使われたりとか重要な約束事に使われるケー

スの方が多いがな」

「そうですね。それにさっきリンが話したのはある意味極論みたいなものですからね」

「おいおい、極論って言うのはどちらか一方が浮気したら二人揃って死ぬと書いた伝説のカップルだろ？」

「あれは、二人共が天寿を全うしたから面白くないと思ひまして……」

どっちかと言うとハッピーエンドの方が良かったよ……

「つかこうゆうのが前の世界にもあったら、離婚とか破局とか減るんかな？」

「いやいや、恐くて使えないって……多分俺も書いてと迫られたら逃げる。」

「あ、待てよ……ヤンデレの属性を持つお方達には大人気商品になりそうだな。そんな人が何人いるのかどうかは知らんけど。」

「お値段は？」

「一枚なんと一億Rです」

「……そんな高いの誰が買うのさ」

想像以上に高かった。

せいぜいしても500万くらいだと思ってたのに桁違いだったよ。

「確かに高いですけど、でも……」

「それだけの価値があるということだ」

「へえー」

「値段聞いたら途端に投げやりになっちゃいましたね」

「貧乏だからな」

そんなことを言われながらも探索は続け、切りのいいところで引き上げることにした。

「さて、帰るのはいいが道がわからん」
「……」

セレナの言葉にいつも道わかってないじゃんと思いつきリツコミそうな右腕と意志を必死に押し止める。

彼女の方向音痴をネタにからかうのは限度がある。道中すでに幾度かからかったので、次やれば噴火する恐れがある。自重自重。

「セレナさんが道をわかってたことなんてあるんですか？」

はい、必死に堪えてたことが美玲によって無駄になりました。

「……時にはな」

「なんの見栄を張ってるんですか、方向音痴さん」

「……殺す」

セレナさんや、何故そこで俺を睨むんすか？

「まあ、方向音痴なセレナさんはこの際無視して、帰り道のことなら大丈夫です。ちゃんとマッピングしてますから」

そう言つて美玲は胸元から石版らしきものを取り出す。

「それは？」

「マークした地点から歩いた距離や方角を正確にマッピングしてくれる優れものの魔法具です」

「あれ、でも……十一階層からは地図が作れないからマッピングは無駄だって聞いたことがあるんだけど？」

「地図のためのマッピングではなく、引き返す時のためのマッピングです。気まぐれに構造を変える迷宮ですが、探索中に構造を変えられることなんて滅多にありませんからね」

なるほど、帰るためのマッピングとは恐れ入る。

とは言ってもシックスセンスの影響か、なんとなくで階段の方角がわかる俺としては地図は確認の意味でも、地図のない道をわざわざマッピングしながら歩くことの重要性がよくわかん。

でも、まあおとなしく美玲の地図に従って迷宮から出るとするか。

その後、戻り始めて4時間ほどで迷宮から出ることができた。

三度目の邂逅

迷宮から帰還してアイテムの換金を済ませた後、特に用事もないので町をぶらつくことにした。

嬉しいことに十一階層から得たアイテムの売却価格は今まで売ったアイテムよりかなり高額になっていた。白の魔石は小のときはひとつ10Rと溜め息が出るほどに安価だったが、大になるとひとつ200Rと実に二十倍もの価格になった。

モンスター達が固有に落とすアイテムもスタッグビートルの甲虫の羽根はひとつ500R、そしてなぜかスライムがドロップした銀鉱石が400Rで売れた。

結果的に一日だけしか迷宮に潜っていないにも関わらず一人頭、5千Rをほどの金を得ることが出来たのだ。とは言ってもまだまだ決して多いと言える収入ではない。

しかし、今までで一番稼げたのは言うまでもない。

なんだか無駄にリッチな気分だ。

こういう時は衝動買いをしがちになるので自重せねば……

「お兄さんちよつと寄ってかない？」

「ん？」

日も暮れた夜の街を歩いていると不意に背後から声をかけられたので振り返る。

そこに居たのは明らかな人の良さそうな笑いを浮かべた40代くらいの男。どっかの店の客引きなのだろう。男はスーツのようなものを着ていて身なりは良い。

しかしどうやら声をかけたのは俺ではなく、屈強な鎧に身を包んだ歴戦の猛者みたいな男だったみたいだ。

スーツの男は俺に一瞥もくれることなく必死に男の気を引いている。

「……まあ、この格好じゃな……」

ジャージ姿の自分の姿を鑑みる。

どう見ても金を持ってなさそうだ。べ、別に勧誘されたかったわけじゃないぞ？

「かわいい娘いるよ？」

「女など戦いに身を置く自分には不要だ」

猛者め……なかなかストイックな思考だな。

「飲み放題で5千Rポッキリなんですけどね……」

「ほう、うむ、それは安いな……では行ってみようか」

猛者早くも陥落。感心したと思ったのにすぐに餌に食いついちゃったよ。

猛者は男に案内されるままに店に入っていつてしまった。

でも、勧誘の男の言葉に嘘はなかった。

5千Rくらいなら今の俺でもぎりぎり払えるな……だが、こういう店には巧妙なぼったくりの罠が潜んでいるものだ。

例えば女の子の指名料とかが別途かかるとかな。

そもそも飲み放題が5千Rってのが怪しい。別に値段に不満があるわけじゃなくて、フリータイムなのか時間制なのか言わないところに悪意を感じる。

「クロキシウマ。あなた、さっきからいやらしい目でふしだらなお店を見てますけど、興味がありますの？」

背後から唐突に声をかけられた。しかもどつかで聞いたことのあるお嬢様みたいな口調。

俺の名前を知っていてこの口調とくれば、おそらく奴だろう。しかしなぜ声をかけてくる必要があるんだ？ しかもたった二回会っただけ（一回は忘れてるみたいだが……）の男にだ。つーか呼び捨てかよ。この前はさんが付いてなかったっけ？

とゆーか気付いたのならそつと見てないフリをして欲しかった。しかし声をかけられた以上、応えねばなるまい。

「数日ぶりですね、オリビアさん。それでも一応、お久しぶり」
「クロキシウマは卑猥な店が好きなんですの？」

挨拶は無視かよ。

挨拶をされたら挨拶を返しましょう。とゆーか自分の方から挨拶するような気概を見せなさい。

「卑猥つてのは言い過ぎですよ。あの店はたぶんお姉さんが隣に座ってお酌してくれる飲み屋ですよ」

端的に言えばキャバクラのことだ。

「それが卑猥でなくて何が卑猥なんですの？」

「うわ……マジで言ってるのか。」

「表向きに性的に乱れてなければ卑猥とは言えないな。卑猥っつーのはやっぱこっ乳繰り合いながら身体の敏感な部分をまさぐってこそでしょ」

「……………うわ」

あれ？ 引かれた…… オリビアさんの潔癖さに引いた俺が、今度は逆に引かれたよ。オリビアさんの俺に向ける視線が露骨に軽蔑したそれになっている。

「というのが、一般的な男性の意見でした。俺はお高いお風呂屋さんに入っても卑猥さを感じないほどクールな男です」

「……………」

まだ軽蔑した目を向けやがるのか。

なぜだ…… お高いお風呂屋さんつてのが抽象的だったのかな。はっきりとソーブランドと言っべきだったか？

「普通、今の状況でワタクシに弁明するなら、その手のお店には一切興味が無いことを言うべきですわ」

「だから言っただじゃん。店に入っても卑猥さを感じないって」

「お店に入ってる時点でアウトですわ」

目から鱗が落ちるとはこのことだ。
物事の本質が別の所に行っていた。

「安心しろ。この都市に来てからその手の店に入ったことはない。
金もねーしな」

「お金があつたら入りますって言ってるように聞こえますわ。とゆー
ーかもしかしてあなた、オースティアに来る前はそういうお店の常連でしたわね」

どこをどう解釈したら俺がソープの常連になるんだよ。

しかし、往来の道でいやらしい店に入っただか入ってないかなんて言い合うもんじゃねーだろ。

傍目にはいかがわしい店に入ろうとした彼氏を現行犯で捕まえて詰

問してるみたいに見えやしないだろうか。ん？ それはそれでいいかもしれん。性格はともかく、オリビアさん美人だし……

「なんだよ……俺を疑ってんのか？ 言っただろ。俺にはお前しかないって……浮気なんかするもんか」

馬鹿だとは思いつつも言ってみることに価値がある。これで間違いなく周りの人間には俺達が恋人関係に見えてしまうことだろう。

ちなみに周りに恋人に思われたからといって何かあるわけではない。言うなれば自己満足に過ぎない。

ほら、感じるだろ。

周りにいる男共の嫉妬の視線を……

無駄に優越感を感じる。

「頭の中身が乏しい方との会話は突然ですわね……あなた方は何を見てるんですの！ 散りなさいっ！」

集まった野次馬をオリビアさんが追い払う。

わかりきったことではあるが、頭の中身が乏しいと言われたのは俺であるに違いない。

「まったく、物好きな連中ですね……クロキシウマ、ここではないんですからどこか落ち着けるとところに入りましょう」

「なんで？」

マジでなんで？

意味がわからない。シナリオ的には俺の馬鹿発言に呆れて去っていく場面だろ……

「いいから来なさい。本当にデリカシーのカケラもないですわね」

「いや、だからなんで？」

とりあえず、肩で空気を切って歩いていくオリビアさんの後ろをついていく。

普段の俺ならば彼女の態度を不審に思いバツクレるところだが、シックスセンスがついていった方が良いと告げている。その直感に抗うことなど出来ようもない。

彼女についてきて辿り着いたのは、静かな通りにこじんまりと営業している喫茶店。もう深夜と言っていい時間なのに営業しているとやるな。ちなみに店名は『ワシの店』。なんとも独占的な名前だ。

「いらっしやいましー」

店内にはしょぼくれたじい様が一人。
なるほど、お前の店なわけだな。

「トマトジュースをお願いしますわ」

「あつ、俺は玄米茶ね」

「うちはコーシーが自慢なんじゃがね。あと坊主、メニューくらい見とくれ。玄米茶なぞないからの」

「んじゃ、グリーンアイステイーをホットにして出してくれ」

今度はメニューを見て頼む。

「コーシーを頼めよ。てゆっか結局メニューにないからの」

グリーンティーのアイスがあるのにホットがない理由がわかんね。

「あなた、結構我が儘ですわね」

「お茶は温かい方が好きなんだよ」

飲み物が届くまで対面に座り合ったまましばしの時間が流れる。なんか知らないけど気まずい空気だ。

「お待たせしました」

「ご苦労様ですわ」

「いえいえ」

飲み物を持ってきたじい様に対してオリビアさんはまるで使用人の如く労う。

じい様の態度から考えるとオリビアさんは常連なんだろうな。だってトマトジュースはメニューにないしね。

あえて突っ込まなかった俺はさすが大人って感じだ（自画自賛）
うん、茶がうまい。

「さて、先ほどのお話ですけども……」

オリビアさんがトマトジュースの入ったグラスを置いて話を切り出す。

しかし、先ほどの話ってなんだ？

「あなたの告白は嬉しいですが、いきなり言われても困りますわ。それも往来でなんて……その勇氣は買いますが、場所というかもっとムードというものを大切にするべきですわ。これはデリカシーの問題ですから改善してくださいませ。あと、あなたは以前にもワタクシに告白したようですが記憶にありませんの。最初の告白は多分あなたの妄想だと思いますわ」

質問がある。

果たして、この人は何を言っているのだろうか。もしかして……キチ○イって奴？

「なんのお話ですか？」

「だから、あなたの告白に対する返事をしてさしあげているでしょう」

「へえー」

告白なんていつしたんだろ？　もしや俺の発言が告白と取られてしまったのか……

だとしたらなんたる勘違いだ。でも、あえて否定しないのも手だな。だってOKなら儲けものだし、断られてもそもそも告白してないんだからダメージは軽い。

「とりあえず、あなたのことをよく知りもせず結論を決めるのも早計だと思いますから条件をあげますわ」

「はいはい、なんざんしょ」

「その前に、あなたのご職業は？」

「迷宮の探索者？」

「なぜ疑問形ですか？　まあ、いいですわ。それにしても奇遇ですわね。ワタクシも探索者ですよ」

「あっそ」

知ってるし。

「ちなみに現在ワタクシは二十階層まで進んでいますわ」

「すごいすごい」

前に聞いた時から進んでねえけど一応褒めておく。

[illegible]

「前にあんたに会った時は、第一の試練を突破したばかりだった」

「……あら、さすがワタクシ。あなたは有象無象ではないと無意識に理解していたのですわね。それなら十五階層まで来れたらあなたとパーティーを組んであげますわ」

「はい？」

「どうからそういう話になったんだ？」

「ですから、あなたを知るためにパーティーを組んで差し上げると言っているんです。でもあまりに実力差がありすぎると可哀相ですから、せめて十五階層まで来なさい」

「いや、パーティーはちょっと……」

俺の一存で決められることじゃないし、そもそもオリビアさんの実力もわかってない。

「つーか飽きたって言ってパーティーから抜けるような人だぞ？
素直に頷けるわけない。」

「ワタクシがパーティーに入ってあげると言っているのに何が不満ですか?」

「だってパーティーはもう組んじやってるし……」

「何人ですか？」

三人

「じゃあ問題ありませんわね」

「あるからね。俺一人で決めていいもんじゃないから」

「ワタクシの加入を断る者などいるわけないじゃありませんの？」

何、その自信……

んでも人数増えたら戦いが楽になるのかな。

美玲メイリンが加入して戦力的にも大分上がったしな……それにパーティーを組める人員は五人までで、空きはまだ二人もあるんだしいつか。

「んじゃあ、オリビア、俺のパーティーに入ってくれよ」

「……馴れ馴れしい。まあ、十五階層に到達したのならこの店に来なさい。とゆーか馴れ馴れしいですわね……」

呼び捨てはダメだったか……

つーか馴れ馴れしいって二回も言われちった。

「それでは失礼させてもらいますわ」

そう言うオリビアさんは席を立て店の外に出ていってしまっ

「あの方のご主人様に対する態度は気に入りませんね」

「うおっ」

いきなり背後から美玲が現れた。

「いつから居た？」

「いつからって……一緒にお店に入ったじゃありませんか」

なにそれ、知らないんだけど……

「ストーカーはダメだって言ったじゃん」

「てへっ」

「可愛く舌出してもダメだ。今回しか許してあげないからな」

「はいっ！」

いい返事だ。

「ところでオリビアさんがパーティーに入ることについてどう思う？」

「なんとも言い難いですね。でも、リンはご主人様に従うだけです」
ふむ、内心どう思っているかは別として、多数決になればセレナがどう考えようと俺の推す意見になってしまう……
まあ、とりあえずセレナにも相談しよう。

それにしても腹が減ったな。

「じい様、カレーくれ。大盛りでな。美玲は？」

「ご主人様と同じ物を……あ、でも普通盛りでお願いします。あと飲み物としてこのスペシャルブレンドをください」

「嬢ちゃん、コーシー飲んでくれるんじゃない？ 一向に注文しないで坊主共の会話を盗み聞きしながら、僕に黙っててくれとゼスターしとった変な奴じゃなかったんじゃない」

無駄にじい様が感動している。

そんなにコーヒーが飲まれることが嬉しいんか。

その後、カレーを完食した俺はじい様に言っただけだ。

「会計はオリビアさんにツケとして」

だってあの人、トマトジュースの代金未払いなんだもん。少しくらい増えたって構わないよね？

「あと、店名が『ワシの店』なのに、あんたの一人称が僕だったことにガッカリだったよ。でも、カレーはうまかった。いや、マジでマジで」

「坊主、お主ダメ人間と周りから呼ばれとるじゃろ？」

どういう意味だよ。

「まあ、あの娘と仲良くしてくれるのは嬉しいからの。パーティーに入れるならよろしく頼むわい」

そう言ってじい様は洗い物を片付けはじめた。

なんとなくだが、このじい様とオリビアさんは店主と常連客という関係よりも親しい間柄のように感じた。

だが、追求はせず俺と美玲は店から出た。

十五階層へと至る道

「パーティー加入希望？ 別に構わないぞ」

オリビアさんの一件を相談した時のセレナの反応はあっさりとしたものだった。

「マジで？」

その反応が意外だったので思わず聞き返してしまう。

「その女は竜族で、しかも二十階層まで到達しているのだろうか？」

なら戦力的に問題はないだろ。それよりも次の探索のことなんだが、十五階層まで行ってみないか？」

「いやいやいや！ 探索計画の前に本当にいいの？」

「なにがだ？」

不思議そうに聞き返してくるセレナ。

「だってセレナ、美玲メイリンの時はとりあえず反対してたじゃん」

「ああ、だけどメイリンはかなりよくやってくれてるからな。頭ごごなしに否定するのも良くないと学習したんだ」

セレナは頑固かと思いきや、結構柔軟なんだよな……

「だとしても、会ったこともない相手を受け入れちゃっていいのかよ？」

「その言い方からすると反対して欲しいのか？」

「そういうわけじゃないけど……なんかこう、一悶着あるのかと期待半分、不安半分でやってきました」

「そうか、期待にも不安にも応えられなくて悪かったな」

まあ、話が早くて助かった。

「その人、オリビアって名前なんだけどそこそこの個性の持ち主だからね」

「フンツ、ストーカー女と馬鹿をパーティメンバーに持つ私が並大抵の個性に動じることはない」

はつきりと言いやがりますね。
っーかひどいです。

「……その中に極度の方向音痴も付け加えておいてください」

皮肉混じりに反撃を開始する。

「んで、迷宮探索のことなんだが、今回の探索で十五階層まで行くいいな？」

しかし、俺の反撃はあっさりとスルーされてしまふ。いいんだ……
所詮俺はこんな役回りさ。

「それはいくらなんでも急ぎ過ぎるだろ」

「戦力的には問題ない。メーリンは十五階層まで攻略しているし、私たちのレベルも探索していくうちに上がる」

俺の発言にセレナが言い返す。

確かにセレナの言うことも最もだと思う。

深い階層へ行けば行くほど、得られる経験値も増えるし、モンスターが落とすアイテムも高価になっていくに違いない。

だけどそれに比例するようにモンスターが強くなるのは当たり前だし、迷宮の通路に隠された卑劣な罠なんかも出現してくる。

このように危険度が増していく迷宮に対して性急にことを進めていくことが正しいことなのだろうか。

「美玲はどう思う？」

ここで美玲の意見を聞いたのは、ただ単に上位の者の見解を知りたいというものではなく自分の意見を述べることから逃げただけなのはわかっていた。

「そうですね……本当はもう少し十一階層から出現するモンスター達との戦闘に慣れてもらいたい気持ちがあるんですが、セレナさんの意見に反対する材料も持ち合わせておりません」

「では、今回の探索で十五階層まで行くことに決定だな」

美玲が反対しなかったことで、セレナの言葉通りに十五階層まで行くことが決定した。

迷宮探索の方針を決めたあと、俺達は食料や装備などの準備に取り掛かる。

今までの迷宮探索とは違い、地図のない道を五階層も進むのは多大な時間と労力がかかるらしい。

探索の途中で食料が尽きたのか、戻って来ることのなかった人間の数は多いと聞く。

そのため、準備は食料を中心に荷物を揃えた。

「一応、半月ほどは迷宮に潜っていられただけの食料は確保できたね。だけど、食料が半分になった時点で十四階層に到達出来なければ戻りましょう」

美玲の言葉にセレナが頷く。

もちろん俺もその言葉に賛成だ。迷宮内でひもじい思いをしながら死んでいくのは嫌だしな。

その後、ギルドの受付を済ませ、俺達は再び迷宮の十一階層目につてきた。

「消耗を出来るだけ抑えるために、無駄な戦闘はしないようにしましょう」

「無駄な戦闘？」

「戦う必要がないモンスターにわざわざ喧嘩を吹っかけるなどということです。リン達が戦うべきは道中で通行の邪魔だと思えるモンスターだけです。よろしいですか？」

「ああ」「うつつ」

確かにモンスターを見ると、とりあえず矢を射る女の方がいるしな。

「分かれ道が来たら、リンの祝福の一つである気配遮断で斥候しますから」

「へー、美玲の祝福ってそんなの持ってたんだ」

俺のとは大違いの役立ちそうなもん持ってるじゃねーかよ。それにしても気配遮断って……

「なんかストーリーカーすんのに役立ちそうな祝福だな」

「ご主人様、役立ちそうではなく役立つんですよ？　まあ、姿を見られた瞬間に効力は失いますがね」

そう言われて俺はどう答えればいいの？

「ーが使ってるのね。どうりでいきなり背後から現れたように感じるわけだ。」

「いちゃつくな」

「いちゃついてないって。そう言えばセレナの祝福ってどんなのあの？」

迷宮探索の初期から一緒にいるけどいまだに見たことないんだよな。

「お前の前で幾度も使っているだろ？」

「嘘っ、知らないよ？」

あ、でもセレナに嘘をついた様子はない。

本当に使ってやがる。

いったい、いつの話だ？

「千枚通しと言う祝福でな、貫通力の強化だ。これがなければスタッグビートルの装甲を貫くのはしんどい。他にもホークアイと言う視力強化の祝福も持ってるぞ」

「弓のための祝福って感じだな」

「ホークアイに関してはそうかもな。だけど千枚通しは槍使いでも持ってたりするぞ。ところでソーマの祝福はどんなものがあるんだ？」

因果応報って奴か……　だけど俺は二人に比べてかつちよわりい祝福

しかないわけで、言うに言えない。

「リンも調べたけどわからなかったんですね。教えてください」

うう……美玲まで純粋な瞳で俺を見つめてやがる。

仕方ない教えてやるか。

「俺の祝福は……モンスターが寄ってくる匂いを発することだ」

「それは……マジか？」

「イエス。美玲が匂いを辿って俺に行き着いたのも、この祝福のせいだ」

「す、素晴らしい祝福ですーっ！」

お、なんか美玲には好評だ。

セレナはなんか考え込んでるけど……

「そうか、どおりでモンスターとの遭遇率が高い気がしたわけだ」

「あ、うん。でも、ちゃんと祝福をオフにすることも出来るからね。現に今も切ってるから」

「へ？ ああ、いいんじゃないか？」

意外と受け入れられた。

「クンクン……あの匂いはしませんね。なんか残念です。ご主人様の匂いが一般男性と同じになってしまいました……迷宮探索が終わったら元に戻してくださいね」

「う、うん……」

なんか、傷ついた。

俺の価値は後付けで得た匂いなのか？

「他は？」

セレナが尋ねてくる。

さて、他と来たか……俺の祝福は現在二つあり、一つは先ほど言った匂い発生だがもう一つは神様が話し掛けてくるとかいうわけのわからない物だ。

しかも、試練突破の時に使用されてからまったく音沙汰ない。

「今のところ祝福はこれだけだ」

とゆうことでなかったことにした。

「そうか……なんか隠してないか？」

うげっ、鋭いな。

「ダンディーな男には秘密が付きものさ」

「……気持ちが悪い」

渾身の決め顔だったのに反応が手厳しい。

「ふむ、ご主人様には秘密&謎がいっぱいですね。なんとも暴きがいがあります」

こっちの娘さんはなんか燃え上がってる。

「ま、まあ、話はそのくらいにしておこうぜ。敵だ」

会話に夢中になっていたため、接近に気づくのが遅れてしまった。

俺の言葉にセレナと美玲がそれぞれ自身の武器を構えた。

その後の探索は予定通り無駄な戦闘は避けながらゆっくりと進めていった。

地図もない迷宮を進む上で大切なのは勘と運、それと確かな方向感覚である。

そのことを鑑みると、うちのパーティーには絶対に当てにしてはならない人物が存在しているし残った二人のうちの片一方はもう一人に従順だ。

つまり進むべき道の選択は必然と俺がとることになった。

そして俺はシックスセンスと言ういわば勘に優れている。探索一日目にして十三階層目に辿り着き、二日目には十五階層へと到達したのは当然の帰結と言える。

残念なことにあまりに順調すぎて宝箱に巡り逢えなかったことは悔やまれるが、普通に考えて短い時間で十五階層まで踏破できたのは喜ぶべきことだ。十五階層は結界のある階層なので地図が存在するあとは地図に従って進めばいいだけだ。

また、道中俺もセレナも一つずつレベルを上げること出来た。これは当然と言えば当然のことではあるが、喜ばしいことに違いはない。

だと言っのに……

「……………」

後ろを歩く二人に見られてる。

なんか知らないけど見られちゃってるよ……

見つめてるとか艶っぽいものでは断じてなく、ただ見られてる。

それは例えば昆虫やあさがおの観察のごとき視線だと言える。

「……なに？ なんなの？」

気になって尋ねてみる。

「……いえ」

「別に……」

俺が振り向くと同時に視線が逸らされる。
本当に一体どうしたと言うのだ。

「もしか、惚れたな？」

とりあえず茶化して空気を和ませてみるか。

「惚れてますけど？」

「ふざけるな馬鹿」

作戦は一応の成功をみせ、二人と視線が合う。

「んで、なんで俺を見てたわけ？」

そこでもう一度質問をぶつけてみる。

「リンは常にご主人様を見てますよ？」

「……君はそうかもね。でも視線の意味は違うよね？」

「特に意味はないです。確証がありませんから……」

確証？

なんの証拠を探してるっていうんだ……

「今回の探索は運が良かったなという話だ」

訝しむ俺にセレナが告げる。

そこでようやく二人の考えを推測することができた。

おそらくだが、あまりに順調過ぎることに不思議がっていたのだ。通常の迷宮探索では迷宮に入る前の美玲の言葉にあるように長期の探索を前提として準備している。一日で一階層進めば順調どころか早いペースだと考えられている。

だと言うのに俺達は僅か二日で十五階層まで到達してしまった。そこでルートを決定していた俺を見ていたのだと思う。だがしかし、現時点で言えばただ単に運がものすごく良かったで片付けられる事象なため言葉に出来ないということだろう。

「えーと、運が良かったんじゃないくて俺の勘が鋭かったんだよ」

「そうか……」

あれ？

俺としては自分の能力を明かした一言だったんだけど反応が薄いな。もしかしてまた茶化したとか思われちゃったんじゃないだろうな。

「だ、か、らー！ 俺は勘が鋭いのっ！ それゆえに今回の探索は早く進むことができた。ドゥーユーアンダースタンドウ？」

「おふざけはいいから進もうか。もうすぐ結界だ」

軽くスルーされてしまった。

うーん……もしかして俺の推測が間違ってたのかな。

「ちょっと待ってください」

そんなことを考えていると美玲が場に制止の声をかける。

「セレナさん、もっと真面目にご主人様の話を聞くべきです」

「話を聞こうにもソーマはすぐふざけるのだから仕方ないではないか」

「……ご主人様。先ほどの話、いつものアレな発言ですか？」

「いや、さっきの勘が云々はふざけてないよ。本当に俺は勘が鋭いんだ。あと、美玲。アレってなに？」

「ということです。今のご主人様がふざけている、または嘘をついているように見えますか？」

「ふむ……勘が鋭いで片付けていいものなのか？」

「そこはリンも疑問ですが、ご主人様がこう言っている以上、それで片付けてあげるのがベターな選択だと思います」

ようやく信じてもらえたみたいなのだが、

「ねえ、アレってなに？」

俺にも疑問が生まれてしまった。

「今までのことを振り返ればおのずと答えがでる。胸に手を当てて考えてみる」

「え？ いいんすか？」

マジかよ……結構大胆だな。

「この場合手を当てるだけじゃなく、揉んじやっても事故だから」

一応予防線を張っておく。

そして俺の両手はセレナの胸の頂きに……

「お前はなにをしてるんだっ！」

触れなかった。

代わりにセレナの拳が頬にめり込む。

「ぐびゃっ！」

奇怪な音を出して倒れてしまった。

HP	09 / 60
MP	24 / 60

減った。体力が減った。

しかもかなり危険区域に差し掛かってきた。

おかしいな、まだ20以上はあったはずなのに……

慌てて道具袋からポーションを取り出して飲む。

なんとか窮地は脱出したようだ。

「誰が私の胸に手を当てると言った！」

セレナの怒声が響く。

「ご、ごめん……脳内で勝手に都合よく変換しちゃったみたいだ。でも、セレナも悪いんだぜ。そもそも俺の胸に手を当てるとも言われてないし」

「この状況でお前が触れていい胸は自分自身のもの以外ないだろ！」

ごもつともなお話です。

だからこそ、勇気を出して立ち向かったわけだがな。例え本当に触れていたとしても勘違いで済むあの状況は正直おいしかった。

「いやー勘違いしちゃった。メンゴ」

「勘が鋭いって自分で言った矢先に勘違いなんかするなっ！ あと、謝罪にもつと誠意を込めろ」

「お二人ともそれくらいにしてください。あまりに騒ぐからモンスターが集まって来ちゃいました」

美玲の声に視線を移すとスタッグビートルやスライム、そして十三階層から出現していたホーホーというダチョウくらいの大きさの鶏のようなモンスターが群れをなして迫ってきていた。数は全部で十近い。

「やるの？」

「十五階層のモンスターとなるとリン的にはきついですが」
「だろうな。では、一時退却だ」

幸運にも挟み撃ちではなかったために、モンスターのいない方へ全力で逃げた。

<教訓>

迷宮内での大声はやめましょう。

その後、かなり遠回りをしながらもなんとか結界内に辿り着くことができた。

結界内の魔法陣は一人ずつしか使えないので、セレナ、美玲、俺の順で使用する事になった。

セレナが魔法陣を使って帰還した後、残ったのは俺と美玲の二人。

「ご主人様」

「ん？」

魔法陣を使うのは美玲の番ではあるのだが、美玲はすぐには魔法陣を使用しなかった。

「リンの胸にならいつでも手を当てていいですよ」

そう言い残すと美玲は逃げるように魔法陣へと入り、迷宮の外へと帰還していった。

見間違いでなければ、顔が赤かったようにも思える。

「美玲でも恥ずかしがるんだ……」

どこかで羞恥などないと思っていた美玲の意外な面を見て若干唖然としたが、よくよく考えれば彼女も年頃のお嬢さんだから当然だよなと納得する。

そして少し遅れながらも魔法陣の中に入り、

「^{リターン}帰還」

と帰還の言葉を唱えた。

喫茶店で勃発

十五階層に到達し、善は急げと俺達は連れ立って喫茶店『ワシの店』に足を運んだ。

「いらつしゃいましー」

なんとも覇気を感じられない出迎えた。

「前回と同じもの。あとカレー大盛り」

「まだ一回しか来たことない癖に偉そうじゃの。僕が坊主を覚えてなかったらどうするつもりじゃ」

「あんたの雰囲気がそうさせるんだ。それに結構特徴的な注文をしたと自負している。あと、一人称どうにかなんないの？」

「店名は前の店主がつけたものじゃから僕には関係ない。そしてオススメはコーシーじゃ」

「コーシー？」

セレナが疑問符を掲げている。

せつかく俺が気を遣って突っ込まなかったのに……

お年寄りには横文字に弱いんだよ。CDをシーデーって読む人なんていっぱいいるからね（多分そんなにいません）！

「コーヒーのことですよ。リンはまたもスペシャルブレンドをお願いします」

「なるほど、私はアッサムをくれ。ミルク付きでな」

「はいよ」

初見のセレナが紅茶を頼んだことに若干の気落ちは見せつつもじい様が準備をはじめ。

「それで、そのナントカって奴は本当に来るのか？」

「さあ？ でも十五階層に辿り着けたらここに来てって言ってたし、他に連絡の取りようもないから。それに昨日の今日だしね」

正確には一昨日なんだが、彼女の予想よりも早いという点では疑いようがない。

「……おい」

「大丈夫大丈夫。もし来なくてもこのじい様に伝言頼んどけばいい話だし」

何よりカレーが美味いから損はない。

「来るよ」

そこで俺達の会話を聞いていたのか、じい様が会話に入ってくる。じい様は迷いのない口調で断言した。

「オリビア様はほぼ毎日この店に来店するからね。待ってればそのうち来るよ」

「ふーん……」

オリビア、様ね……

本当にただの常連客と店主の間柄じゃなさそうだ。

オリビアさんはいいいところの出身らしいから、もしかしたら元使用人とかなのかな。

でもじい様はどう見ても人間族っぽいし……

竜族の雇用事情はわりと寛容なのかな。

「それはそうと坊主。先日の勘定を自分になすりつけられたと聞いて、昨日来店したオリビア様が呆れておったぞ」

そういえばそんなことをしたような気もする。

それにしてもそんなことをされても怒るわけでもないオリビアさんは結構心がでかいんだな。逆に自分の矮小さを認識させられた気分だ。

まあ、後悔などミジンコの体長ほどしかしていないが……

「リンもご相伴に預かっちゃいました」

「お前ら最低だな」

訂正。蟻の体長ほどは後悔してます。

「んで、だいたいどのくらいの時間に来るんだ？」

掘り下げると更なる後悔を生みそうなので話題を変換する。

「基本的に朝と夜に食事を取りに来るぞい。夜は別なところで食事をしたとしても小休止に来るかの。あとは暇なときにふらっと来る」「めちやくちや頻繁に来てんのね」

一週間に十回以上の来店つてもはやここに住んでいると言っても過言じゃない（過言です）。

ちなみにではあるが、この世界には実は一週間という単位はない。月の計算もあるにはあるが、果実成る金毛の月とか何月なのかよくわからない単位だ。

季節的には秋も半ばらしいので十月くらいだと勝手に解釈している。

一月はきつちり二十八日間、月の数は十三。一年の日数で考えれば、だいたい元の世界と一緒だ。その点に関してはありがたいが、自分の誕生日に関してはよくわからなくなった。

まあ、成人を迎えたあたりからどうでもよくなったので問題はない。だって二十になったら酒もタバコもオツケーでエロい本だって堂々と買える。前の世界では習慣的に数えてはいたが、今の段階でなければないであまり困らない。

まあ、クリスマスやらの行事もないわけだが、この世界独自の祝い事みたいなものもあるらしく、どんな感じなのか、今から楽しみだったりする。

「はい、ご注文の品お待たせ」

少し考え事していた間に注文のカレーその他諸々が届けられる。各々それに口をつける。

「ふむ、なかなかだな……」

「本当にコーヒーは美味しいですよ？」

「あの苦い汁は苦手だな」

「それじゃ男の放出する汁は以下略」

「それは言ってるも同然のセクサルな発言じゃないかのう……」

そんなちよつとシモの入った馬鹿な話をしていると店の扉が開かれ、一人の客が入ってくる。

それは俺達が待ち望んでいた人物だった。

「あら、クロキソウマではありませんの」

赤い縦ロールの髪を揺らしながらオリビアさんが店内にいた俺を見

るやいなや声をかけてくる。

「どうーも」

「……あなた、ワタクシに支払いを押し付けたでしょう。ああいう場合は男性が払うのが礼儀ですわよ」

「俺は大抵の場合割り勘派だ」

「全額ワタクシが払いましたけどね」

そんな軽口を叩き合いながら、自然とオリビアさんが俺の近くの席に座る。

「ドリルだ……」

そこで初めてオリビアさんの姿を見たセレナがボソツと呟く。

まあ、確かにドリルと言えなくもないが先は尖ってないぞ？ とゆ

ーかこの世界にもドリルは存在するんだ……

そこら辺の線引きがどうもわからん。

「いきなり何ですか？ 初対面の相手に対してのその無礼な発言は」

「あ、いや、すまん。つい……」

どうもセレナのドリル発言がオリビアさんの心の琴線に触れたらしく、セレナに対して突っ掛かっていく。

「つい？ ついでワタクシの高貴な髪型をおとしめる発言をしたと言っんですの？ 流石は下賤なダークエルフですわね」

「ちよつと待て。ダークエルフのどこが下賤だと言っんだ。大体私は見たものをそのままに表現しただけだ。第一何がドリルなのか言っっていないのに自分の髪型を言われたと思うということはお前もそう思っっていたということだろう？」

「なっ……黙って聞いて差し上げれば好き勝手ほざきやがりますわね。人の髪型をどうこう言う前にあなたのその格好だって変ではありませんの。そのように肌を晒して……女性であるならば子供を産むと決めた男性の前以外では慎みを持つべきですわ」

ああ、だからオリビアさんはいつも会う度に最初に見た重鎧でギツギツチに武装してんのかな。

とゆうか、この一触即発の空気はどうしたと言うんだ。まだ、お互いの自己紹介すらしてないと言うのに……

「えーと、ちょい待ち。セレナ、この人がオリビアさん。仲間になつてくれるって言つた竜族の人だよ」
「はあ？」

まずはセレナにオリビアさんを紹介する。
反応はすこぶる悪いと言わざるを得ない。ただ紹介しただけなのに睨まれてしまった。

「そんでオリビアさん。この人はセレナって言って、俺のパーティーメンバーの一人だ」

「だから何ですか？」

「あ、なんつーか。十五階層到達したんですよ。だから約束通り来ました。仲間も連れてね。そっちで我関せずって感じでコーヒー飲んでるのがもう一人のメンバーで美玲」

次いでオリビアさんにセレナと美玲を紹介する。

「随分と早いですわね。とゆうかこのダークエルフもメンバーなの？」

「うん」

オリビアさんの問いに頷いた。

その途端、オリビアさんの顔が明らかに嫌そうに変わる。

「この騷のなっていないダークエルフもですか？」

二度目の問い。

答える必要があるのかどうか分からないがオリビアさんの目を見て再び頷いてやる。

「じよ、冗談じゃありませんわ。なぜワタクシがこんな女なんかと！」

「私こそこいつとパーティーを組むなんて嫌だ！」

何が彼女達をそうさせるのか、声を張り上げて自らの意見を主張する。

おかしいな……二人とも問題ないって言っていたはずなのだが、会って数分でこうも当初の意見を覆してしまうのか。

「まあまあ、落ちつけて。セレナ、事前に確認取った時はいいって言ってたろ？ オリビアさんも同様にパーティーがいても構わない的な感じだったじゃん」

仲裁しようと二人の間に割って入る。

「あれは撤回する。こいつはなんかやだ」

セレナは駄々っ子のような意見を言ってきた。

「どうしてもワタクシにパーティーに入って欲しいと言ってきたの

はあなた方でしょう。そうでなければ低階層の方達と組むなんて考えもせんわ」

そしてオリビアさんに関しては真実が多分に揜曲がったことを言い出してきた。

「お前が私達のパーティーに入りたいと嘆願したんだろうが！ 勝手に話を作るなドリル」

セレナの意見が正しい。正しいが……ドリルはやめようよ。

「またドリルって言いましたわね。次、言ったらいくら温厚なワタクシでも怒りが天元突破しますわよ……」

「はあ？ その頭のドリルで天でも突くのか？ やってみろ、ドリル」

ほら、また言い争いの種になった……

どうすりやいいの？

救いを求めて二人が邂逅してからずっと沈黙を保つ二人に目を向けてみる。

じい様は露骨に逸らした。

美玲は……なんか口パクで言ってる。

なんだ？

が、ん、ば、で、す、ご、しゅ、じ、ん、さ、ま

……見捨てられた。

つまりこの争いを治めるのは俺の仕事というわけか。

「そこまでだ。双方とも争いはやめなさい」

しかし、俺の制止の声を無視して二人は更にヒートアップしていく。

くっ、舐められたもんだ。だが、俺には秘策がある。

「はいはい、方向音痴もドリルも静粛にして俺の話を聞いてくれ」

「誰が方向音痴だ！」

「ドリルではなく高貴な髪型と言ってるでしょう！」

二人が気にしているであろう単語を入れると露骨に反応してくれる。作戦成功だ。

代償は矛先が俺に向いてしまったことだが……

「えー、女三人寄れば姦しいと言いますが、君らは二人で十分な働きをします。さて、ここで俺が言いたいのは……」

「黙れ馬鹿」

「そうですね。黙りなさい」

共通の敵に対しては意見が合うのね君ら……

いや、俺は敵じゃないけどね。

「まあ、俺の話を聞けよ。まず、オリビアさん。俺はセレナを信頼してるんだ。俺が迷宮に入った当初から助けられてきた。だから、まだ会って数分でそこまで嫌うことはない。いい娘なんだよ。そんなでセレナ。オリビアさんはそこそこ個性的だっであらかじめ言ったでしょ？ それに俺も数えるほどしか会ったことないけど、悪い人ではない。嫌う要素なんてないさ。きっと戦力になってくれるって信じてる。確かに二人は会ったばかりで相手のことを知らないし、信頼も何もあつたもんじゃないと思う。だけどお互いを信頼できないなら二人を信頼している俺を信頼しろ。それで万事解決だ」

あー、やべー。俺今の超かつこいい……

どうかで聞いたことある台詞だったけど構いやしない。

「そんなんもつと信頼から遠ざかるわっ！」

「ますますこの女を受け入れる気が失せましたわ」

あれ、なんで？

俺のことアニキって呼びたくなるようなこと言っただけど……そうか、俺にはカリスマ性が足りないのか……

「こうなりややけ酒だ！ 親父、きつい酒くれ」
「置いてないよ」

くそっ、皆が俺を馬鹿にしやがる。

「それではこうしませんか？」

パンツと手を叩いて今まで観戦していた美玲が割って入ってくる。

「なんだ？」

「なにか意見でも？」

「はいです。手っ取り早く勝負すればいいんですよ。セレナさんが勝ったらオリビアさんがパーティーに入れてくださいと頭を下げる。逆にオリビアさんが勝ったらセレナさんがパーティーに入ってくださいと頭を下げる」

それじゃ、根本の解決には至ってないと思うが……つかどっちにしるパーティーを組む選択になるけど、水と油状態のこの二人がパーティー組むことになって大丈夫なのか？ まあ、俺はいいんだけど……

「して、その勝負方法は？」

まずセレナが食いついてくる。

「そうですね……公平に知力・体力・時の運の三本勝負にしまし
うか」

「なるほど……ワタクシが全てにおいて秀でているとこのダークエルフに思い知らせるというわけですね」

あれ、オリビアさんも乗っちゃうの？

「勝負はいつにするんだ？」

「明日の昼の十二時。この喫茶店に来てください。それまで準備するなり休んで鋭気を養うなりすればいいと思います」

話がどんどん進んでいく。

俺は置いてきぼりだ。

「いいでしょう。このオリビアⅡNⅡアンリ、逃げも隠れもしませ
んわ。首を洗って待つてなさい。オーホッホッホッホッホッホッホ
ッホッホッホッホッホッホッホッホッホッホッホッホッホッホッホッ
グエツ……ではご機嫌よ
う」

そう言うてオリビアさんは店から去っていった。
なんなんだこの展開は……

「ふふ……高笑いをしてむせるとは馬鹿丸出しではないか。この勝負もらったな」

セレナもまた席を立ち、店から出ていく。

「単純ですね……これは、どっちが勝っても愉快ですね」

満面の笑みを浮かべて俺に同意を求めてくる美玲を直視できない。
もしかして美玲の中身は黒かったりするの？

その時、また店の扉が開く。
新たな客かと思いい目を向けるとそこにいたのは我らがダークエルフ様。

「ソーマ、宿はどっちだ？」

「……送ってくよ」

勇んで出ていったと言うのに涙目で帰還したセレナに萌えてしまった。

どっちを応援するとかはしないけど、心の中くらいではこの娘に勝つて欲しいって思うのは付き合いの長さ故かな。

「坊主、勘定」

店を出ようとした俺をじい様が呼び止める。

「美玲、よろしく」

「はいです」

しかし、勝負か……ガチンコだったら単純に二十階層に到達しているオリビアさんが優勢なのだが、勝負は三つ。果たして勝つのはどっちなんだろう？

「ダメ人間対決なら坊主が大差で勝ちじゃな」

じい様が背後で呟いた言葉は聞かなかったことにして俺達は店を後

にした。

無駄な女の戦い（前編）

明くる日、喫茶店『ワシの店』にてその戦いの火蓋は切って落とされた。

「さあ、やって参りました。第一回どちらが頭をさげるのか争奪三本勝負。司会進行&問題出題、その他諸々はこの楊・美玲ヤン・メイリンが務めさせていただきます。なお、解説はこの人。リンのご主人様こと黒木相馬様です」

「よろしく」

「ついにはじまりますね？ ご主人様はどちらが勝つと予想されますか？」

「正直、俺の口からはちょっと憚られます。それより二人に言いたいことがあります……俺のために争うのはやめてっ！」

結論から言えば、盛大にスベった。

場が妙にシーンとしている。

くそう、誰か突っ込むか何かのアクションを見せろよ。たったそれだけで大分救われるのに……

「ところであなた！ えーとセ、ナンチャラさん。ちゃんと首は洗ってきましたの？」

「セレナだ。お前こそ覚悟はいいのか？」

やはりスルーされた。

HPは減っていないが、違う何かが減った気がする。でもこんなことで泣かない！ だって男の子だもん。それにしても早くも火花がバチバチと散ってやがる。

「ワタクシの覚悟は一億年の昔からできていますわ。それよりワタクシはあなたに首を洗ってきたのかと聞いたのですわ!」

「私も覚悟は決めてきた」

「……別にそんなこと聞いてませんわ。ワタクシは首を洗ってきたかどうか聞いてますわ」

「だから……」

なんだこの話の噛み合っていない感は……

そんな風に考えていると不意にオリビアさんと初めて出会った時のことを思い出す。

「大丈夫。セレナはちゃんと首を洗って来てるよ。首筋からしっかりと石鹸のかほりがしたんで……」

「なっ!?!」

「そう、それならいいですわ」

やはり、そのまんまの意味で聞いていたか。最初の耳の穴をかつぽじつて的な流れの時とまったく一緒だ。
オリビアさん……なんとも難儀な人だ。

「……ソーマが私の匂いを嗅いでいたという若干気持ち悪い行為を働いていたことは置いておいて、最初の勝負はなんだ?」

あ、なんか変態扱いされてしまった。嘘も方便って言葉を知らんのか小娘……

「気になる最初の勝負は……ジャジャーン! 知力勝負です。勝負方法は簡単。リンの出す問題に先に正解を答えた方が勝者です。ただし、一度間違えたら相手が何か解答するまで答える権利はありま

せん」

セレナの問い掛けに美玲が答え、勝負を説明する。

「ちゃんと公平な勝負にしてくださいな」

「そこはもちろんです。両者にとつて多分不利益のない問題をご用意しました。ところで二人共ルールは把握できましたか？」

「ああ」「いいですわ」

美玲の問い掛けに二人が頷く。

さて、一体美玲はどんな問題を出すのかな。実は俺もどんな問題が出るのか知らない。

つーか、この後どんな勝負をするつもりなのかもわからない。

「第一問！」

美玲が声を張り上げる。なぜか前傾姿勢で構えるセレナ、オリビアの両者。

つーか第一問って言った後の溜めが無駄に長い。ファイナルアンサー後の某司会者並に長いよ。視聴者はそんな無駄なものより早く先が聞きたいんだからね！ 正解のCM跨ぎは更にいらつくから！

「……ご主人様の年齢はいくつ？」

美玲が問題を言い放つが、そのことで時が制止してしまう。
俺自身もそうきたかー！ と驚いてしまった。

「な、なんですの、その問題は……」
「ソーマの年齢だと……」

なんか、すいません。

「そんなの、この女に対しての露骨なサービス問題ではありませんの？」

オリビアさんが憤慨する。

ま、当然だわな。

だけど……

「いえ、そんなことはありません。セレナさんはご主人様の年齢は知らないはずです。そして何より人間族の成長過程も知らないはずですから」

なぬ？

セレナは俺の年齢を知らないとは思っていたが、人間族の成長過程とはなんぞや？

って種族が違えば成長速度も多分違ってくるよな。

となると他の種族はどう成熟しているのか調べる価値ありだな。

「むー……七十五？」

「違います。セレナさんはオリビアさんが答えるまで解答できません。それにしても平均寿命二百を超えて、若い時間の長い無知なダークエルフならではの解答ですね」

搾り出すようにセレナが解答するが、なんか見当違い過ぎてへこむ気にもならない。

「つか美玲の言葉から推察するにセレナが小娘どころか、見た目二十代の百歳超えたばあさんの可能性があるってことか？ とゆーか若い時間が長いってどこの戦闘民族だよ。穏やかな心でブチ切れた

ら伝説の戦士になったりしないよね……
でも、美人だからいつか！。

「ふむ、確か人間族は竜族の三倍程の速度で成長していくんですね。見た目的にはワタクシとそう変わりありませんから、ワタクシの年齢を三で割って二十四ですわ」

「おいしいですっ！ 解答権がセレナさんに移ります」

んーと、オリビアさんが二十四に至った経緯を考えて、逆に三をかけてやるとオリビアさんの年齢になるわけだな……うおっ、還暦を超えてらっしゃる。なんか、ショックと感動が同時に襲ってきた。でも、美人だからいつかー（二回目）。

「二十四でおいしいなら二十三だ」

「はい、違いまーす。オリビアさんに解答権移動です」

「二十五ですわ」

「はいはい大正解です。では正解したオリビアさんに10ポイント
っ！」

「やりましたわ。10……ポイント？」

「えー伝えるのが遅くなりましたが、この三本勝負は二本先取で勝利ではなく、ポイント制です。頑張って多くのポイントを集めてください」

先取ではなくポイント制か。

でも、それって最後には一発逆転のチャンスとか言っただけ外れなポイントが加算されるルールの布石みたいなもんだよね。
こりゃ前半にいくらポイントを稼いでも無駄だな……

「聞いてませんわっ！」

「はい、言ってますん。とゆーか二本先取とも言ってますんけど……

…さて、それでは第二問。ご主人様とリンの絆の証である指輪型魔法具。これには黄色の魔法が込められています。その魔法とは？」

今度は溜めないんだ……

「…かこれってセレナへのサービス問題？」

思いつきりセレナの前で手渡されたしな。それに迷宮攻略中にも幾度か使った。

これで同点かとも思ったのだが、当のセレナは首を捻って一生懸命思い出そうとしている。

正直その姿は軽く傷つくわー。

「黄色の魔法で指輪型。尚且つあなたがたの力と貧乏そうな顔を考えるとライトニングしかありえませんか」

「正解です。10ポイント獲得」

またもオリビアさんの正解だ。

セレナはかなりのサービス問題を落としてしまったな。

「さて次の問題です」

その後第九問まで問題が続いた。

そしてそのどれもが俺に関係していたわけで……正直恥ずかしすぎる。

風呂でどこから洗うかとかどんな問題だよ。そーいうのは女性のを聞くからいいのであって二十代中盤の大してかっこよくもない男のなんて知っても気持ち悪いだけだ。
いい加減耐えられない。

しかも二人のポイントが80対10でセレナが大差で負けてるって何？ セレナはそこまで俺に興味がないのかと無駄に傷ついたよ。唯一正解した問題が、俺と同じ敷地内に住んでいる探索者ギルド受付の人気No.1な女性の名前って、俺の要素が少ない。ギルド受付No.1って時点で絶対オリーブさんもわかってたよ。僅差で勝っただけじゃん。

今日、来なきや良かった……

「では知力勝負最後の問題です。第十問、ご主人様の平常時の陰け……」

「それはさすがにアカーン！」

嫌な予感がして問題の途中で慌てて美玲の口を塞ぐ。

まったく一体どうやって情報を仕入れたというんだ。

この先を聞いたら俺は美玲と普通に接することができなくなる。いや、そもそも今までのも普通に考えてアウトかもしれない。

美玲が美少女じゃなかったら口封じにあまり語れないことをするか、逃走していただろう。

「美玲、お前を真正面から見られなくなりそうだから、これ以上俺を辱めないでくれ」

切実な声音で懇願する。

「も、申し訳ありません。さすがに問題にしているものではなかったです。これはリンとご主人様だけの秘密でしたね」

「いやいや、その言い方だと『げへへー皆には内緒だぜ』って俺が見せたみてーじゃん。誤解を招くような発言はやめてー！」

せつかくの清純なイメージが、記憶にある忌まわしき姿の似合う存

在になっちゃうよ。

「それで最終問題は？」

心底呆れたという顔でセレナが聞いてくる。

「そうですね。それではそれぞれが思うご主人様のいいところを言ってもらいましょうか。ポイントはご主人様がお付けになってください。ただ、あんまりあげ過ぎないでくださいね。公平にお願いします」

なんか別の意味で恥ずかしいのがきた。

でも二人がそれぞれ思う俺のいいところってのは聞いてみたい気がする。

「バッチコイ！」

心の準備は出来た。

例えばどんないい感じの褒め言葉が来てもにやけ面にはならない。目指すべきはクールな男。

しかし、俺のそんな気持ちとは別に二人は口を開かずジロジロと俺を凝視している。

これはもしかして……

「俺のいいところって思いつかない……？」

これはマジで泣きそうだ。

人間誰しも取り柄はあるというが、俺にはそれが無いと言うのか。いや、二人が見つけてないだけだ。なんだかんだ付き合いは短いからね。

「……カッコイインじゃないかしら？」

オリビアさんがいかにも苦し紛れという感じで答える。

「0ポイント。俺程度がカッコイなんておこがましい」
「……ですわよね」

肯定されるとそれはそれで腹立つ。

嘘でもそんなことはないって言って欲しかった。プラスしてワタクシの中ではトップクラスですとか言われたら50ポイントくらいあげてたっつーの！

「うーん、ソーマのいいところ……人間族にしてはましなところだな」

「10ポイント」

搾り出してそれが……

でもまあ、悪くもないからとりあえずって感じ。

「はい、それでは次の勝負に移りまーす。その前に現在のポイントはオリビアさんが80ポイント、セレナさんが20ポイントです」

こういう問題は普通思いつく限り何度でも解答可能だというのに、いかにも切り上げたというノリで美玲が問題を打ち切る。

俺もいたたまれない感じなので、延長希望は出さない。

現在、オリビアさんが大幅リードだ。

それにしても次の勝負は何だろう……

知力の次とくれば体力か？

「次の勝負は体力&魅力を競い合ってもらいます」

体力と魅力を競う。

そ、それってもしや……

「キャットファイト!? しかもポロリもあるよ下着マツチかよ!」
「違います」

俺の期待は無慈悲にも一瞬で否定されてしまう。
なんとも儚い夢だった。

「違います」

「……二回言わなくていいから。ちゃんと理解してるよ」

追い討ちとはやるな。

「次の勝負は閑古鳥の鳴くこの寂れたお店にお客様を連れて来る、
です。要は客引きですね。制限時間は一時間で、一人につき20ポ
イント差し上げます。ただし、入店時に〇〇さんの紹介で来ました
って言わないと得点入りませんから」

「てか体力関係あんの?」

「客引きの基本は足です。それに人見知りの人間だとすれば他人に
声をかけるだけで体力を使います」

なんか納得できない。

そもそも、

「セレナ達って人見知りなのか?」

そんな素振りは見た覚えがない。

かと言って誰にでも陽気に声をかけられる怪物モンスターの感じもなかったが

……

「両者とも必要がなければ他者に声をかけないタイプですね。でも、自分自身が必要であると思えばどんなみっちりことでも喋りかけるタイプです」

それはなんか納得だな。

「なんか馬鹿にされてないか？」

「侮辱は許しませんわよ」

二人が美玲の言葉に反応する。

「ともかく、ルールは把握できましたか？　そして実はこの勝負のためにリンのよく利用する洋服屋さんに衣装を借りてきました。これを着れば魅力度五割増しは間違いなしです」

そう言つて美玲は自身のアイテム袋から次々と服を取り出す。

その種類は美玲の着ているメイド服からチャイナ服っぽいものや神官の服など多種多様だ。

「つかコスプレ？」

「こんなもの着なくともワタクシの魅力ひとつでこの店に行列を作つてやりますわ」

オリビアさんはそう言つと店を出ていく。

「私も着替えるのは面倒だから遠慮しておく」

セレナもまた着替えずに店を出ていった。
なんとももつたいない……

「無駄になっちゃいましたね……」

そして後に残ったのは淋しそうな美玲と

「まあ、コーシーでも飲みなさい」

慰めるかのように美玲の前にそつとコーヒーを出すじい様と俺の三人。

仕方ない。俺も慰めてやるか……

「元気だせ。いつかその服達をあの二人に着せてやろうじゃないか」

普通に俺が見たい。

チャイナっぽい服のスリットから覗く足とか想像するだけでたまらん。

「ご主人様……」

「なーんか欲望が透けて見えるのう」

「黙れジジイ。俺にも飲み物だせ。コーヒー以外な」

「……前と同じのでええな」

それから幾分かまったりとした時間を過ごす。

他の客は来る気配もない。

「それにしても美玲の行く店ってそんな感じのがいっぱいあんの？」

少し気になったことを聞いてみる。

この世界にコスプレ専門の店があるとは驚きだったので場所を聞いて行ってみるのもいいかもしれない。

「はい、色んな趣味嗜好の服が取り揃えられています。それに、防御力にも優れてるんですよ。リンのは下から数えた方が早いような安物ですけどね」

そんなフリフリヒラヒラのメイド服に防御力が存在していることにビックリだよ。

まあ、ジャージで迷宮に入って、これの防御力に助けられている俺が言うのもなんだけどな。

「ふーん。ナース服はある？」

「ナース……ですか？ まあ、着ぐるみもありますけどお茄子は見かけたことはないかもしれません」

なんか微妙な話の齟齬が感じられるな。

「それにしても美玲ってメイド服買ってたんだな。どっかの屋敷に仕えてたときに支給されたんだと思ってた」

「リンはご主人様以外に仕えたことありませんよ？」

なるほど。仕えるべき主を探していたはぐれメイドが俺を理想の主人として見出したわけか。

「そもそもこのメイド服はリンの趣味ですし」

「……………マジで？」

驚愕の事実だ。

メイドかと思っただけの趣味かよ。

「でも、この服を着ている時はリンはメイド以外の何者でもありません。ご主人様はリンに何でも命令していいんですよ?」

美玲が俺の瞳を見つめながら徐々に近づいてくる。

もういつそ体から沸き上がる衝動に身を任せちまうか。

なんて考えていると店の扉が開き、中へ人が入ってくる。それはとても見慣れた人だった。

「リカちゃん?」

そう、入って来たのはリカちゃんに他ならなかった。

「いやー、通りでセレナに声をかけられたもんで来ちった」

セレナめ、知り合いに声をかけるとはやりおる。

「ついでに連れてきたから」

リカちゃんがそう言うとその姿の後ろからセレナが入店してくる。

「あれ、まだ時間は残ってますよ? お客さんだけ呼び込めば戻って来なくても大丈夫ですよ?」

セレナの姿を見た美玲が声をかける。

「ば、場所がわからなくなっただから仕方ないだろっ!」

セレナが声を荒立てる。

どうやら俺達は致命的なことを忘れていたらしい……

無駄な女の戦い（前編）（後書き）

なるべく早く次話を投稿できるよう頑張ります

無駄な女の戦い（後編）

「とりあえずセレナさんは、お客様を一人連れてとゆーか連れられてきたので20ポイントです」

出戻ってきたセレナに美玲^{メイリン}が告げる。

「なにになに？ 20ポイントってなんなん？ もしかしなくても面白いことしてるん？」

事情を知らないリカちゃんが食いついてくる。

俺はそんなリカちゃんの問いに面白いかどうかを別にして、と注釈をつけて一から説明してやる。

「へー、どっちが頭を下げるかの勝負か……面白そうだけど、アタシは仕事の休憩時間にお昼をとり外に出たら、道の真ん中で焦ってるセレナに出会ってここに連れてきただけだからずっとは見れないんだよね。ま、せっかくだからここでお昼をとるけどさ！」

そう言つてリカちゃんは俺の隣に座る。

そして適当に注文を済ませた。

「それにしても、セレナの方向音痴を忘れたな。こりゃこの勝負セレナに不利だったな」

思ったことをそのまま言う。

これが事前に知らされていたのなら、地図付きのチラシでも配ればオールオツケーなのだがそういうわけにもいかない。

「ソーマ、手伝え」

「あ、それイエローカード。つまりは反則ね。オリビアさんが一人で呼び込みやつている以上セレナも一人でやるべきだ」

「ばれなければいいだろ？」

悪い子だ。いつからこんな娘になっちゃったんだろう……

「う……、お前にそんな目で見られるとは私も堕ちたものだ……だけれどこのままでは負けてしまう」

なんかひっかかる言い方しやがるな。

まあ、いい。なにか打開案を考えねば……

しかし、店の場所書いたプラカード的な物を持たせるくらいしか案がないな。いや、そうではなく紙に書いた物を持たせるだけでいいのでは？

などと俺が皆が納得できる妙案を考えていると、

「別にお店の前で呼び込みすればいいよ。人通りは少ないけど、ゼロじゃないっしょ？」

とリカちゃんが発言する。

確かにこれは一理ある。店の目の前で呼び込みをすれば迷子になるなんてまずない。それでも迷子になるならもうどうしようもない。ただ、リカちゃんの言う通り、この店があるのは人通りの少ない閑静な通りであるから人を集めるのは厳しいことこの上ない。

「それでは人が……」

「うん、それがいい」

食ってかかろうとしたセレナの言葉を遮る。

「チャンスは少ないけど、セレナの力だけでオリビアさんと勝負するにはこれしかない」

「勝手に決めるな。私が本気を出せば……」

「じゃあ本気を出して数少ないチャンスを全部自分のものにしなよ。大丈夫！ この勝負で負けても次で取り返せばいい」

どうせ一気に百万ポイントくらい貰えるだろうし。バラエティの基
本だ。

「わかった……店の前でやる。だが、負けたらお前もあいつに頭を
下げるよ」

俺の説得が効いたのかセレナがそう言い残して店の外に出る。別に
一緒に頭を下げるくらいなら気にしない。それで何かが楽になるの
ならどっちが勝っても一緒に頭を下げようと思う。

それがある意味火種を持ち込んだ俺のけじめってやつだ。

外を見れば早速たまたま通り掛かった親子に話し掛けてるセレナが
見える。

「つかもう人を見つけたの？」

運がいいな。

そして制限時間が過ぎ、結果発表となった。ちなみにリカちゃんは
仕事があるのでギルドに戻りました。

「結果発表です。まずはセレナさん、連れてきたお客様は四人。合
計80ポイント。対するオリビアさんはゼロ人。得点はなしです。
よって、これまでの総合得点はセレナさん100ポイント、オリビ

アさん80ポイントです」

美玲が結果を述べる。

あれからセレナはリカちゃん以外に客を呼び寄せることに成功した。一時間に五人しか通らなかつたのにそのうちの三人を連れてきたのは凄いことではないだろうか。

対してオリビアさんは人通りの多い道を選んで呼び込みをしていたのだが、一人も集めることができなかった。時間切れを告げに行つた時にちらりと見たけど、店の場所の説明して「行きなさい」って命令してたもんな。そりや来ないって。世の中には命令されたがりな人もいるが、その人達に当たらなかつたのが運の尽きってやつだ。結果的にセレナが逆転する形になった。しかし、その差は少ない。

「さあ、接戦になつて白熱して参りました。次が最後の勝負です。最後は運の勝負です。ここに一から十までの数字が書かれたカードがあります。色の違うものが四組、合計四十枚です」

そう言つて美玲が懷からカードを取り出す。そして数字の部分が見えるようにズラツと並べる。美玲の言う通り一から十まで数字が赤、黒、青、オレンジの四色それぞれにある。なんか、絵札のないトランプみたいだな。

「これをシャッフルして裏返しにしたカードをお互いに選んでひっくり返します。とにかく、数の大きい方が勝ちです。数が同じ場合はドローということとどっちにも得点は入りませんが、勝つたら30ポイントです」

美玲が勝負方法を説明する。

なるほど、確かにこれは完全に運だな。いかさまをされたらその限

りではないが、カードは美玲が用意したものだ。事前に仕込むのは不可能に近い。まあ、シャッフルしたのを目で追って数字のでかいカードの場所を記憶したとか言われたらどうしようもないけど……

「勝負は十回。セレナさんが五回、オリビアさんが六回勝った時点で勝負が決まります。シャッフルはリンとご主人様が行います。よろしいですか？」

今のよろしいですか？　は俺に向けられたものだ。それに頷くと美玲からカードを渡される。受け取ったそれをシャッフルして美玲に渡すと、美玲もシャッフルしてカードをテーブルの上に並べていく。

「さあ、どちらがより強運か勝負です」

こうして始まった第三戦、運での勝負。結果はダイジェストでお送りしよう。

一回目、四と七でオリビアさんの勝ち。

二回目、五と五でドロ―

三回目、十と八でセレナの勝ち。

四回目、三と一でセレナの勝ち。

五回目、八と三でセレナの勝ち。

六回目、二と六でオリビアさんの勝ち。

七回目、四と一でセレナの勝ち。

そして八回目。

「私はこれだ」

セレナがカードをめくる。出てきたカードの数字は十だ。これでオ

リビアさんがどんなカードを引こうともドロー以上の結果は出ない。それにプラスして今現在の二人の総合得点の点差は80ポイント。あと、二回の勝負ではどう足掻いてもオリビアさんに勝機はない。ここに勝負は決した。

「な、納得いきませんわっ!」

オリビアさんがテーブルを叩いて立ち上がる。

「こんな運で勝敗を決めるなんてちゃんちゃらおかしいですわ」

「いや、でもほら、一応勝負は勝負だし……」

「お黙りなさいっ!」

憤慨するオリビアさんを宥めようとするが、一喝されてしまう。

「貴女はこんな結末で納得ですか? セ……………どうなんですの貴女っ!」

名前言おうとして諦めやがった。

しかも強引に誤魔化したし。

つかセレナは勝ったんだから納得もなにも……

「確かにな」

セレナが立ち上がる。

って、納得言っていないの?

「運で勝つても、勝負に勝った感じがいまいちしない。だが、どうやって決める?」

「決まってますわ。女なら『コレ』ですわ」

そう言つて握り拳を見せるオリビアさん。

「いいだろう。表に出ろ」

セレナも『コレ』とやらに了承して二人揃つて店の外に出ていってしまう。

二人が言う『コレ』とは十中八、九拳で語るものだろう。つーかそれって女ならつて頭に付くもんなのか？ 普通男ならつてやつだろ。異世界には女が拳で語る文化があつたのか。

とゆーか

「今までの勝負の意味なくね？」

「ありませんね」

俺の呟きに美玲が応える。

昼からの時間が無駄になった。いや、面白かつたは面白かつたんだけどよ。

二人に遅れること二分ほどして俺らも店の外に出る。まだ、闘いは始まつておらず、二人はお互いを正面に睨み合つていた。

「非力なダークエルフがワタクシとタイマン張ろうとはいいい度胸ですわ」

「ふん、単細胞の竜族ごとき捻り潰してやる」

今は口上を述べる段階か？

つーか二人共武器は持つてない。オリビアさんはわからんがセレナは弓がなくて大丈夫なのだろうか。つーか単純に十五階層に到達したばかりのセレナよりは二十階層に到達しているオリビアさんの方

が強いはずだ。

「お互い、殺すのはダメだぞ」

色々と言いたいことはあるが、空気がピリピリしすぎてなんとも言えねえ。

藪をつついて蛇が出たりしたら嫌だからな。どうしても危なくなったら命を懸けても止めよう。そう美玲にアイコンタクトを送るとそれが伝わったのか美玲が頷いてくれた。

「最初に言っておくが私はお前が泣くまで殴るのをやめない」

セレナ、カツコイイじゃん。ただ女はいつでも泣ける生き物だから意味はないだろ。

「ならワタクシは総ての穴という穴から汁を垂れ流させてあげますわ」

「なぬっ!？」

おっといかん。ついつい邪な思考が脳内に溢れそうになった。オリビアさんはセレナに対抗して言ったただけだ。他意はないに決まっている。それにしても、反応したのは脳だけか……。もう少し若かったら違うところも反応したのかな……。某探偵小僧と違って体は大人、頭脳は中坊なのか俺は……

そうこう考えているうちに辺りが静かになる。口で語るのはやめたようだ。なら、次は……

「いくぞっ!」

「参りますわっ!」

とうとうはじまった。女同士のリアルファイト。

「逃げずに戦いなさい」

そこからは二人で追いかけてこのようなものがはじまった。本来なら後ろ向きに進むセレナよりも前に進むだけのオリビアさんの方が速い。だが、二人の装備の違いがスピード勝負の天秤を僅かにセレナに傾けた。オリビアさん、重鎧の装備が仇になったな。

[illegible]

「殴る必要はない。もう、私の勝ちだっ！」

へぶつ

勝ちだな。

つか

「飛び道具はずりーよ」

「転びそうになった時に石を拾ったのは注意していれば気づいたはずだ。だから対処のしようもあつたからずるくない」

屁理屈だ。対処がどうのこうのじゃなくて拳じゃなく石を投げて相手を倒すと言う行為がずるいんだ。

「とにかく、勝ち勝ちだ。さっさとこの女を起こして私に詫びをいれさせる」

つかつかとオリビアさんに近づいたセレナは彼女を起こすため肩を揺するうと手を伸ばした。

だが、その手を掴む者がいた。

「飛び道具が卑怯でないと云うのならやられたフリも卑怯ではありませんわよね？」

「き、貴様っ……」

オリビアさんだ。なんとやられたフリをしていたらしい。お嬢様っぽい外見からは想像つかないような泥臭い戦法なのは目を瞑ろう。

「お返しです、わっ！」

掴んだ腕を引き寄せ、起き上がり様に頭突きをセレナにお見舞いするオリビアさん。

「くっ……」

「によっ……」

普通に痛がるセレナだが、なんだかオリビアさんの方も痛がっている。どうやらセレナに石を当てられたところにまたしても当たってしまったらしい。

二人して額を押さえている姿はなんだか滑稽だ。

「よくもやった、な」

「がふっ」

オリビアさんよりも早くダメージから立ち直ったセレナがオリビアさんに追撃をかける。なぜか頭突きで。

「ひたかみまひたわ、このっ！」

やり返すオリビアさんもなぜか頭突き。

それからは頭突きの応酬だ。

いや、殴り合うよりはいいんだけどなんで？

「くのっ！」

「このっ！」

意地になってやり合ってるだけか。

なんか二人共額が腫れ上がってきたような気がするんだけど。

程なくして二人が同時に倒れ込む。

そりゃそうだ。お互いに軽く百近く頭突きをしあったんだからな。

「なかなかやりますわね。セ……なんちゃらさん」

「セレナだ。お前もやるな」

「セレナさんですか、覚えましたわ。ワタクシはオリビアⅡNⅡア
ンリですわ」

「オリビア、これからよろしく頼む……」

「ええ、よろしくですわ。セレナ、さん……」

倒れた後に二人が言葉を交わす。そしてほぼ同時に意識を失った。
どうやら和解したようだが、どこの青春ムービーを気取ってんだこ
いつら……

「頭突きばっかで飽きましたね」

「飽きたとか言うまえに二人の心配しようよ」

美玲を窘めながら二人を喫茶店内に運ぶ。

当然ではあるが、二人とも命にかかわる怪我はなかった。だが、時
間が経つとみるみる腫れ上がっていった二人の額を美玲は笑ってい
たが、俺は笑えなかった。

頭突きってこえーよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7922q/>

Another World Labyrinth

2011年6月1日12時35分発行